

一、夜は十時就寝。眠れても眠れなくても、必ず身體を床上に横へてゐること。
なほ、作業中の注意の二三を附加すると、――
一、作業は他の患者との共同作業よりも、なるべく單獨作業の方がよい。特に最初の三四週間は、一層單獨作業が大切である。

一、作業中、他の患者と雑談したり、または互ひに症状を語り合つたりしてはいけない。そんなことをしてゐると、訓練が自然おろそかになつたり、または、他の症状の悪い暗示を受けたりして、治癒が後れる。

一、作業は指導者から命ぜられるよりも、自分で捜し求めてする方がよい。その方が一層早く作業に興味が出て来て、治病に好影響を與へることも大きい。

一、作業は決して先を急いだり、また結果を焦つたりしてはならない。今日出来上らなかつたら明日、明日出来切らなかつたら明後日といふやうに、毎日ゆつたりと、確實にやるがよい。すべて結果のみに重きをおくと、とかく焦り氣味になつて苦しい。それは治病の道ではない。結果よりも、寧ろその道程を楽しむ心掛けてやらなければならぬ。

一、一つの作業の終る毎に、やれ／＼と休息するやうてはいけない。一つの作業が終つたら、直ぐまた次の作業に、否、たとひ一つの作業が完成せずとも、その作業が甚だ骨の折れる仕事であつたり、または單調で興味の湧かないときなどには、その間へちよい／＼と他の仕事を交へても差支へない。寧ろ仕事をくる／＼と轉換させる方が、心の休養にもなり、また能率も擧る。

一、従つて作業は、常に何でも來い主義でやるがよい。すべて仕事を適宜に轉換させることは、縁に腰をかけて休んで見たり、手を拱いてぼんやりしてゐるよりも、もつとよい意味での休息になることを忘れてはならない。

一、この作業訓練を開始して最初の二三日目は、誰でも身體中の處々が痛んだり、だるくなつたりして、どうにも堪へられないやうな苦痛に打たれるのが常である。しかし、それは今まで樂をしてゐて、弛緩状態にあつた筋肉纖維や、腱や、關節や、その他身體の諸臓器が、急に活動に入つて緊張状態になつたための結果に外ならないので、決して心配はないから、そのまゝ、忍耐してやるがよろしい。さういふ際に、一二日も休養するやうては、すべてがまた以前の弛緩状態に逆戻りして、再び元の李阿彌となつてしまふ。反對に、忍耐して押通してゐるうちには、活動の

習慣がついて、最早や何ともなくなり、自分にも筋骨の發達と、體力の増進とに氣づくやうになるであらう。

以上が、私の療養所で實施してゐる、規律的作業訓練療法の大要であります。

この療法を、少くとも二ヶ月間乃至三ヶ月間眞面目に實行するにおいては、先づ患者の體重に著しき増加を來し、(今日まで多數の全快者中、滿三ヶ月の終りに於て、最も少いのは八百匁、最も多いのは二貫二百匁の増加を見ました。まるで虚言のやうな話です) また、日々の作業中、いろいろの困難や苦痛に會つて、それに抵抗し、打克つて行くため、或は感情の練磨となり、或は意志の鍛鍊となつて、こゝに患者の性格は根本的に改造せられ、再び以前の環境や刺戟の中に歸來しても、容易にヒステリーの發作を繰返すやうなことはなくなるのであります。これが即ち全快であります。

第七章 ヒステリーの全治した實例

第一例 多産から誘發されたヒステリー

四十一歳の婦人、某省技師の妻。

先づその遺傳歴からいふと、叔母に一人激しいヒステリー患者を出してゐる。父は五十七歳で胃腸病のため死亡したが、母及び六人の同胞は、すべて健在である。

本人は生來内氣で、小膽、温順であつたが、時には寧ろ因循で、且つ執拗なところもある。七歳の時中耳炎を患つて以來、左耳が聾してゐる。十六歳の時肋膜炎に罹つた外、著患はない。出生以來、両親の手許で愛撫され、結婚後も非常に恵まれたる境遇にあつて、精神的にも物質的にも、何一つ不自由なく、極めて幸福に、且つ順調に生立つて來た。教育は地方の某高等女學校を卒業してゐる。

十八歳の時結婚。その翌年に長男を擧げてから、今日までに、前後十回分娩してゐる。最初の

五回は別に變つたこともなかつたが、第六回目頃から、妊娠さへすると多少精神に變調を來し、幻覺または妄想的觀念に襲はれるやうになり、特に産前産後においてそれが激しい。尤も第八回の妊娠の時は、三ヶ月で流産したので、先づ無事に済んだが、その代り第九回目の妊娠の際は、精神變調が可なり甚だしかつたので、人工早産を行つてゐる。今度の病氣は、彼女が第十回目の分娩を終つた後に起つたものであつた。

いつもならば、産前産後に多少の精神變調があつても、分娩してから一二月も経つと、次第に平靜に復歸したものであるが、今度は分娩後既に數ヶ月以上も経過してゐるのに、精神變調はますます烈しく、盛んに獨語空笑を漏らし、何處からか電氣が身體にかつて來るといつては、度々寢床を取りかへ、またその良人は品行方正の人であるに拘らず、激しい嫉妬妄想を起し、屢々自殺企圖を試み、細紐を首に巻きつけたり、伊達巻を梁に引つかけたりする。家人はおち／＼夜も眠られない。終に家人がその治療方を私に相談に來たので、私は取りあへず、その當時私の勤務してゐた某醫大精神科の病室に彼女を收容して、専ら治療を引受けることになつた。私が初めて彼女を診察した時、彼女には非常に多くの幻覺や妄想的觀念が現れてゐた。

先づ幻覺としては、前にもいつた通り、何處からか電氣が身體にかつて來るといふ幻觸、何人か、匿されたる仕掛をして、臭素剤を頻りに嗅がせるといふ幻嗅、變な恰好をした人の姿が、時々夢のやうに自分の眼前を通り過ぎるといふ幻視などがあつた。尤も彼女は、二十二三歳の頃、鼻加答兒か何かで、コカインを使用し始めてから、屢々コカイン中毒に罹つたこともあるとのことであつた。

次に妄想的觀念としては、家人のすべてが彼女を邪魔物にして、彼女の悪口をしたり、陰口を云つてゐるといふ被害妄想的觀念、周囲の事情を悉く自分に關係ある如く邪推する關係妄想的觀念、良人に對する嫉妬妄想的觀念、數年前に旅行中客死した伯父の死靈が憑いてゐるのではないかといふ憑依妄想的觀念等があつた。

その他の所見としては、脈搏頻數、心臟搏動亢進、瞳孔や、散大、光線反應敏速、筋肉反射亢進、デルモグラフィ顯著、膝蓋腱反射全く消失、睡眠障礙、食慾減退、また看護婦の言に據ると、床中にあつて、時々獨語、空笑があり、時にはまたしく／＼とすゝり泣きしてゐることもあつた。病識(自分が病氣であるといふ認識)は全然缺如してゐる。

『あなたは、自分で、身體の何處かに悪いところがあるとは思ひませんか？』
『そんなことは、私にお聞きにならないでも、先生が御覽になれば、すぐ判る筈ぢやありませんか。』

かう皮肉に答へて、くるりと寐返りを打つて、向うを向いてしまふ。彼女は、家庭から無理に病院へ連れて來られたことに對して、非常に興奮してゐるのであつた。

最初私は、家人から彼女の容態について聞かされた時には、早發性癲呆か、または年齢が年齢だから、麻痺性癲呆の初期で、もあるのではないかと疑ひをかけてゐた。ところが彼女に會つて仔細に診察すると、幻覺は確實に存在してゐるけれども、妄想はまだ確立してゐるとは思はれない。特に嫉妬妄想であるならば、相手の何者であるか、斷然と指名されなければならぬ筈であるのに、それもない。たゞ漠然と妬嫉の情を亢進させてゐるに過ぎない。また同じ幻覺にしても、幻視のみで幻聽が伴はない。それに、割合に理性がある。これらの點から推斷して、私は彼女の病症を、早發性癲呆と見るよりは、寧ろヒステリー性精神病の基礎の方が、より大であると思はざるを得なかつた。で、取りあへず藥物療法としては、定式阿片療法を用ひ、更に一日おきにリ

ンゲル氏液の注射を施すこととし、當分絶對臥褥を取らせることにした。後に、彼女の精神状態が次第に鎮靜するに従ひ、私は視野の検査や知覺障礙の査定を経て、いよいよ彼女がヒステリー性精神病であつたといふ診斷を確定することが出來た。(彼女が麻痺性癲呆の初期でなかつたことは、瞳孔の光線反應を見たゞけても明瞭であつたが、なほ念のために血液検査をして見たところ、果してワッセルマン反應は陰性であつた。)

なほ家人は、彼女が自宅療養中、しばしば自殺企圖の所爲があつたので、專屬看護婦を二名つけて、晝夜交替に監視させてもらひたいと願ひ出たので、私はそれほどの必要をも認めなかつたけれど、ともかく家人の意に任せることにした。

以下『病牀日誌』に據つて、彼女の經過を略述して見よう。

入院第一日

午後九時入院と同時に就床したるも、十二時過ぎるまで安眠を得ず。看護婦に對し、頻りに睡眠劑を請求す。十二時半ルミナル・ナトリウム一筒注射。その後は時々覺醒せるも、比較的安眠す。口渴あり。起坐歩行共に困難。

入院第二日

終日床中にあり。なほ朦朧状態なり。時々獨語空笑あり。食事を拒み、薬剤をも拒む。看護婦が強ひてこれを勸むれば、くるりと背を向けて、一切應答せず。午後五時頃、家庭より使ひの者、日用品など持ち来りしが、別に言葉も交さず、見ても見ないやうなり。夜も十二時頃まで睡眠せず。その後漸くにして眠りにつく。

入院第三日

朝四時頃より床中にて目を覚ます。朝食時床上に起きなほりしも、洗面結髪を拒む。回診時にも主治醫(余)の診察を拒み、看護婦の助力によりて漸く診を受く。終日緘黙。但し、時々獨語空笑あることは前日に同じ。夜は九時頃より安眠す。

入院第四日

午前二時頃より目を覚まし、幻視ある様子にて、時々窓の方を見つめ、頻りに『あんなものが見える』とか云ひるたり。

十時回診。身體的には別に異變なし。十時半、初めてリングエル氏液の靜脈内注射を開始す。注

射中も時々獨語空笑あり。顔貌は全然無表情。午後三時頃より一時間ほど起坐。その後はまた床中にありて、時々しくくと泣く。看護婦その理由を問ふも、一切答へず。夜に入りてより、

『床の中に、何か蟲がゐるから拂つてください。』

と、頻りに看護婦に訴ふ。なほ朦朧状態の繼續中なり。午夜を過ぎて、午前四時に至るも、なほ睡眠せず。夜の明け方になりて漸く眠りにつく。

入院第五日

朝十時頃目を覚まし、自發的に洗面結髪の後、一時間ほど起坐。但し、食事は依然として進まず。その後はまた終日横臥、絶對緘黙を守る。二三日來便秘。夕方浣腸を施す。夜八時頃より獨語空笑盛んに起る。午前一時に至り、漸く眠りに就く。

入院第六日

午前六時起床。自發的に洗面、結髪、薄化粧をも施し、暫く病室内を歩行したりしが、九時前より再び就床、無言にて、頭より蒲團を引被り、時々しくくと泣きたり。十時診察、一時リングエル氏液靜脈内注射。午後は時々床上に起坐し、獨語空笑甚だしく、時にはまた泣く。

夜十一時頃より睡眠したるも、時々目を覺ましては泣き出たり。

入院第七日

午前七時起床。洗面後朝食の膳に向ひしも、漸く一椀の半ばにして、茶碗と箸とを持つたまま、膳部に頭をおしつけて、そのまゝ、假睡すること約二時間。看護婦が起して膳部を片附けんとすれば、口汚なく怒りてこれを斥く。十時回診の時も、なほその状態のまゝなり。漸くにして診を終る。その後も疊の上に伏臥したるまゝ、晝飯も晩飯も攝ることを拒絶す。夜になりても蒲團の中へは入らず。『蒲團の中には電氣がかゝる』または、『いろいろの蟲が這ひ來る』などの幻覺に基くものらし。また患者は今日一日小用に立たざりしゆゑ、午後十時カテーテルにて導尿を施行せしめ、約三〇〇グラムを攝取す。終夜、疊の上に横はりて安眠せず。いかに看護婦が注意して、床の中に入れんとするも、頑として應ぜず。

入院第八日

前夜來依然として疊の上へあり。今日は拒絶症最も激しく現れ、食事、入浴、診察、注射等、一切を頑固に拒絶す。治療室に來る際も、患者拒みて一步も歩まざるため、二人の看護婦をし

て、無理にかつぎ伴來らしむ。リンゲル氏液の靜脈注射を行はんとするに、抵抗して危険甚だしきを以て、已むを得ず靜脈を中止して皮下に行ふ。今日も患者は前日の如く、終日拒食して、床にも入らず。疊に臥したるまゝ、時々手足をばたくと動かしたり。

入院第九日

午前七時目を覺ましたるも、依然として疊に臥したるまゝ、洗面もせず、食事も攝らず、時々手を動かしをり。午後カステラ少量を食したる外、何物をも口にせず。看護婦が無理に食物を攝らせんとすれば、兩唇を固く閉ぢて、終にはぶつとあたりへ吹き飛ばす。午後六時より二時間ほど安眠。その他は半醒半睡の模様なり。

入院第十日

今朝初めて朦朧状態より覺醒したるが如く、午前八時起床。洗面、結髪、すべて自らす。恰も春蠶の眠期より覺めたるが如し。九時朝飯、食慾も頓に加はる。診察終りて、沐浴、洗腸。晝食、晩食と食慾ますます亢進す。午後六時、家庭より使者來る。初めて言葉を交し、事づけなどす。九時頃『身體が痒し』とて、頻りに全身を掻き出たり。午夜より安眠す。

入院第十一日

午前七時起床、洗面、結髪、食事、共に自らす。診察、リンゲル氏液注射。午後は病室内をあちこちと歩行す。今日初めて尿の検査を遂ぐ。實は以前某醫に就いて診察を受けたる際、尿に蛋白も糖分もあり、暫くその手當を受けたりと旨、家人より聞きしゆゑ、一應検尿の必要を認めたりしが、患者、入院以來引續き朦朧状態にありたるため果さず、今日漸くその目的を達したるなり。尿所見左の如し。

性状 酸性

比重 一〇二二

蛋白 ズルフォサリチール酸試験 陰性

ヘルレル氏輪環試験 陰性

煮沸試験 陰性

糖分 ヘーンス氏試験 陰性

ニーランデル氏試験 陰性

以上の如く、蛋白、糖分共になきものと判明す。夜間安眠。

入院第十二日

午前七時起床、洗面、結髪、化粧、すべて自らすること前日の如し。食慾はますます良好。時時床を離れ、病室の窓より外を眺めるたり。夜間安眠。

入院第十三日

午前七時起床。洗面、結髪、化粧、例の通り。九時入浴。十時リンゲル氏液注射。浣腸。午後六時、家庭より使者来る。面會するも別に變りなし。食慾ますます良好。日中は大抵褥上に起坐、夜は安眠。

入院第十四日

午前八時起床。洗面、結髪、化粧、食事、すべて變りなし。日中は大抵起坐。時々窓より外を眺む。夜は安眠。

以上の如くにして、彼女は、今では全くヒステリーの朦朧状態から恢復し、その後も日にく

元氣づいて来て、顔色もよくなり、表情も現れ、醫師や看護婦に對する挨拶も、教養ある婦人の

しとやかさに復り、入院當時（身長五尺二分、體重四四〇キログラム）よりは、次第にその體量を増すやうになつて来た。

入院後第十七日目に、私は診察の際、

「近頃は御氣分は如何ですか。」

と問うたら、

「お蔭様で大分能くなりました。」と丁寧に答へる。

「御自分にも、よくなつたことが判りますか。」

「はい、頭腦も身體も、よほど確りして来たことがよく判ります。」



婦るあ養教くやうやに目日七十は女彼
(..... たつ復にさかやとしの人)

「夜分もよくお寢みになれますね。」

「はい。お蔭さまでよく寢みます。」

「御家族の方が、ちつとも御面會にいらつしやらないので、お淋しくはないですか。」

「い、え、別に……」

「これは私が、特に御面會にいらつしやるのを謝絶してゐるのですから、御家族の方を悪く思つてはいけませんよ。」

「はい、……」

「かういふ御病氣の時には、御家庭から絶対に隔離されるといふことが、一番必要なのですから、決して悪く思つてはいけませんよ。」

「最初は私も取り違へをしてをりまして、先生を怨んだり、家族を怨んだりしてをりましたが、近頃はそれが、よく判るやうになりました。」

「いつ、この病院へいらしたか、日を御存知ですか。」

「い、え、日は全く憶えてをりません。」

「それでは、おほよそ今日で何日ぐらゐ経つたとお考へですか。」

「それも、一はつきりとは判りかねます。」

『入院なすつたのは×月×日、今日で二週間と三日になりますよ。』
『まあ、そんなですか。どうも記憶が悪くて困ります。』

その翌日から、彼女は看護婦に連れられて、日中は時々病院の庭内を散歩するやうになり、また多くの齶歯にも悩んでゐたので、毎日、同病院内の口腔科へも通ふやうになつた。入院後第三週間頃からは、閑がある時、病室内で讀書や習字に耽り、また散歩の範圍も次第に擴大されて、折々は看護婦と共に、買物旁々町へ出かけることもあつた。五週間目になつて、入院後第二回目の月経が始まつた頃、(第一回目の月経は、入院當時の朦朧状態中であつた。)前後二三日間一寸興奮の氣味で、拒絶的な症状も現れたが、それが濟むと、彼女の経過は、また良好となつて、第七週間に入つては、リンゲルの注射を受けること前後二十二回、齶歯の治療も全く終了し、身體の状態も殆ど病前と變りなきまでに恢復するに至つた。さあ、これから私からが肝腎の時期である。彼女のヒステリー性格を根治するには、これから私の持論に従つて、更に數週間の規律的作業訓練療法を通過しなければならぬのである。

しかし、世間一般の考へては、病人が此處までよくなつて來ると、患者自身は勿論、家族の人も、いな醫者自身でさへも、もう病症は全治したものと速断したがるものである。この患者もまたその御多分に漏れず、齶歯の治療が一段落つくと、そろ／＼退院の準備を急ぎ出し、またその家庭からも、何處かの温泉場へ保養に伴れて行きたいから、是非退院させてくれと申し出て來た。で、私も遺憾ながらその意に従はざるを得なかつた。

私の意見を露骨に此處に告白すれば、彼女は世間並には全治退院したのである。しかし、その實は、單にヒステリー性精神病の諸症状が一時鎮靜しただけであつて、その根本のヒステリー性格は、依然としてなほ彼女の中に残つてゐるのである。故に彼女は今後、また場合によつては、何時再發しないとも限らないのである。(本書第六章D参照のこと)

第二例 良人の秘密から誘發されたヒステリー

三十四歳の婦人。某會社員の妻。

父は六十五歳の時腦溢血で死亡し、母はなほ健在。同胞四人の中、一人は早世したが、他はすべて健康である。地方の某高等女學校を卒業し、十八歳で結婚。子供二人、また共に健在。

身體は頗る強健で、これまで病氣らしい病氣をしたことがない。それが本年二月に、ふとした家庭の事情から、突然、大なる痙攣発作を起して、殆ど譫妄状態を呈し、非常に刺戟性、興奮性となり、嫉妬心深く、且つ猜疑的で、頻りに良人を口汚く罵つて止まない。最初は、婦人科の醫師に診察を請うて、子宮内膜炎の診断を下され、直ちに入院治療を受けて、謂ゆる患部は程なく全治したが、譫妄状態は少しも止まない。己むなく、次にはまた耳鼻咽喉科の醫師にかゝつて、約一ヶ月ほど鼻加答兒の治療を受けたが、なほ譫妄状態は止まない。更にまた五月に入つてからは、或る有名な山師坊主の精神治療を受け、最初暫くは多少の效驗もあつたやうだが、結局何の役にも立たないことが判明し、寧ろ却てその刺戟性を増させたに過ぎなかつた。遂に八月の末になつて、良人と實母とが附添の上、患者を私の療養所へ伴れて來たのであつた。

『その、或る家庭の御事情といふのは、どんなことでせうか。大體お漏らしく下さることは出来ずまいか。』

私はかう率直に、その良人なる人に訊ねた。その人は、一見したところ、患者の父親ではないかと思はれるほど、年齢が違つて見えた。

『なに、詰らないことです。……實は最近に私の親戚の一人で、永らく教育事業に關はつてゐた者の傳記を贈つて來たのです。その中に、私にはこの家内と結婚する前に、許婚の女があつたやうに書いてありました。それを見てから根も葉もないことまで疑ひ出して、終には興奮して發作を起すやうになりましたので……』

と後を濁す。

『全く、みんなこれが悪いのでございます。小さい時から我儘に育つたものですから。母親の私の目から見ましても、娘には少しも同情すべき點がございません。ほんとにこの人（婚の方を向いて）にはお氣の毒です。この春以來の娘の病氣のために、どんなに心配してくれたか知れないほどです。顔も形貌も、見違はずほど瘦せてしまひまして……』

と、母親は傍から口を添へる。私はこの良人が、細君とは非常に年齢が違つて見えるのも、そんなことのためかと氣の毒に思つた。

この間、患者は一言も物を云はず、たゞ鋭い目をして、時々母親の顔と良人の顔ををじろくと見詰めてゐた。

私はもうそれ以上、この事件については問ひ返すことが出来なかつた。診察して見ると、患者には、身体的にもヒステリーの徴候が二三現れてゐた。とりあへず、患者を私の療養所へ預ることにした。母親が、當分附添つてもいいやうなことを申し出たけれど、私は、自分の療法の主義として、それを斷つた。さうして患者には、よく療養の主意を話して聞かせた。

先づ一週間の絶對安静(臥褥)を命じた。患者は、私の忠告をよく嚴守した。隔離生活の效驗が、藥物の作用と相俟つて、彼女の意識を次第に明瞭に復歸せしめた。入院當時、患者が頻りに訴へてゐた頭痛や頭重感は、この間に全く除き去られた。睡眠も食慾もよく整つて來た。第二週間目からは軽い作業生活に入つた。この間も、患者は私の指導や忠告に、よく服従した。

第三週間目からは、私の規定に従つて、重い作業生活である。彼女の精神状態も、また肉體の力も、益々良好に進展した。第四週間目の終りに近く、さうして彼女には、既に讀書も、文通も、日記以外の執筆も許されるやうになつた頃、ある日、患者は私に、左のやうな一冊の手記を提出した。それは彼女の發病の誘因を、詳細に且つ赤裸々に告白して、私の指導を求めたもので

あつた。

こんな小事件かとお笑ひになるかも知れませんが、先生にだけは、この腹の中を全部さらけ出し、腹藏なく申し上げずにはゐられないのです。どうぞ私の悪いところは、どしく御申し聞かせ下され、御注意たまはるやう、伏してお願ひ申し上げます。

今から丁度十年ほど前、主人が會社から臺灣の支店長を命ぜられて、一年ほど一人で彼地に住んでゐたことがあります。その當時、臺南に、主人の従妹に當る獨身婦人で、赤十字社の看護婦長をしてゐる者がをりまして、ふとしたことから主人はその婦人と關係を結び、本社へ呼び戻されるやうになつてからも、會社宛て文通いたしてをりました。良人の祕密が妻の心に映じない譯にはまゐりません。私はその當時より、既にその事に感づいてをりましたが、たゞの一言、口に出して申したこともなければ、また動作に表したこともございません。それは會社でも、社長様初め皆さんがよくお遊びになり、中にはあまり遊びに熱中し過ぎて、妻子のあるのも打ち忘れ、卑しい女に随分とつき込み、その揚句、妻を出すの出さぬのと騒いだ方もあるくらゐです。私も

あまりい、心地はいたしませんでしたが、ほんの一時の主人の出来心と思ひ、殊に相手は遠方に離れてゐることゆゑ、そのまゝ大して氣にも留めずに過してをりました。

その婦人と申しますのは、母親が主人の叔母に當りますので、主人とは従兄妹同士の仲になります。同胞が多くて家計が困難であつたので、弟達の學資を貢ぐために、その婦人と姉との二人が東京に出て、看護婦となり、産婆の免状も取り、弟の一人を手許に呼びよせ、間借して三人一緒に生活いたし、その弟を一高に入學させました。(今その弟は農學博士になつて某省に奉職してゐます。)そのうち姉の方は、縁あつて他へ嫁ぎましたので、その婦人は一奮發する積りで臺灣へ赴き、獨身で活動してゐました。主人と關係の出来た頃は、臺南の赤十字社病院の中に部屋を借り、國元から母を呼び寄せて、二人で暮しをり、別の弟(次弟)も近くに牧場を開いてをりました。この次弟は、主人が學資を出してやつて、農大の選科を卒業させたものですが、非常に道樂の遊び好きで、主人が支店長をしてゐた時も、折々は説教に行き、その上道樂のお尻拭ひをさせられ、終に嫁の世話までしてまゐりましたものです。

主人が臺灣から歸つて三年目の春、農博になつた弟の結婚式に參列するため、その婦人は臺

南から東京へ歸つて來ました。その往復には、電報で主人を停車場まで呼びよせ、また結婚式の時には、親戚の間柄とて主人も列席いたし、更に婦人が臺南へ歸る折には、主人が單身で驛まで迎ひに行き、意外にも自宅まで伴つて來ました。何と厚かましいこととせう、と私は思ひました。私と婦人とは、申すまでもなく初對面です。實は、主人も、その婦人も、私が何にも知らないと思つてゐますから、随分晴れやかにいろいろな話をしてゐました。丁度その時、私は二度目の妊娠八ヶ月の身重でした。姑は何にも知らぬこととて、その婦人に一度診察して貰つては、などと申したくらくらです。私は別に何にも申しません。たゞ口を嚙んで、自分で出来る限り款待しました。遠い異郷で、萬人の中に揉まれて來てゐる婦人だけあつて、私など、とても傍へも寄りつけません。時々皮肉なことも申しましたが、私は黙つて堪へました。お腹の子のために……

會社でも品行方正だ、人格者だと思ひ込まれてをりますから、このやうなことは皆様御存知なく、家でも私だけが感づいてゐるのみです。しかし臺南の方では、婦人の母親も弟等もみな知つてゐて、いゝことと思つてゐるらしく思はれてなりません。屹度さうだと斷言いたします。私の心に映るものがありました。……實は支店長てをりました時、内地へ戻る間近に風邪がもとて

肺炎になりかけた時、例の婦人が名醫を伴れて来て看護してくれたから、自宅へも何か御禮を送るやうにと、主人から申し越したことがありました。

厚かましくも、よくも自宅へ来たと思ひますと、馬鹿にされたやうで、實に不快でしたが、何分遠方のことゆゑと心を取り直し、機嫌よくいたしてはをりました。婦人は一泊の上、歸る時も主人一人て驛まで見送りにまゐりました。臺南へ歸ると直ぐ、珍らしくも直接自宅宛て手紙を寄越しました。その内容は、

『私が全責任を負ひますから、牧場を經營してゐる弟のために、壹萬圓ほど金を貸してもらひたい』との文面でありました。主人は、その手紙を母と私とに見せて相談しました。これはあの婦人が先日参りました時、主人との間に既に萬圓の打合せが出来てゐるものに相違ありません。私はあんな婦人に壹萬圓はおろか、百圓の金も貸すのは厭でした。それでなくとも、あの牧場の弟や、博士になつてゐる弟のためには、主人はこれまでも随分と用立をしてゐるのです。しかし、姑の手前もあり、またかの地で病氣の時、主人が世話になつたことを考へますと、無礙に反對する譯にも行きませんでしたので、いや／＼ながら半分と主張して頑張りました。たう

とう半分と定まり、主人は早速送金いたしました。

その年から二年目、主人は再び會社の用事で臺灣へ行くこと、なりました。それは臺灣の支店の方に、何か重大な問題が起りましたので、その調査を命ぜられたのです。尤も今度は、精々一ヶ月間くらの滞在だから、直ぐ歸つて來ると申して立ちました。それが二月になつても、三月になつても、まだ歸つて來る様子がありませんでした。私はこの留守中から、不快で不安で堪へられないことはありませんでした。毎日々々、たゞいら／＼して、何事も手につかず、悩み通しました。支店は臺北にあるのですが、彼地の同僚の親しい奥様からの手紙に據りますと、主人は度々臺南にも出かけてゐるさうです。私は今にも後を追つかけて行きたいやうな、狂はしい氣持に襲はれましたが、乳飲子のある身にはそれも出來ません。たうとう私は、ひどい不眠症に陥りました。漸く四月目の初めになつて、主人がひよつこりと歸つて來ました時には、私は主人の顔を見るなり、

『なぜお歸りになりましたの。あちらで牧場の會計係でもしてゐて、お歸りにならなかつた方がよかつたでせう。』

と、屹となつて申しました。その時は主人も顔色を變へて、一寸恐い目をしましたが、私がすぐ気分を取りなほして、常の如くしましたので、主人は私の言葉の意味を、どう取つたか判りません。よもやその婦人との關係を知られたとは思はなかつたでせう。たゞ妬いてるぐらゐの程度にしか、考へなかつたらうと思はれます。

丁度今年の三月、例の婦人の末弟(某大學生)が、春休みて國へ歸る途中、私宅へ立寄り、この四五月頃、郷里の方で、亡父の建碑式を行ふこと、なつたので、臺灣にゐる母も、姉も、牧場の兄も、一緒に國元へ歸省するよしを話しました。私はこれを聞いて、非常に驚きもし、興奮もしましたが、今から考へますと、この頃はもう、そもく病氣がきざしてゐたこと、思ひます。しかし、まだ私は口をつぐんで、その事については、一言も申しませんでした。それから間もなく、またく次のやうな事件が突發しましたので、たうとう私の病氣も爆發することになつたのです。

それは今申しました『亡父の建碑式』に際し、(その亡父といふのは、永らく村の小學校長をしてゐて、家計には絶えず苦しんでゐましたが、郷里の子弟教育には可なり功勞のあつた人です。)兄弟姉妹が互ひに助け合ひ、導き合つて、艱難とも戦ひ、生活苦をも切抜けて、漸く人と成ることが出来たので、建碑と共に、老校長の歩み來し道や、また子供達の生立つた徑路などを、銘々が互ひに書き綴り、一冊の記念帖として、親戚知己の人々に配布すること、なり、私共へもそれが一部舞ひ込んで來ました。その中に、年若くして死んだ一番上の姉のことに關し、次のやうな一節が出てゐました。

その姉なる人は、雙方の両親の合意により、主人が大學を卒業するのを待つて、結婚する約束になつてゐたが、その期をも見ずして死んで行つた。運命とは云ひながら何や彼やと、こてく書き並べてあつたのです。

病的になつてゐた私の心に、この記念帖の一節は、實にたとへやうもない、ひどい、ひどい刺戟を與へずにはおきませんでした。私は目の前が急に眞暗になつて、胸は張り裂けるやうに、どきくと高鳴り、身體はがたくと慄へて來て、口も利けなくなつてしまひました。これは一體どうなることかと、思ふ間もなく、私はもう苦しくて立つてゐられなくなり、そのまゝ、どつと横に倒れるや否や、全身は棒のやうに硬く突張つてしまひました。主人と子供とが、私の身體の

上に乗しか、つて、ぎうくと押へつけてくれましたが、容易に鎮静しさうにも思はれませんでした。(著者曰く、これがヒステリーの大座敷騒作です。)

やうやく正氣に復りました後、主人と姑とは交るゝ私の枕許に来て、あだかも辯解でもするがやうに、「別に婚約などあつた譯ではない、ましてそんな意思は更になかつたのだが、兄弟達のことだから、そこは宜しく書いたのだらう」と、くどくどと説いてゐましたが、私にはもうそんなこと、耳にも入りません。

それよりも私は、更に二十年前のある事件を想ひ起して、心はますます亢るばかりでした。

實は、主人の家は私の實家とも、元來親戚の間柄で、殊に私の両親は、(父は今も亡なつてをりませんが)主人の性質を見込んで、子供の時から非常に可愛がり、主人が大學を卒業して歸郷した時、私と二人を許婚に定めてしまつたのです。その時私は、まだやつと十四歳の子供でしたから、何にも知らずにをりましたが、主人は勿論萬事を承知の上で受諾したこと、思ひます。尤も私も小さい時から、兄さん、兄さんといつて、懐いてゐたことは記憶してゐます。ところがその歸路、主人は昔世話になつた中學の先生の許へも立寄つたさうです。その家には、丁度女學校を

卒業したばかりの娘さんが、或る縁談の破れから心を痛め、胸の病氣にか、つてぶら／＼してゐるのがありましたが、主人はその娘とつい手紙の往復を始めたのです。そのうち娘は非常に主人を慕ふやうになつて、思ひのたけを繰返し書いてよこすこととなり、主人もまた娘の境遇に同情して、段々引きつけられるやうになりました。最後に主人のまゐりました時は、娘の病氣はとても悪かつたさうですが、しつかりと主人の手を握つて、頻りに結婚を申し込んだので、主人も氣の弱さから、つい全快の上は屹度結婚して上げるといつて、娘を喜ばしたさうです。若し本當に全快でもした時は、片方の私は、まだ子供のことゆゑ、どうにでもなると思つたのでせう。そのうち、娘との手紙の往復一件が、主人の母親の発見するところとなり、早速私の両親へも通知して來ましたので、一時大騒ぎとなり、昔氣質の私の父親などは、もう私との婚約は破談するとまでいつて立腹してゐたことを、子供心にも幾分記憶してをります。しかし、その時は主人が平あやまりにあやまつたので、先づ元通り落着きました。尤もその頃は、娘さんはもう肺のために亡なつてゐました。

このやうな昔の出來事までが、それからそれへと、頭に浮んで來て、私はもう毎日毎日寐てる

でも起きてゐても、ぢつとしてはゐられないやうな、苛々した気分に悩まされ通しました。終に或る日、私は突然床から起き上るなり、螺旋仕掛のやうに主人の部屋へ飛んで行き、いきなり主人の膝に取りついて、あの婦人との過去の秘密を、一切包まず隠さず話してくれと、ぶしつけに要求しました。

「ね、一つの家庭に住んでゐながら、お互に秘密を持つてゐるほど、面白くないことはありませんから、どうぞあの女との今日までの関係を、全部残らず、打ちあけて聞かしてください。」

と、涙を流して嘆願しました。

私のこのだしぬけな、しかも氣狂ひじみた様子に、主人は甚だ迷惑さうな顔をしてゐましたが、それでも態と落着いた調子で、

「何も、そんな、秘密だの關係だのといふことは、ありはしないよ。」



つ行でん飛へ屋部の人主にうやの掛仕ネバ
(……たいつり取に膝の人主りなきいて)

と、何處までも、いらを切る積りてゐます。私は主人のこの態度によつて、一層いらくして來ました。

「あなたは、私が何にも知らないと思つていらつしやるのでせうが、私はもう疾から萬事を知つてゐますよ。あなたが秘密に、大事に保存していらつしやる、あの女の手紙なども、私は残らず讀んで知つてゐますよ。」

と、つい痛いところを突いてやりました。――

「では、もう今までの關係は決して責めませんから、今後は斷然、あの女との關係を斷つてください！」

「そんなにお前が萬事を知つてゐるなら、何にも今更僕に聞く必要はないぢやないか。」

さすがの主人も吃となつていひました。

「僕だつて草や木ではない。無論神様でもないからな。……あれだつて可哀さうぢやないか。一度關係をすると、身體が變るといふからな。」

この言葉を聞くと、私はまた嚇つとなりました。今までは、たゞほんの一時の出來心からあ、

いふ関係にもなつたのだらうと、寧ろ主人の心持にも同情してゐましたが、かうした先々までをも見越しての計畫的な行爲であつたかと思ひますと、今日まで馬鹿にされてゐた自分が口惜しくて口惜しくて、氣が遠くなるほど腹立たしくなりました。たうとう我慢も何もし切れなくなり、私は主人の身體にしがみついて、口一杯に主人を罵りつゞけました。

『あなたは何といふ穢はしい人間です。犬、畜生にも劣つた方です。平素は會社の方々からも、品行方正だの、今の實業界には珍らしい人格者だのと賞めそやされ、一部の人々からは、今尊徳とまで尊敬されてゐながら、そして自分自身でも、二言目には、正義がどうだの、かうだのと、口癖のやうに正義呼はりをしておきながら、十年間も妻を欺き、妻を裏切るとは何事ですか。そんなのが品行方正であり、人格者であるならば、この世の中に、品行方正でない者や、人格者でないものは、一人もなくなるでせう。』

私は自分にも不思議なくらゐる、いろ／＼な言葉が丁度謔言のやうに、べら／＼と口を突いて出るのを、どうしても止めることが出来ませんでした。

『さあ、もう一度私の目の前で、あなたの好きな正義の講釋をしてください。正義とは、妻を欺

き妻を裏切ることであると。何が品行方正だ、何が人格者だ。あなたのやうな穢はしい人間が、
：犬が……畜生が……』と果てはしどろもどろになつて、またどつと床の上に倒れながら、なほも口汚く主人を罵り續けました。(註。これがヒステリーの錯亂状態。)

さすがの主人もたうとう兜を脱いで、過去の一切を擧げて私の前に陳謝し、どうか二人の子供のためにも、落着いてくれるやうにと、頻りに慰めました。しかし今の私には、もう何事も耳には入りませんでした。その後私は故意にわが儘のありたけをいたしました。主人もこれには閉口した様子でした。もし二人の子供がゐるなかつたら、私達の間は、もうお互ひに元の鞘には納まらなかつたこととせう。

それから私の所謂療養生活が始まりました。最初は婦人科、次は耳鼻科、最後には催眠術や靈術療法。これらは私がこちらへ入院の當時、既に主人から先生へ詳しく申し上げた通りです。しかし何の效驗もありませんでした。婦人科の病院から歸つた後も、正義のこのみか頭にこびりついて、主人が厭で／＼逃げてばかりをりました。仕事などはてんでする氣にもなりません。たゞ家の中をぶら／＼として、胸には云ひたいことが一杯に溜つて、主人の顔さへ見ると、云ひ

争ひたくなつて困りました。夜も一睡りしてから、二時間くらゐ大きな聲で何かと喚き散らし、疲れると自然に聲も小くなります。言はないでゐると苦しいので、言つてしまふと、少しは樂になりました。喚く時には目をつぶつて、身體を揺り動かしてゐたさうです。委しくはあまり記憶してをりません。(註。これがヒステリーの謔妄状態。)

靈術療法を受けてゐた時も、家へ歸つたとて、仕事は手につかず、主人はやはり顔を見るのも厭で、毎日、活動寫真だの、何だ彼だと、たゞ方々へ遊び歩きました。しかし、何處へ行つたとて、少しも面白いことはありません。世の中がたゞ暗黒になつたやうで、どんな人にも信頼が出来なくなり、生きてゐるのが馬鹿らしく、さりとて死ぬだけの勇氣もなく、實家の母からは、一度保養に歸つて来てはどうかと、度々勧められました。それも歸るだけの決心がつかず、自分で自分の心を解することが出来ないで困りました。考へて見れば、私の病氣は、主人が二度目の臺灣行の頃から、もう大分變つて、それから年一年と益々ひどくなつたやうに思はれます。つまらぬことにも泣きたくなつたり、腹が立つたり、しかも自分にもその理由が分らないのです。人と顔を合せるのが厭で、話し合ふのが一層辛く、無暗に感情に走り易くなり、人様の氣持を悪くし

はしなかつたかと、あとで心配することも幾度あつたか知れませんが、また實家への手紙も段々と遠のき、薄情者と誤解されて、母から叱られたことも屢々ありましたが、たゞ何事をするにも興味がなく、氣無性になつて困りました。

それが今度の病氣の爆發となつてからは、何事も徹底的に破壊してしまひたくなつて、初めて姑にも實家の母にも、十年來の事實を打明けてしまひました。姑は、今後どんなことがあつたとて、あの女を再び家へは寄せつけまいと申しますし、また里方の母は、なぜ十年間も一人で黙つて心配してゐた、もつと早く話せば、穩かに解決する方法は幾らも有つたのに、と申してくれました。しかし、これだけではまだ私の胸は治まりがつきませんでした。婦人科病院に入院してゐた或る日、あまりに腹が立つてしやうがありませんので、十年間の私の胸の中を、細かに書き綴つて、臺南の婦人の許へ送りました。「どうぞ主人との關係を絶つて、あなたは他に幸福な結婚をしてください。家庭内に少しでも秘密があると、一家の空氣にも圓滿を缺き、子供の教育上にもよろしくないから。たつた一言で結構ゆゑ、關係を斷つただけ聞かしてください」といふやうな意味を、丁寧に書いて送りましたが、何の返事もありません。今度は退院いたしてか

ら、今までの不平のありたけを書き並べ、序でに先年用立てた五千圓の金の催促までしてやりましたが、やつぱり何の返事もありません。もうかうなると愈々腹が立つて、金はともかく、どうしても返事だけは取つて見せる、と苛立ちました。實は一人で臺南まで出かけて、話をつけて來ようかとも思ひましたが、もし逃げられては、折角遠方まで出かけた甲斐もないこと、考へ、それよりはと急に思ひついて、彼地の赤十字社病院の院長宛に、萬事を依頼する手紙を出してしまひました。

程なく主人宛に、局留で電報爲替が届いてゐるといふ端書が来ました。丁度主人は出張旅行中でしたので、初めは心配いたしました。が、そつと郵便局まで行つて調べて見ますと、日限が主人の歸りまで間に合ひますので、安心して主人には別に通知もせず、そのまゝにしておきました。すると臺南から追つかけ、届いたかといふ問合せの電報が来ましたので、私の一存で、い、加減に返電して済ましてゐました。腹が据りますと、人間は何處まで大膽になれるものか。自分の行爲に呆れました。そのうち主人が歸りましたから、早速端書だけを見せて、知らぬ顔をしてゐました。主人は、私が催促しての結果と直ぐ氣附きましたらしく、一寸變な顔をしただけで、

黙つて金を受取つてまゐりました。私に彼はいふと、また事面倒になると思つたからでせう。私は覺悟の上ですから、度胸も据り、平氣にはなつたもの、初めてこんな大膽なことをいたしましたので、自分ながら空恐ろしいやうな氣持もいたしました。その後主人も姑も實家の母に、『とても確り者です。臺南へ貸した金を取りましたよ。話すと腹を立てますから、云はないてください。氣は確かなんです。』

と話し合つたさうです。

『あの人のやうに、よく物のわかつた、心の優しい良人は、世間にも少いよ。お前のお父さんなどは、有名な氣むづかしやで、母さんは勤めるのに、どんなに骨が折れたか知れやしない。あんな勤めの樂な良人を持ちながら、たつた一度の失策のために、お前のやうにさう我儘をしてゐるは、冥利も盡きて、今に罰が當るから。勿體ないと思はなければならぬよ。』

實家の母は、かう云つて懇々と私を諭しました。

全く、今から反省して見ますと、私は両親のお蔭と、主人や優しい姑のお蔭とで、子供の時から今日の日まで、何一つ身體に不自由のない、恵まれた生活をさせていたことは、感

謝の上にも感謝いたさねばならない譯であります。たゞ世間知らずの我儘者だつたのでござい
ます。しかし、自分だけは今日までも、潔白な生活を續けて來たと信じてをります。

これでも彼も私の腹の中をさらけ出して、初めて先生にだけお目かけます。どうぞよろ
しく御批判をたまはるやう、偏へにお願ひ申し上げます。

*

*

*

*

私はこれに對して、かう指導しました。――

『あなたが十年間の忍耐と寛容とは、實に神にも近い、尊い行爲でした。婦徳の至上ともいふべ
きてせう。この點については、何人もあなたに同情し、またあなたに敬意をさげないものはな
いてせう。しかし、折角十年間の尊い忍苦の終りに、あなたが取られた最後の動作は、何といふ
淺ましい變り方だつたのでせう。痙攣發作や譫妄状態などは、私が度々談話會でもお話しして
るやうに、誠に愧づべき、病的な、精神異常の現象であつて、かういふことは、あなたの精神
が平素から、もつと訓練さへされてゐるならば、御自分の意力で以て、充分に避け得らるべきこ
とであつたのです。』

成程あなたの御主人にも落度は多分にあります。こんな祕密は何故もつと早く、一切をあなた
の前に告白して、あなたの諒解を得られなかつたか。さうして、あなたと合議の上で、何故もつ
と早く、この事件の適當な解決法を講じられなかつたか。そこは實に残念に思ひます。しかし、
翻つてまた考へて見ますと、御主人とその婦人との間に出來た關係の如きは、決してこのお二
人だけが責を負ふべき特有な罪ではなくして、萬人共通――いは、人類そのものが共同に責を負
ふべき汎過失ではなかつたでせうか。あ、いふ關係に生ひ立つた二人が、あ、いふ場合に遭遇し
たとき、終にあ、いふ結果に陥らなかつた人が、果して幾人あるでせうか。かうした、殆ど不可
避的ともいふべき人間の罪過に關しては、廣い意味からいふならば、私もあなたも、またその共
同責任者の一人であると思はなければならぬのであります。

従つて、かういふ問題の解決に際しては、あなたは――特に十年間もそれを知つてゐながら、
寛大に忍容してをられたあなたにあつては――出來るだけ平靜に、また理智的に、更に博愛的、
妥協的態度を以て、圓滿に處理せらるべきであつたのです。それでこそ、本當に御主人のため
にも、またあなたのためにも、延いては御家のためにも、またお子供さん達の將來のためにも、

最も尊い、光ある行爲であつたと言へませう。決して一時的の感動に巻き込まれて、淺ましい座撃發作や譫妄状態に身を委ぬべきではなかつたのです。特に、婦人から貸金をお取戻しになつた時の奇矯な手段は、最も卑むべき復讐行爲であつたと考へます。

しかし、過ぎたことはもういたし方がありません。偏に將來を警戒すべきです。人間の一生涯には、幾多の難關が隨處に横はつてゐます。今後あなたも、またいつ何時、どんな豫期しなかつた大事件にぶつからないとも限らないのです。その時こそは今度のやうな、忌はしい錯亂状態に再び囚はれないやう、出来るだけ作業訓練に専心されて、感情の陶冶と意志の鍛錬とを経なければなりません。

その後彼女は、私の療養所の規定に従ひ、一層規律的な作業生活を営むは勿論、ますます訓練に精進して、水も汲めば、風呂焚もする、畠打もやれば、薪割もやる。肉體の健康の増進すると共に、精神の開發もまた目覺しく、毎日の日記の冥想においても、衷心から良人の立場にも同情し、自己の淺ましい行爲を悔むやうになつた。さうして入院八十日の後、彼女は心身ともに全く別人となつて、目出たく退院した。體量は入院當時より優に二貫目以上の増加であつた。

これが本當の全治である。それから今日まで既に三年を経過するが、彼女の家庭は非常に圓滿で、いつも和氣に満ちた通信が、私の手許に届いてゐる。彼女のヒステリー性精神病は、もはや彼女の一生を通じて再發しないことを、私は信じて疑はない。

第三例 父親の急死から誘發されたヒステリー

これは、嘗て昭和五年二月號の『主婦之友』誌上に掲載されたもので、小川臺之助氏の實話であります。妻のヒステリーは、良人の態度と心掛一つによつて、必ず治癒するといふ本書の主張(本書第六章C参照)を裏書する好實例として、茲に讀者の参考までに採録しました。(著者)

小説や芝居などで、ヒステリーの妻が良人を惱ます場面を見ましたときは、良人の困りぬく様子、些か滑稽だとさへ思ひましたが、いざ自分がその役割に當つてみますと、なかく容易なものではありません。私も往年これを體驗しまして、つくづくその苦しさを知つたのであります。あまり自慢にもならぬ經驗談ではありますが、妻のヒステリーに惱まされてゐる方も決して少くないこと、思ひ、何等かの御参考までにと筆を執る次第です。

私の妻がどうしてヒステリートになつたか、これは、あまりはつきりと原因が判らないのですが、とにかく、多分それが原因だらうと思はれることを申上げてみませう。

私達が結婚したのは、大正十五年の正月で、型の如く日比谷大神宮で式を挙げ、披露は府下中野の新居でいたしました。さてこれから楽しい新婚の生活が始まらうといふ、結婚式の翌晩です。突然妻の實家から、父危篤の電報がまゐりました。

妻の實家は伊豆の海岸で、式には母と父の義弟とが列席し、父は風邪のゆゑを以て上京しませんでした。しかし、こんな急變があらうとは、私は勿論、妻も豫期しなかつたことでした。

私達がとりあへず駆けつけましたときは、父は到底恢復の見込がないと宣告されてゐたのでした。けれども、一時持ち直しましたので、私は一先づ東京へ歸り、妻だけが残つて、夜の目も合さず熱心に介抱したのでしたが、それから五十日ばかりで遂に亡くなりました。

葬式萬端を済ませて、妻が歸つてきたのは、二月も末の、雨のしよぼ降る晩で、口許に淋しい笑みを浮べて玄關に立つた姿が、今でも目に浮びます。

新婚の翌々日から、思ひがけない、慌しい騒ぎで、別れ々に暮した私達は、それから改めて楽しい新婚生活に入りました。そして一週間は夢のやうに過ぎましたが、私は妻が時々夢に父親の名を呼びつゝ、けては泣くのに、氣がつかしました。それでいろいろと慰めては元氣をつけ、お互に幸福に暮すことが、せめて亡父の靈を慰める道であると諭したりしました。

しかし私の心にもなつてみてください。妻の悲しみは充分に察しもし、同情もしますが、樂しかるべき新婚の日を、毎日泣き顔ばかり見せられるのは、實際を申せば、やり切れたものではありません。けれども私は、できるだけ慰め勵まして、力つけるやうに努めました。

『でもこんなに早く亡らうとは思ひませんでしたもの。かうと知つたなら、私あなたには濟まないけど、もう一年くらゐ、結婚しないでゐればよかつたと思ひます。半年ばかり歸つて、母を慰めて來ようか知ら。』など、申すのです。私も、『それもい、だらう』と申すより他ありませんでした。

妻には、ヒステリーになるべき素質が、生れながらに充分にあつたに違ひありません。それで父の死といふやうな、思ひがけない變動に出會はなかつたならば、普通の女のやうに、たゞ新婚の甘さに酔うて、毎日晴れやかな日を送つて行けたに違ひありません。

かうした大きい打撃を受けた妻は、生活の變つたことにも、大分刺戟を與へられたらしいので、たつた二人きりの、それも晝間は一人ぼつちの淋しい暮し、そして私が、思つたよりも貧乏であることなども、妻としては堪らない淋しさであつたのでせう。一度などは、私が夜の十時頃に歸つてきましたところ、眼を泣き腫らしてゐました。淋しくてくも身も世もなかつたと訴へるほど、幼氣な妻でした。

私はまた暢氣な性で、それほど妻が細かに氣を揉んでゐることに、心も留めず、月々の費用なども、どうかやつて行つてくれると喜んでゐたほどで、時々妻が冗談半分に「私、お父様さへあんなことにならなかつたら、お母様にうんと、お小遣ひを送つて貰ふんだが」など、洩したのさへ、自分の與へる生活費に不足してゐるのだとは、考へつかぬ私でした。人一倍神經質な妻にとつて、私の暢氣な仕打は、父の死で受けた心の打撃を、いよく強くさせたに相違ありません。これも後に氣のついたことでした。

六月末の或る夜のことに、郊外の住居にはもう蚊帳の要る頃でした。——呻き聲で眼を覺した私は、妻の肩をゆすぶつて、「伊奈子、伊奈子。夢だよ夢だよ。」と言ひましたが、妻はいきなり私



(…だんよを名てつぶすゆを肩の妻るれさなう)

を押し除けて、「側へ来ちやいや」と言ふのです。そして夢だと言へば、はつきりと「夢ぢやありません」と答へるやうな始末で、私は、何が何だかさつぱり判らず、實は氣味悪くさへ思つたのでした。

その後は、一週間に一度くらゐ、そんな舉動がありましたが、夢を見ないときは、相變らず淋しさうな、だが可憐な妻でした。

八月の初旬、私達は一週間の休暇を得たので、久しぶりに妻の實家を、墓參かたぐ訪れました。妻はまるで十四五の少女のやうに喜び、嘗て見ない噪ぎ方なので、私も、これて亡父や母への思慕の想ひが叶つて、これからは快活な女になつてくれるものと喜んだのでした。

休暇の日は盡きましたが、間もなく父の新盆も來ますので、妻はそれまで滞在することになり、私は元氣な妻に二里の山道を送られて、一人東京に戻

つてきました。そして翌日から相變らず會社に出て、四五日しますと、妻から熱海まで迎へに来てくれといふ電報です。

驚いて早速迎へに行きますと、船で熱海に着いた妻の顔は、つい數日前別れたときの元氣さは違ひ、まるで別人のやうに蒼白です。とりあへず驛前の旅館で休息して、様子を尋ねると、「先日あなたをお送りして歸つてから、何だか妙に淋しいやうな、變な氣になつて、それから何をしても面白くなく、何だか居ても立つてもゐられないやうな氣がするのです。新聞を見ても二日間とは見つめてをられず、夜もよく眠れません。濱へ出てみたり、丘へ上つてみたり、ほんとに苦しみましたわ。初めのうちは、みんなが冷したり、笑つたりしてゐましたが、あんまり様子が變だから、もしや病氣かも知れない、東京へ歸つて、良いお醫者に診て貰つた方がよからうと勧められたので、迎へに来て頂きましたの。神經衰弱かも知れせんわね。」

私の傍にゐれば、あんなに亡父を慕つて夜中に狂態を演じ、實家に残して歸れば、今度はまた淋しがつてみんなを手古摺らしたといふ。随分氣儘な仕打だなあと思ひましたもの、この子供らしい妻の態度にも、私は決して悪い氣持はせず、早く東京へ連れ歸つて、念のためにお醫

者に診せようと思ひました。——或は實家の母が言つたといふやうに、もしか妊娠であるかも知れないといふ氣持もあつて。

翌日、早速、神田の某専門醫の診察を受けました。やはり神經衰弱とのことで、そのまゝ入院することにになりました。私も、いつまで會社を休んでもゐられせんから、妻の實家から妹を喚びましたが、十八の妹には、妻の機嫌がとりきれず、妻もまた、始終いら／＼してをりました。

入院して五日目の晩、氣むづかしい顔をして寢臺の上に入り込んでゐる妻の様子を見て、少し眼の光りが變だなと思ひました。昂奮させるのは悪いから、今晚は話も止して寐かせた方がよいと思つた瞬間、つと寢臺から飛び降りた妻の寢衣姿は、もう廊下を走り出して、街道に出てしまひました。そして空地の角に、ぢつとしゃがんで動かないてはありせんか。

驚いて後を追うた私は、心臟が高鳴りして止みません。さうした中にも人目を恥ぢて、切りに病室へ歸るやうに勧めましたが、返事さへもしないのです。

ヒステリーだ。このとき初めて、はつきりと意識した私は、あゝと苦しい溜息を、搾り出す

やうに吐いたのです。今の今まで、神経衰弱だとは思つても、ヒステリーだとは考へませんでした。だから。俺は一生悩まされるんだな、と思ふと、全く希望も何も減茶減茶になつたやうな感じがして、胸が一杯に塞がりました。

その後二三日は、別段先夜のやうな振舞もせず、それにいよくヒステリーとなれば、入院して治療したからつて急に治るものでもなし、事實私も、一日十圓以上かゝる入院費に、先の長い病人を抱へて、經濟上のことを考へずにはゐられないのでしたから、そこで院長とも相談の上、一まづ退院して、毎日妹が附添つて通ふことにしました。

この通院中の四十日間といふもの、私は毎夜二三時間しか睡眠がとれませんでした。晝間は、大抵無事なさうでして、夕方私が會社から歸り、一緒に夕飯などを終つて、いろいろ話などをしてゐる間も、大體に於て無難なのですが、いざ床に就いて一しきり眠つたかと思ふと、定つたやうに發作が始まるのです。齒を喰ひしぼり、眼は血走つて、顔は蒼白になります。そしていきなり戸外へ飛び出さうとするではありませんか。外へ出ようとする妻、やるまいとする私、狂へる妻を抱きしめて、涙を流すことさへ度々でありました。

時には枕頭の本を破ります。體温計を折ります。着てゐる寢衣の袖を切る。自分の頭を拳でなぐる。悶えに悶えた揚句には、殺してくれと叫びます。いつそ殺して、自分も死なうかと思ひました。汽車の音を聞いて飛び出さうとするときは、そのまゝ、戸外へ出してやらうかと思つたことも、何度あつたかも知れません。

田舎の母は心配して、何か婦人科の疾患があるのではないかといふので、その方も診察を受けましたが、別條ありません。腦の病氣に效く灸があると勧められ、はる／＼静岡の片田舎へ行つたときなどは、汽車の時間を待ち合せてゐるうちに、發作を起して、驛の人混みの中で、大聲で私を罵るのには、全く閉口しました。外間が悪いと思つて取り合はないでれば、その冷淡な私の態度にますます苛立つて、駈け出したりする始末に、やつと謝るやうにして、東京へ連れ歸つたのでありますが、人中で演じたこの醜態には、私も全く救はれぬ暗い／＼氣持になつてしまひました。

家相が悪いんだらうなど、注意されますと、日頃無頓着な私も、少しは氣になります。ヒステリーは病氣だと思へばこそ、大抵のことは、胸をさすつて我慢しますが、これがたゞの我慢

だと考へたら、打つても蹴つても足りないほど腹が立つのが普通でせう。

或る日、會社に用事があつて、私が夜十一時頃に歸つたことがありました。妻は疊の上に突伏したまゝ、私の足音を聞いても顔を上げません。「遅くなつて、濟まなかつたね。急に用事ができたんだよ。さあお茶でも貰はうか。」と優しく言つても、返事もせず、身動き一つしません。私も疲れて歸つたのでしたから、ぐつと癪に障りました。「おい、我儘もいゝ加減にしたらどうだ。何も悪遊びでもして遅くなつたつていふんぢやなし、仕事の都合では、徹夜しなくてはならないことさへあるんだ。病氣だと思つて優しくすれば、いゝ氣になつて。馬鹿！」と嗷鳴つたものです。

『え、どうせ私は馬鹿です。』と言ふかと思ふと、いきなり、二階から飛び下りようとする。眞似だとは思つても、棄て、おけません。結局私が折れてしまふより仕方がないので。全く手がつけられないとは、このことでせう。

宥めたり賺したりすれば、割合に無事に濟むのですが、怒ればますます、昂奮を増させるばかり、友人などからは、私の態度があまりに齒痒いといふので、大分惡口を叩かれたやうでしたが、

全くどうして、か判らないのでした。醫者、藥、灸、住居の變更、私としては、もうできるだけのことはし盡してみたのですが、治さうと思へば思ふほど、却て病勢を惡化させるやうに思はれました。

ヒステリーは不治の病だ、不治だとすれば諦めるより他はない。私の考が、かう傾いてきました。そして、ヒステリーの發作に對しても、刺戟が大分麻痺して來ました。

よし、自分は妻を看護するために、この世に生れて來たのだと思ふことにしよう。發作は嵐だ、夕立のやうなものだ。天氣にだつて、晴もあれば曇りもあり、暴風もある。悪い天氣があればこそ、よい天氣の快さも解るのだ。發作のときに苦しめられるだけ、無事なときが人の二倍も三倍も嬉しくなる。いつも穩かな妻であつたら、或は却て物足りなさに何か求めるかも知れない。負け惜みかは知らないが、ヒステリーの女を妻に持つたればこそ、一種特別な樂しみもあるといふものだ。

さうだ、自分はもう醫藥に頼らず、自分の愛の力を以て妻の病氣を治してやらう。治らないのは愛の力が足りないからだ。自分の精神力で必ず治して見せる。——かうした考が私の胸

に浮んでから、始めて前途の明るみが、うすくと解つてきたやうに感じました。そして、この考をいよく力強くさせたのは、森田正馬博士の、神経衰弱に關する著書によつて、次のやうなことを讀んだからでありました。

病氣の苦痛を除かうとしてはいけない。苦痛はたゞ忍べばよい。苦痛を忍ぶことが、結局苦痛を除くことで、財布を掏摸に奪られると、そのときは大變残念だが、五六日経つうちに、いつか忘れてしまふ。それと同じで、病氣の苦痛も、少しの間我慢さへすれば、苦痛の方で自然に身を退いてくれる。

神経衰弱の人に、心配するのは悪いといつて抑へるのは、抑へる方に同情のない證據だ。抑へられる方では、今度は心配してはいけないといふことに、心配するやうになる。

神経衰弱は病氣ではなくて、本當は神經質といふべきものである。

以上のやうな博士の言葉は、ひしくと私の胸にこたへました。自分が長い間、いろ／＼に惱まされ、鍛へられて来た揚句の果てしたから、私の心の燭は、もう火を點けるばかりに、用意ができてゐたとも申せませう。私の燭そのものは至つて貧弱なものでしたが、とにかく

明と暗との差別がつくだけの用意は、確かにできてゐたのでした。

それから私は、すっかり自分の態度を變へることにしました。妻にも豫め、そのことを申し渡しました。

まづ第一に、彼女の頭痛に對する私の態度です。發作は大抵頭痛の後に來ることが多く、その頭痛も偏頭痛なのです。今までは頭痛がし出しますと、妻は直ぐに苦痛を訴へ、私もまた、直ぐに濡手拭を額に當てたり、水枕をさせたり、あまり激しいときは氷を用ひたりして、二人が、りて病人を拵へてゐたのでした。

妻は神経衰弱患者持前の杞憂觀念から、二六時中頭痛のことが氣になつてゐます。實際神経衰弱患者くらの自己主義なものはなく、自分の苦痛ほど大きい苦痛は、この世の中にないと考へてゐるのです。ですから、少し頭痛がし出しても、さあ大變だ、頭が割れるやうだとか、錐て揉まれるやうだとか、あらゆる形容詞を並べて苦痛を訴へ、そして自分自身も、激しく痛む、激しく痛むといふ自己暗示を興へますから、事實はそれほどの痛みてないものが、ますます度を増してゆくのであります。

このことを知つた私は、今度は頭痛を訴へても、氷や水枕は愚か、濡手拭一つ當て、やりません。たゞの坊主枕をさせて、寐かせておきました。これには妻も少からず不満のやうで、切りに私の同情のないことを責めました。私は却つて笑ひながら、「痛いものは痛いんだ、我慢しなよ。いくら痛くたつて三日とは續くまいから……」と言つてやるのが普通でした。

妻は豫て、よく日本髪が好きだと言つてゐましたが、私は頭のためによくないからとて、結はせませんでした。ところが神経衰弱患者は、自分の好むことには案外苦痛を覺えないものだと知りました。それで私は、その髪を結はせてみようと思ひつきました。

或る朝、妻は頭痛がするから起きられないと申します。今までなら、またかと思つて厭な顔をする私も、「そりやあ惜しいことをしたな。實は今夜、久しぶりで寄席へても行かうと思つてゐたんだ。お正月だから丸鬘にても結つて貰つてね。もし氣持が悪くなかつたら、髪を結つて待つてゐる給へ。」かう言ひおいて出勤しました。

どうせ眉をしかめて寐込んでゐることだらうと思つて歸つてみますと、水々しい丸鬘に結つて、いそくと出迎へたのです。思はずにつこりした私の態度も、きつと今までにない好感

を妻に與へたことだらうと思ひます。

その後は萬事この方法で接しましたところ、毎二日目に起つた頭痛は三日目に、やがて五日目にと、だん／＼間隔が遠くなつてまゐりました。自分でも「また少し頭が變つてすの。でもかうして話をしてゐると、忘れてますわ」など、言ふやうになりました。

かう申しますと、さしものヒステリーが手もなく治つたやうですが、なか／＼そんなものではありません。大體が一本氣な彼女は、私の厚意に對しては充分に感謝してゐても、少しでも自分に苦痛が起れば、もうそれが、この世の最大苦痛かのやうに思ふのです。そこへ私が、それ氷だ、檢温だと大騒ぎしたのは、全く火に油を注いでゐたやうなものでした。

よく眠れない／＼と言ひ出しますと、私も共に起されては心配したものでした。しかし、考へてみれば、本當に疲れ、ば、草の上にもぐつすりと眠れるぢやありませんか。眠れないといふのは、まだ眠りが不足してゐない證據です。どちらかといへば贅澤なわけです。

そこで私は、今度は妻が、「どうしても眠れない」と言ひ出すと、「無理に眠らうとしない方がいいよ。一晩や二晩眠らなくても、決して體に障るやうなことはないものだから。こゝに面白い

本があるから読んで御覽」と言つて、私はずん／＼眠つてしまふのです。初めはぶつ／＼言つてゐた妻も、いつか眠れないことをあまり苦にしないやうになりました。

『昨夜はどうしても眠れなかつたので、起出して裁縫を始めたら、到頭夜が明けちまひましたわ。そのお蔭で今夜は睡くてしやうがない。早寐にさせう』など、機嫌よく言つて床に就くと、もうぐつすり眠るのでした。

こんなことを繰り返しながら、二ヶ月ばかり経ち、前年のその頃に比べれば、まるで別人のやうに變つてきました。それでも時々頭が痛いと思いましたが、断然冷したり揉んだりしてやらず、例によつて、痛むのは仕方がないと、我慢させるやうに努めてをりました。

三月の或る日、私は友人と一緒に、久しぶりで、會社の歸りに遊びに淺草へ行きました。實に久しぶりです。妻が發病以來は、六時の歸宅が七時になつても、泣いたり恨んだりされるので、それが煩はしさに、社で夜業でもするとき以外は、どこへ寄道したこともなかつたのでした。その夜十二時頃歸宅すると、妻はぼん／＼怒つてゐます。『心配しないやうにと思つて、速達を出しておいたぢやないか。』と言つて一言二言争つてゐると、妻はいきなり掛けてゐた前掛をとつて、

ずた／＼に破いてしまひました。

私は瞬間、暗い氣持になりました。以前の私なら、或は嗚鳴りつけたかも知れませんが。そしてますます／＼妻を昂奮させ、結局終夜惱まされたてせう。しかし今は心を持ち替へた筈の私です。なかに、こんなことの年に二度や三度、年中行事のつもりでゐれば何でもないんだ。大體が二三月前のやうな妻の容態であつたら、今夜だつて、遊びになど廻つては來なかつたてはないか。安心して遊んで來て、なほその上、家へ歸つても、にこやかな妻の迎へを受けようといふのは、一生妻を看護しようと思つた決心の手前、あまりに蟲が好いかも知れない。前途は遼遠だ。二年、三年、或は五年も十年もかゝるかも知れないが、すつかり治つたときこそ、更に人知れぬ愉快さがある筈だ。

かう考へ直した私は、鎖まるのを待つて、徐かに言ひきかせますと、妻もよく納得して、その後は多少歸りが遅くなつても、あまり文句を言はなくなりました。

私とても妻が穩かになつたのをいゝことに、自分の決心を鈍らすといふやうなことは勿論ありませんでした。

結婚以來滿二ヶ年餘、妻は食事のことの外は何一つしませんでした。私も病氣に障ることを恐れて、決してさせませんでした。所在のない妻は私を勤めへ送り出すと、ろくでもないことばかり考へてゐたのでせう。

そこで私は、今度は妻に少しづつ、仕事を強ひてみることにしました。「おい、今日のうちにこのシャツを縫つておいてくれないか。家で縫つたのが、一番着心地がい、よ。」とか、「今日は歸るまでに、書齋をすつかり片づけておいてくれ。机の位置を直して、書棚も反對の方へ持つて行つて、すつかり感じを變へるんだよ。もし歸つて見て氣に入らなければ、俺は寐ないでもやるよ。」など、言ひおいて出ます。

元來が正直な彼女は、私を喜ばせたい一心から、終日せつせと働き出しました。不自由に馴れた私はまた、決して彼女の仕事に、私の言ひつけ通りに、できてゐるようなど、は、少しも期待せず歸ります。せめて寐てゐられないのが見つけものなものですから。

あてにしないことができてゐるときは、一そう嬉しいものです。終日働いて晴々とした顔で迎へられると、私の心持も實にさつぱりとなります。「忙しいと、お薬を服む時間も忘れてしまひ

ますわ。」と言つて妻は微笑みます。

『薬なんか、いつそ止してしまつた方がい、よ。』

『さうね。服まなくなつて、別にどうもないんですから、もう止ませう。』初め私が薬の不必要なことを説いたとき、不人情だといつて喰つてか、つた彼女が、今度は自發的にそれを止してしまひました。戸棚の上には薬瓶の影が失くなり、一輪挿しなどがおかれ出しました。

『私は一生駄目ね』を、口癖のやうにしてゐた彼女が、將來の希望を、いろ／＼と物語るやうになつてきました。

生來神經質の妻は、病氣の苦痛に對しても注意が強烈であつた代りに、病氣が薄らいで、家事に興味を持ち出しますと、人並以上に眞劍になつてやつてくれます。結婚後三年半、初めて家庭らしい温味を感じて來ました。

かうして妻のヒステリーは、昨今殆ど治つたも同様になりました。それも、ほんのちよつとした私の心の持ち方一つで、治すことができたのでした。

もし私が、初めのやうに妻の病氣を病氣として、年中暗い氣持で接してゐたならば、恐らく

私達の生涯は、それこそ、暗いままに終つてしまつたかも知れません。

附録 二重人格の女

【A】序 篇

(一) 運命の絲に操られて

私は本書第三章の末節において、ヒステリー性精神病に罹つてゐる人は、意識分裂を起し易い結果、やゝもすると人格變換を來して、いはゆる二重人格者(俗にいふ憑靈者)となり、様々の不思議な言動を行ふものであるといふことを述べておいた。これからお話しようとするのは、即ちその一例である。

この女は、私が過去十數年間、殆どその起居を共にして、精細に觀察し、研究してゐる、珍らしいヒステリー患者である。この女のことについては、嘗て私の主宰してゐた雑誌『變態心理』に、二三年に亙つて、やゝ詳細に書いたことがある。また各方面からの依頼に任せて、私

はこの女の第二人格を、私の拙い講話の實驗材料に、幾たび活躍させたか數へ盡せない。それは主として宗教、教育、學術、思想方面の人々の集會であつたが、大正八九年の頃、私が邪教大本教を攻撃してゐた際には、時の内務大臣官邸、その他多數の政界人の會合の席上でも屢々實驗した。私の最も光榮に感じてゐることは、昭和五年五月廿四日、私は忝くも皇族講演會に招かれて、秩父宮妃殿下、閑院宮載仁親王殿下を御初め、十三方の宮殿下並に妃殿下の御前において、二重人格に關する講話と實驗をさせていたことである。勿論、彼女の第二人格は、時と場合によつて、非常に目覺しい活動を演ずることもあり、また寧ろ不活潑なこともあつて、一定してはゐない。

最初私が、偶然の機會で彼女の人格變換に接した時は、その第二人格が、いかやうにしてこの女の頭腦の中に育まれ、またいかなる動機で、この女の第一人格から分裂したかは、殆ど見當がつかなかつた。何となれば、その頃の私は、この女の經歷を、たゞこの女自身の供述によつて信ずるより外はなかつたから。さうして、その覺束ない供述を唯一の手掛りとして、無益に第二人格の本體を臆測してゐた。ところが、だんくんと穿鑿の歩を進めて行くに従ひ、彼女の供

述は、その肝要な點の大部分において、全然虚偽であることを發見した。(これがヒステリーの病的虚言であることは、最近に至つて確證された。)この女の素性の初めてはつきりと分つたのは、その後私が前後三回、この女の郷里を訪問して、彼女の母親や、以前その良人であつた人の口から、彼女の生立や、過去の生活に關し、詳細の事實を聞いた時である。それと同時に、この女の第二人格の正體なるものも、次第に確實に究明せられ、今では、彼女のあらゆる症狀に對しても、動かすことの出来ない確たる診斷を與へ得るやうになつたのである。

歐米の心理學書や心理學雜誌の上で、復重人格の研究を發表したものは決して尠くない。中でも、サイデスとグッドハートのハンナにおける場合の如き、またモルトン・プリンスのミス・ピーチャムにおける場合の如きは、何れも浩瀚な一大著述であつて、變態心理學上、誠に得易からざる貴重な記録として、いつまでも學界に貢獻することであらう。これらの研究に比較すると、私のこの女に關する場合の如きは、誠に不完全極まる淺薄なもので、いはゞ巨人の傍に立つた一寸法師の背較へにも足りないかも知れない。けれども、よし私の觀察や研究が、甚だしく杜撰であるとしても、少くともこの女が、わが日本で學術的に研究された最初の二重人格者であるといふ

點だけでも、私はこの果敢ない研究の一端を、とにかく記録しておくだけの価値と義務とがあること、信ずる。

先づ私は、この女がどうして私の家に来ることになつたか、そこから筆を起さうと思ふ。それは實際、虚構事のやうな話で、若しロマンチックにこれを言ふなら、この女は、何ものか目に見えぬ運命の絲にても操られて、私の家まで引張りよせられたかのやうにも、考へられるのである。

(二) 裏の木戸から一人の女が

随分古い話だが、今から丁度十六年前、大正六年五月三十一日の夕方のことである。私の家では妻がたゞ一人、ハンモックの子供を揺りながら、座敷の縁側で縫ひかけの仕事をしてゐると、勝手口の木戸から一人の女が、中木戸を開けて庭へ入つて来た。硝子戸が開放しになつてゐたので、すぐお互の顔と顔とが合ふ。見ると、年頃はまだ二十四五の、頭を束髪にして、紡績緋の單衣に古ぼけた縮緬の帯をしめてゐるが、容姿はさほど卑しくない女である。しかし妻には、どう

考へてもまだ會つたことのない女である。彼女は黙つてや、俯向きがらに、踏石の處まで歩いて来た。そしてそれへ上つた。けれどもその態度は決して無作法でなかつたので、妻の方でも不思議な女だと思ひながら、黙つて見てゐた。そのうち女は自分の下駄をちやんと綺麗に揃へて踏石の上へ脱いで、それから縁側に上つて、妻の前までにじり寄つて、丁寧に両手をついて辭儀をしなから、初めて口を開いた。

「奥さま、私は、旅の者でございますが、あのう、お宅さまで、女中さんがお入りや、ございませんか。」

言葉をぼつ／＼と切つていふ辭がある。そしてその言葉には、たしかに西の國の訛がある。妻はこの女の來意が初めて判明したので、ほつと安心した。そしてとにかく女中の入用である旨を答へた。實際その頃私の家では、以前からゐた女中が歸ることになつて、方々の桂庵に代りを頼んでゐたが、なんでも女中が大拂底とかで、てんで目見に来る者もなく、大いに困つてゐる際なのであつた。すると、その女はまた語を續けた。

「お恥かしい話でございますが、私もこの年になりました、いつまでも、親の世話になつてゐ

ますけれ、食べるだけなりと、自分でせにやならんと思うて、東京へ、出てまゐりましたが、奉公口を方々捜して歩きますけれ、あのう身元引受人がなければ、置けないと仰しやいまして、何處へも、まだ行く處がございませんが、あのう、お宅さまでも、やつぱり身元引受人がなければ置いてはくださらないのでせうか。』

例のぼつり／＼と言ひ終つて、はらく／＼と涙をこぼした。妻はもうその涙に打たれてしまつた。

『なに、お前さへ正直な人であるなら、身元保証人など、どうでもいゝのよ。しかし、お前は一體何處から來たの。』

妻はもう雇つたものにも對するやうに、かう親しく問ひかけた。

女の語るところによると、彼女は四國の××の生れだといふ。年は三十。(意外に年を取つてるのに妻は驚いたさうである。)一度お嫁に行つたことはあるが、『御覽の通りの愚鈍者ぢやけれ』すぐ戻されて來たさうである。幸ひに子供は出來なかつた。それからずつと親の家にあるが、いつまでも母親の厄介者になつてゐるのが心苦しいので、今度東京へ飛出して來た。父は既に亡なつてゐるとのことである。

『よく一人て來たね。』と妻がいふと、

『はい、國にゐますと、恥かしいけれ、どうなりともして、東京へ行かうと思ふ一心で、まゐりました。』

品川の宿へ着いたのは、前日の午後であつた。そして今朝から一人て品川の町をあちこち訪ね廻つた。雇つてくれさうな家は二三軒あつたが、何れも身元保証人がないので話が纏まらなかつた。いつそ桂庵へ行かうかと思つたが、東京の桂庵は『こはい處、人を何處へ賣飛ばすかも知れない處』と聞いてゐたので、また躊躇した。彼女は晝飯も食はずに、また方々を訪ね廻つた。足に任せて歩くうち、遂に私の家の隣家まで來た。その井戸端で一人の婆やが米を磨いてゐた。その婆やに尋ねて、私の家に女中が入用であることを知つた。そして、勝手口から入つて來たのである。『とにかく今日は旦那様がお留守だから、明日の朝九時頃、もう一度お出で。それまでによく相談しておいて上げるから。』

妻はその女の話聞き終つた後で、かういつた。そして、晝飯がまだなら、お腹が空いてゐるだらうから、お茶漬でも食べておいてと云つた。

「い、え、奥様、ありがたうございますが、宿へ歸つてから、安心して戴きますけれ。」と答へて、女はまた裏の木戸からいそぐと出て行つた。

その夜私は、可なり遅く他から歸つた。そして妻の口からこの一伍一什を聞き取つた。

『さうか。その女のいふことが本當なら、おいてやつてもよからう。明日の朝もう一度訪ねて來たら、催眠状態に入れて、よく探つて見てもい、』

私はかう無難作に答へながら、書齋へ引きとつた。

(三) 女は程なく催眠状態に

その翌朝九時頃、果してその女がまたやつて來た。

丁度その時、私には催眠治療の來客中であつた。その客は二三度既に施術した客であるが、どうも催眠状態が思はしくなかつた。それに早發性痲呆の疑ひもあつた。で、私は幸ひその客に、催眠感受性の良好な現象を見せる積りて、早速その女を施術室へ通させた。私はまだ見ないうちから、その女の善感を豫期してゐた。

ところが、施術室の扉を開けて入つて來たその女を見ると、私は半ば豫想が裏切られたやうな感じがした。女の風采は前夜妻から聞いたのと同じであつたが、その奥へられたる印象はまるで違つてゐた。顔色の悪い、表情に乏しい、そして年にも似合はず動作がおどくしてゐる。殊にその眼がどんよりと鈍く曇つてゐて、一寸見ると義眼ではないかと思はれるやうであつた。

それでも女の初對面の挨拶は、寧ろ丁寧過ぎるほどであつた。

私は直ぐ打明けていつた。——私の家では今丁度代りの女中を捜してゐるときだから、お前がある氣ならば直ぐにもおいてあげる。しかし、私は催眠術の研究を仕事にしてゐる者なんだから、折々お前を材料に使ふことがあるかも知れない。で、お前が催眠に善く感じてくれるならば、一層都合がい、と思つてゐる。就いては、これから一寸試験をして見たいと思ふが、承知してくれまいか——と云ふやうな意味のことを述べた。

女には、催眠と云ふことが最初何のことやら分らなかつたが、私の説明を聞いて安心したと見えて、『私に出來ますことならば、何でもいたします。』と云つて、承諾を與へた。

私は來客を立會人として、この女に施術を開始した。先づ私の普通に用ひてゐる端坐法で

導くと、女は程なく催眠状態に入つた。けれどもその現象は極めて遅々たるもので、殆どもどかしいほどであつた。それは、この女の頭脳が、大分明晰を缺いてゐることを私に思はせるものであつた。けれども、とにかく催眠状態に入ることは入つた。

そこで私は更に女を仰臥の位置に移して、彼女の催眠を一層深くすることに努めた。現象は相變らず、極めて鈍く且つ緩慢に進行した。それでも來客は、自分の現象の悪いのに比較して見て、非常に驚嘆したやうな面持で見つてゐた。やがて女の催眠状態が、可なりの深さに到達したので、私はいよいよ彼女に質問を試みた。私は先づ彼女の原籍から尋ねて見た。

處がこゝに私に取つて、今まで殆ど出會つたことのない、珍らしい現象が現れた。それは催眠中に於ける彼女の意識には、殆ど正確な記憶の憶起が缺如してゐるのを發見したことである。彼女は實に自分の原籍をすら云ふことが出来なかつた。それも決して故意に忘却の體を装うてゐるのでなくして、どうしてもそれが彼女の意識に上つて來ないのである。再三再四詰めた末、漸く縣名だけは思ひ出されたが、さてその後を問ふと、矢張りどうしても出て來ない。遂には郡名、町名とも、好い加減な出鱈目を並べ出した。お前の國にそんな町はないよと云つても、「い、

え、あります。」と、固く執つて動かない。それから彼女の名は何だと聞くと、これも自分の本名とは似ても似つかぬ名前を答へる。年はと問ふと、百五十三など、答へる。まるで或る種の精神病患者に現れる當意即答症の觀がある。私もほとく持餘した。殊に面白いのは、彼女が自分の身體の各部を全然倒錯して答へたことであつた。何かの拍子で、どこか身體に悪い處がないかと私が聞くと、腕が時々痛むと云ふ。腕のどの邊だと問ふと、この邊りだと云つて、意外にも右の横腹を押へた。そこは胸だ、腕ではないと云つても、どうしても聞かない。これは腕ですと執こく云ふ。然らば胸は何處だと聞くと、却つて右の腕を押へる。それが腕だと云つても矢張りどうしても肯かない。それから、胸は何處だ、顔は何處だ、手は何處だ、足は何處だと、身體中の各部を殆ど問ひ盡したが、一として正しく答へたものはない。しかもその間違ひ方が殆ど全く相對形に倒錯してゐる。例へば手と足を互に取違へたり、或は顔と腹とを正反對にしたりする如きである。要するに、催眠状態中に於ける彼女の意識は、殆ど支離滅裂であつて、毫も統一のないことが容易く推斷された。私は、これは永く自分の手許に抱へておいて、ゆつくり研究すべき價値のあるものだと思へた。

かうしてこの女は、私達が最初望んでゐたとは全く異つた結果に於て、その就職試験に合格したのである。そしてその日から私の家に住むこと、なつたのである。

(四) 夢遊状態に移して見ると

その夏、私は非常に多忙であつた。初めて月刊雑誌を出す計畫、書きかけてゐる仕事、それからまたこれ等とは全然別の用務のために、或は東北へ旅行したり、或は甲州へ出掛けたりしなければならなかつた。それがため、この新しい材料に對する私の研究も、心にかゝりながら、長い間着手することが出来なかつた。

そのうち、妻はこの女に對して、そろ／＼苦情を持出して來た。正直には働くが、まるで氣轉が利かない。よく物を忘れる。仕事が牛のやうにのろい。時には全然放心してゐるやうな場合もある。従つてまた物をよく壊す。毎日毎日、一つことばかりを煩く注意しなければならぬ。あんなに頭の働かない者を使つてゐるくらゐなら、自分でやる方がよつほど優である。いゝのがあつたら、代りを置きたい、と云ふやうな意を漏らして來た。實際、この女の低能さ加減には、私

達も時々あいた口の塞がらないことさへある。妻の小言を云ふのも無理はないと思ふ。けれどもあの女に就いては、研究しなければならぬことがあるんだから、まあ／＼我慢して使つてやれと、私は妻の小言を聞く度にかう云つてなだめた。それでゐる中々研究には取掛らなかつた。

そのうち十月が來て、『變態心理』の創刊號が生れた。その月の廿六日であつたと記憶する。夕方からM醫學博士とA醫學士とが來訪された。A氏はM博士に教を受けた人であるが、まだ催眠現象なるものを見たことがないから、一度それを見せて貰ひたいと云ふのであつた。幸ひ感受性のいゝのが家にゐるから、私は一人の男子を實驗して見せた。その序に、かねてM博士に話だけしておいた、この女の現象をも見てもらふ氣になつて、私は早速彼女を呼寄せて、催眠状態に導いた。これが、私の彼女に對する第二回目の實驗であつた。私は殆ど第一回の時と同じ現象を繰返させて見せた。さうして彼女の答辭に倒錯の現れたことも、全く第一回の時と同様であつた。

「成程、これは全く當意即答症ですね。身體の事以外で、もう少し他のことを尋ねて見たらどうです。」とM博士は注意した。

私はその意を受けて様々のことを尋ねた。結果は依然として倒錯してゐた。例へば、

「犬は何處にゐる？」

「犬は、犬は（と暫く考へて）——犬は座敷の真中にゐる。」

「それでは、箏箏は何處にある？」

「箏箏は、箏箏は庭の隅にある。」

「帽子は？」

「帽子は臺所にかけてある。」

「ちや、箏は？」

「箏は女關に吊してある。」

何處まで行つても、この通りである。

この時私は、ふとこの女を夢遊状態に移して見る氣になつた。女は例の通り、極めて緩慢な態度で立上つた。暫く覺束ない足取りで、二足三足疊の上を往き返りしてゐたが、やがて徐かに頭を上げて、空を見上げるやうな容子をしたと思ふと、何やら口の中で微かに呟き始めた。

催眠状態中にかう云ふ自發的現象の現れることは、頗る珍らしいことなので、私は驚いて女を見守つた。女の呟きは、段々明瞭な聲となつて、それは「もみぢ、もみぢ」と云ふ語を繰返してゐるのだと云ふことが分つた。女は丁度その後、續くべき言葉を思ひ出さうとする如く、幾度も幾度も同じ語ばかりを繰返した。私は黙つて、その次の言葉を待つた。程なく彼女は、漸く次の言葉が思ひ出されたと云つた風に、「もみぢうつろひ」と云ひ續けた。さうしてその一句を、また暫く繰返してゐたが、やがて春蠶の絲を吐くがやうに、その後はずん／＼と續いて出て來た。そして聲までが、明らかに琵琶歌の調子を帯びて來た。

「紅葉うつろひ、蘆が散る、潯陽江の夕まぐれ、友の船出を送り來て、互に交す酒盃の、數重なれど絲聲の、調べも添はぬ淋しさに、本意なきこと、思ひつ、月打ち守る折しもあれ、忽ち響く琵琶の聲……大絃は嘈々として急雨の如く、小絃は切々として私語に似たり……」

さうして、たうとうあの有名な白樂天の「潯陽江の歌」を、最後まで唄ひ續けた。

今日までは、たゞ愚鈍な、頭の悪い、無學な女中とばかり思ひ詰めてゐたこの女が、琵琶歌の中でも特に長いこの琵琶行の一篇を、一句も漏らさず最後まで、しかも節面白く唄ひ終せたと云

ふことは、昔バグダットの或る王様が、自分の魔術で、小さな壺の中から、雲衝くやうな大入道を呼び出した時の驚愕よりも、私に取つては更に大なる驚愕であつた。しかし驚きは、まだそれに止まらなかつた。潯陽江の歌を唄ひ終ると、彼女の態度は、平素とは打つて變つて、活潑となつた。さうして謠曲でも、端唄でも、俗謡でも、何でも口から出任せに唄つた。のみならず、手振身真似までがそれに添つて來た。殊に『千里鶯鳴いて綠紅に映ず、水村山廓酒旗の風、南朝四百八十寺、多少の樓臺煙雨の中』と、杜牧の名詩を高らかに吟じた時は、實に音吐朗々たるものがあつた。

私達は全く呆氣に取られてしまつた。

『これは實に面白い。まるで緊張病の錯亂状態だ！』と云つて、M博士も非常に珍らしがつた。

私は、わざと忘却の暗示を與へずに彼女を覺醒させた。客が去つた後で、私はそれとなく女に催眠状態中のことを尋ねた。彼女は全然何事も記憶してゐなかつた。のみならず、彼女は琵琶と云ふものすら、見たことがないとの答へてあつた。

その日の私の日記を見ると、『——とにかく、研究に値する不思議な女なり。或は余の年來求めをる二重人格者には非ざるか——』と書いてある。果して彼女は、珍らしい二重人格の女であつた。

話はいよくこれからである。

(五) 『赤鬼が來た、赤鬼が來た』

その翌日、私は愈々この女の研究に着手すべく、再び彼女を夢遊状態に導いた。

こゝにまた一つの面白い現象が現れた。と云ふのは、前日の實驗には更にさういふことはなかつたのであるが、この日は、女が例の不活潑な催眠状態から、夢遊の位置に移されるや否や、二足三足、つま探るやうな足取で歩を進めた後、突然子供のやうな遊面を作つて、大きな聲で泣き始めた。それは丁度、今まで靜穩に眠つてゐたものが、急に恐ろしい夢魔か何かに着かされて、泣き立てたのと同じ有様であつた。そして苦しい聲をしながら叫び續けた。——

『お、こはいよ、こはいよ！ 誰か來て！ 誰か來て助けてくれ！』

『どうしたんだ、どうしたんだ。何がこはいんです。』と、私は叫んだ。

「赤鬼が——赤鬼が来て……赤鬼が来て……」と益々泣き募る。

「赤鬼が来てどうしたんです」と、私はまた叫んだ。

「赤鬼が来て……赤鬼が来て、こんなに私に噛みついた！ お、こはいよ、こはいよ。誰か来て助けてくれい。」と、あちこちへ逃げ廻るやうな態度をする。何時まで経つても泣き止む氣色が見えない。

そこで私は、その赤鬼の何者であるかを糺明する暇もなく、取敢ず「もう赤鬼はゐない。私がおつ拂つたから、もう赤鬼なんかは決してゐない。」と云ふ暗示を強く與へた。

すると、女の泣顔は忽ちくづれて、今にも溢れさうな笑顔に變つた。

「どうもありがたう。もう赤鬼はゐないのか。どうもありがたう。これで生命が助かつた！ ああよかつた、よかつた、よかつた！」と、胸撫で下し、溜息をついて、ほく／＼と喜ぶ。

それから頗る上機嫌となつて、彼女はまた色々な歌を唄つたり、踊つたりした。この日は、サハサ節のやうなものから始まつて、發句やら、洒落やら、地口やら、或は狂言の眞似事やら、或は譯の分らぬ阿呆陀羅經などで獨りはしやいだ。私は再び前夜の琵琶歌を所望したが、私

の言葉にはなか／＼従はなかつた。その代り、白樂天の「琵琶行」の原詩を、そのまゝ、三分の一ほど高唱し、更に頼山陽の「蒙古來」の長詩を、最後まで吟じ續けて、また私を驚かせた。

この日の私の發見としては、夢遊状態中に於ける彼女の動作は、すべて一醜陋者のそれに外ならないことを看破したことであつた。それは、彼女が盛んに歌を唄つたり、地口を並べたりしてゐる合間合間に、(時としてはその唄つてゐる歌や地口が途中で絶句した場合にも)をり／＼判て刷つたやうに、「まあ一杯やれ、まあ一杯やれ」と云ふ言葉を繰返したことに由つて、初めて心づいた一發見であつた。(勿論この言葉は、前日の實驗に於ては、たゞの一度も彼女の唇から出たことのないものであつた)さう心づいて見ると、夢遊状態中に於ける彼女の足取の、よろめきがちに覺束なげなところから、またそのがさ／＼として暫くも落着きのない態度から、乃至はその洒落、その歌、その踊りに至るまで、すべてが醉拂ひとしては、よく統一してゐた。それにしても無學なこの女が——妻が彼女の口から聞いた處に據ると、彼女は小學校も碌に卒業してゐない女であつた。また彼女の父親も、それから一度嫁いだと云ふその良人も、共に賤しい職業に従事してゐた無學者であつた——が、一體何處で白樂天の「琵琶行」を習つたり、また何處で頼山陽

の「蒙古來」を聞いたのであらうか。また平素は見てゐてもだるいやうな、あの萬事に遲鈍な彼女が、果して何處から、あの輕快な踊りの手振を學び、また何者から、あの眞に迫つた醉態を暗示されたのであらうか。或は彼女の一家のうちに、或はその親戚か隣人かのうちに、あゝ云ふ多少學問のある醉漢が住んでゐて、——或はまた彼女が過去の或る時代に於て、さう云ふ醉漢の屢々出入するやうな、旅館か料理屋に奉公でもしてゐて、自然それらの醉漢の言語や動作が、彼女の潜在意識の中に織込まれてゐるのが、突然再現して來たのではあるまいか。私はかう疑はざるを得なかつた。

何にせよ、私は、もう一度この女の素性や生立を、出来るだけ嚴密に取調べて見るのが、差當つての肝要事だと考へた。

(六) 一般知能は十二三歳

中一日置いて、私はわざと彼女の不用意な機會を捕へんがために、彼女が妻と一緒に茶の間の電燈の下で、雑巾綴りか何かやつてゐる折を選んで、四方山の雑談からそれとなく彼女に色々

の問を出して見た。そして彼女に氣つかれないやうに、長火鉢の蔭に忍ばせておいた紙片へ、一その答を書き取つた。本來ならば、催眠状態中に聞くのが最も正確であるのだが、彼女の催眠には前にも云つた如く、盛んに倒錯現象が現れて來るので、己むを得ず、こんなチャンスを利用したのである。

先づ私は、彼女の家庭のことから聞き出して見た。これは煩雜を避けるために、結果だけを書き並べて見ると、次のやうである。尤もあとで分つたことだが、彼女の告白には、大部分に互つて、例の病的嘘言が交つてゐた。

父親の名は坂政明。土方職。酒は少し行けた方だが、酔ふと直ぐ寐てしまふのが癖。歌だの踊りだのと云ふ隠し藝は、微塵もなかつたと云ふ。毎日早朝から土車を挽いて、方々の土搬びや道普請などに従事してゐた。彼女も子供の時、折々この父親の車の後押しをしたことがある。文字は漸く日用の手紙が書けるくらゐ。八年前に五十一歳で死んだ。土方にしてはむづかしい名前だ。ねえと私が云ふと、はい、人様からも、始中終さう云つてからかはれよりました、と云つて、彼女も笑ふ。

母親の名は坂きぬと云ふ。良人との間に数名の男女を擧げた。四十九歳で今なほ健在。良人の存生中は機械を日課として家計を助けてゐたが、今では郷里の女學校の寄宿舎で賄方をしてゐる。酒は一滴もいけぬ方。

長女は坂まさで、即ち彼女。明治二十年八月六日の産れ。八つの年に小學校へ上つたが、父親は、土方の娘に學問は無用だと云つて、尋常四年を卒業すると直ぐ學校を下げてしまつた。本人も、學校は別に嫌ひと云ふでなかつたが、成績は餘り善くなかつたと云ふ。それから、母親や妹と共に賃機を織つて、家計の手助けをした。二十三の年に媒介者があつて一度嫁いだ。良人は三十六歳の男で矢張り土方職。その以前にも、ちよいと縁談の口がないこともなかつたが、父親は、『提灯に釣鐘』は不縁の基だと云つて、いつも頭を横に振つてゐたが、今度は『牛は牛連れ』で丁度似合の縁だと云つて承諾したさうである。良人の名は新井太左衛門——これは土方としても適はしい名前だと私は思つた。そこに一年ばかり同棲してゐた後、餘りに愚鈍で萬事に間に合はないから、と云ふ理由で戻された。その時は、父親はもう亡なつた後であつた。それから、また親の家に同居してゐたが、いつまでも母親に厄介をかけるのが氣の毒なので、賃機を

織つて僅かの貯金が出来たのを旅費に、東京へ出て來たのである。良人も酒は毎日少しづつ、飲んだが、歌など唄へる柄ぢやなかつたと云ふ。私の家へ來るまでには、何處へも奉公などした経験はないさうである。

彼女の下には、なほ次女よね、長男春雄、三女きみ、次男夏雄、三男冬雄の五人があつて、或ひは既に嫁いだり、或ひは養子に行つたりしてゐるさうだが、これはこの研究とは、さして關係が深くないので、詳細は略する。また私もあまり立入つては聞かなかつた。なほこの外にも二人兄弟が生れたさうだが、何れも生後間もなく死亡したので、名前すら記憶してゐないのとこのとであつた。

序に彼女の平生を少しく紹介しておかう。彼女の性質は極めて内氣で、不活潑で、人と對話なとする時も、殆ど面を上げて相手の顔を見ることがない。従つて寡言と云ふよりは寧ろ緘黙の方で、家内の者など、對坐してゐる時でも、此方から口を切らなければ、何時間でも押黙つてゐる。全く話題と云ふものが頭にないのである。時には肝要な事まで黙つてゐるので、飛んでもない間違ひを生ずることもある。従つて彼女の口から、或る纏まつた事實を引出すには、餘程の忍

耐と努力とを要する。しかも要領を得ない勝ちである。

正直には働くが、何分機轉が利かないので、その正直が往々にして滑稽に終ることもある。一例を云ふと、客が座敷へ通つた時には、決してその前を歩かないやうになさい、と云ひつけておくと、或る時多勢の客が見えて、みんな壁際にくつ附いて、ぐるりと圓く陣取つてゐた時、そこへ茶を持つて出た彼女は、一人一人の背を押し分けて、狭い處を無理に通らうとするので、後へ私を吹出して笑つたことがある。萬事にかう云ふことが多い。また時には「手が明いてゐるなら一寸来ておくれ」など、云つて呼ぶことがあると、どんな重大な用事をしさしてゐる時でも、直ぐ飛んで来る。此方は、手が明いてゐること、思つて平氣で使つてゐると、その間に釜の御飯が眞黒に焦げたり、鍋の煮物が溢れたりして、大騒ぎを惹起すこともある。いくら云つて聞かせても、「一寸只今手が塞がつてをりますから」と云ふ言葉が出ないのである。否、手が塞がつてゐると云ふことすら分らないのらしい。その後彼女の精密な知能検査を行つたところ、一般知能は先づ十二歳から十三歳までと査定せられた。以てその低能さ加減が推量せられるであらう。靜肅なこと、云へば實に靜肅である。皿小鉢の音など聞えない時には、何處にゐるのかその所

在さへ分らないほどである。獨りて端唄や唱歌など唄つてゐることは、家内中誰一人聞いたことがない。尤も居眠りの名人でもあつたが……

これは、大分後になつて私の試験したことであるが、字は可なりむづかしい漢字も讀める。時々振假名を辿らせさへすると、新聞の雑報や、婦人雑誌の記事ぐらゐは、すら／＼と讀んで、意味も可なりに理解が出来る。書も拙いながらに、郷里との手紙の往復ぐらゐには困らぬ。それで、未だ嘗て一度も自分から雑誌を手にしたり、新聞を取上げたりしてゐるのを見たことがない。見ようとさへ思へば、そんなものを拾ひ讀みするくらの時間と機會は、いくらでも、任意に得られるのであるが。

もう一つ、彼女を紹介するに就いて漏らしてならないことは、かう云ふ性質の人間には有りがちな知覺鈍麻が、この女にもまた著しく認められることである。俗に云ふ「不仁身」に類してゐる。それについて、かう云ふことがあつた。初めて私の家に來た年の夏、彼女はどうしても、蚊帳を釣らない。妻が慫慂と彼女の部屋に釣手まで拵へて、今晚からは屹度釣つてお寐よと云つておくのに、矢張り釣らない。それならば、女中部屋にだけ蚊が少いかと云ふと、決してさうでな

い。朝になつて見ると、眞紅に腹の肥つた蚊が、そこにもこゝにも満足した身體を休めてゐるさうである。つまり蚊の螫すぐらゐは何ともないのらしい。丁度その頃新聞紙上に、何某なる人が多摩川で鮎狩をしてゐる際、藪蚊に螫されてその毒のため、數日後になつて終に倒れたと云ふ、驚くべき記事が掲載されてゐた。そこで私は、その話を彼女に讀んで聞かさせて、是非蚊帳を釣らなければならぬと嚴重に申し渡させたので、漸くその夜からは釣るやうになつた。尤も蚊帳の話は只それだけで済んだのであるが、こゝに一つ、彼女に取つては實に容易ならぬ不幸事が現れた。

それは丁度その年の暮であつた。只さへ仕事ののろい彼女が、一層仕事のがろくなつて埒が明かないので、どうしたことかと妻が訝つてゐると、或る時ふとその右手の中指の非常に腫れ上つてゐるのを發見した。問糺して見ると、二週間程前から、づき／＼と痛んで疼くさうである。實際見ただけでも痛々しげにむくんでゐる。よくこんなになるまで誰にも云はずに、我慢してゐられたことだと思はれる。早速最寄の醫者によつて手當をして貰つたが、容易に癒らない。終に専門の病院へやると、もう手後れて腐骨症になつてゐると云ふ宣告。終に彼女の中指は第一節から

切斷されることになつた。それから約一ヶ月ばかりも通はせたが、どうしても腫が止らない。そのうち病菌は更に第二節の骨膜をも冒して來たので、再び切斷手術を行はねばならぬと云ふことになつた。で私は、どうせ再手術を受けなければならぬものなら、コカイン注射の代りに、催眠術の應用を實驗して見て、豫ての希望を満したいと考へたので、彼女と一緒に病院へ出かけて、院長とも相談の上、彼女を手術臺の上で催眠状態に導き、無事に第二回目の手術を済ませることが出來た。その際彼女は、只をり／＼一寸痛さうな表情はしたが、遂に最後まで覺醒しなかつた。幸ひその後は経過が良好で、程なく彼女の長い苦痛も癒えたのである。

お蔭で私は、催眠暗示が外科的手術に、可なりの程度まで應用し得ることを親しく實驗することが出來た。けれども彼女は哀れにも、右手の中指を第二節から失つて、生れもつかぬ不具者となつてしまつたのである。

話はいろ／＼な方面に脱線したが、これを要するに彼女自身の供述から得た如上の經歷と、またこの日まで私達が觀察して來た彼女の性情や素行の上からは、何處をどう云ふ風に穿鑿して見ても、白樂天の『琵琶行』はおろか、端唄の一つも出て來さうになかつた。私は、彼女の夢遊

状態中に於ける秘密を解くには、矢張り、彼女の夢遊状態に於ける現象そのものを、もつと精細に研究するより外に、施すべき術はないと決心した。

(七) 夢遊状態から出て来る酔漢

それから一週間ばかりの間、私は機会さへあると、彼女を施術室に呼び寄せて、出来るだけ彼女の夢遊状態と親しんで見た。

最初四五回は、例の彼女が酩酊状態(便宜上假にかう名づけておく)の現れる前には、必ず夢魔の一現象の先だつのが常であつた。赤鬼が来て腕に噛みついたと云つて泣くこともあり、またお化が来てこはいくと云つて逃げ廻ることもあり、時には赤鬼やお化の代りに、蜂が螫したの、蛇が喰ひついたのと云つて、泣き叫ぶこともあつた。そしてそれを、私が暗示に由つて取るのでなければ、何時までもその單調な、殺風景な愁歎場が続くばかりで、決してあの陽氣な、愉快な酩酊状態は出て来なかつたのである。丁度この夢魔の一状態が、いはゞ彼女の意識が催眠状態から、その當時まだ人格變換とも何とも譯の分らなかつた、あの變手古な酩酊状態に移行す

るための、甚だ重要な一階段であるかのやうに、私には思はれた。處が四五回後になつてからは、彼女の酩酊現象は、最早この序幕を経ずして直ちに現れるやうになつた。勿論この序幕の有ると無いとは、それに引續いて起つて来る現象の良不良に、何等の關係も持つてゐなかつたやうである。稀には、この夢魔の一段が最初に現れずして、酩酊現象の眞最中に突然挿入されることもあつた。尤もこの魔襲は、近頃は殆ど無くなつてしまつた。

その頃酩酊状態中に於いて、最も屢々彼女の口から唄はれたものを二三、私の記録の中から拾つて見ると、左の如くである。

和歌では、――

酒飲めばいつか心も春めきて、借金取りも鶯の聲。

貧乏の棒が次第に太くなり、振廻されぬ年の暮かな。

金持の金が次第に多くなり、坐り場所なき(または置きどころなき)年の暮かな。

我死なば酒屋の甕の下に埋けよ、若しやしづくの漏りはせなんか。

俗謡では、――

米を見なんせ搗かれて磨がれ、苦勞した末まゝとなる。色の黒いのに白粉つけて、お母さん見とくれ吊し柿。

固い約束石山寺の、石の土臺の朽ちるまで。

何ぼわたしがボー、ロでも、蓬萊豆にしておいて、この頃ちつとも金米糖、外に羊羹、アリ、ヘート。

俳句または川柳では、――

古池や蛙飛び込む水の音。

満月を四角に眺む蚊帳の中。

元旦や親の苦勞を着て遊ぶ。

雪降りに二の字踏み出す下駄の跡。

警句若しくは地口の類では、――

俗人は花を好む、佳人は花を好まず。

手と手と叩いたら、こつちの手も鳴らない、こつちの手も鳴らない、手と手の間に隻手の聲。

雪降りに、大坊主小坊主がつるんでこけて、頭の足がた瓢箪かな。

坊さん、あすこに掛けてある着物は、いつお買ひになりましたか。|| けさ。

漢詩では、――

白樂天の『琵琶行』。杜牧の『江南春』。杜子美の『貧交行』。頼山陽の『蒙古來』、『女海難』、『詠

楠公湊河之死』等。

その他歌ひものでは、琵琶歌、(但し薩摩とも筑前とも何れともつかず) 謡曲、能狂言、義太夫、

チヨンガレ、浪花節、阿呆陀羅經等、何でも来いてある。

醜態中に於ける彼女の最も著しい特色は、覺醒時とは打つて變つて、皮肉に執拗になる

ことである。自分では上機嫌であるくせに、中々人の云ふことを聞かない。例へば、琵琶歌を聞

かせてくれと頼んでも、或ひは吟聲をやつてくれと云つても、何彼と言を左右にして中々容易に

やつてくれない。漸くやりかける段になると、琵琶をやるに云ひながら義太夫をやつたり、吟聲

だと前觸れしておきながら、吟聲とは似ても似つかぬ俗論などを唄ふ。(こゝにもまた、彼女の倒

錯現象があるとも見える) 強ひて吟聲、吟聲と云つて催促すると、『あ、吟聲か――吟聲(人生) 僅

か五十年、時を惜みて勵まずば……』など、茶化してしまふのが慣用手段である。

酩酊状態にある彼女は、恐ろしく饒舌で且つ早口である。不幸にして速記術を知らない私には、とてもその百が一をも書取ることが出来ない。それでも私は何かの時の用意にと、いつも鉛筆を手に握りながら、彼女の研究に従事してゐた。

(八) 久成と名乗り出た第二人格

或る時私は、例の通り彼女を酩酊状態に導いて、頻りにその獨白に耳を傾けてゐると、偶と「君」とか、「僕」とか云ふ言葉の、折々繰返されるのをはつきりと聞取つた。この以前にも、或ひはさう云ふ言葉が彼女の口から漏れてゐたのかも知れないが、とにかく私の耳には、この時初めてこの言葉が、異様に聞かされたのである。私は即座に彼女に對して、

「お前は一體誰ですか。お前の名は何と云ふんですか」と問を出した。

彼女は暫く答へなかつた。

「ね、お前の名は一體何と云ふんです」と、私は重ねて問うて見た。

すると女は、「名は……名は……」とまでは云つたが、その後がまた容易に出なかつた。

「さあ、名は何と云ふんだね？」と私はまた促した。

「名は……名は……久……久……久成！」と女は終に云ひ切つた。

こゝに正直の處を告白しておくが、私は嘗て二重人格の一少年を取扱つた時の経験に徴して、この名前は今この女の頭の中で、即席に作られたものに過ぎないと速断した。(この速断の誤謬であつたことは後になつて分つて来る)けれども、女の口から男の名前を得たことは、私に取つては意外でもあり、また頗る興味あることでもあつた。で、私はすかさず、

「お前は、それでは一體、男ですか、女ですか。」と切り込んだ。

すると、今度の彼女の答辯は頗る早かつた。

「そ、そんなこと、問はいても分つとる。分つとらうぢやないか！」と、あだかも叱るやうに投げつけた。

「なに、分らないから聞いてるんだ。」と私もまた云つた。

「そりやあ分つとるぢやないか、勿論男よ。男と云ふことが分つとらうぢやないか。」ときつぱり答へた。

私は、『これは愈々益々面白くなつて来た』と心に叫んだ。

『年は？』と追つかけて聞いて見た。

『年は——百五十六』と例の皮肉が飛び出した。

『生れは？』

『生れは、阿波國、阿波郡、阿波村、番地百八萬八千八百八十番地！』と、何處までも人を馬鹿にし切つてゐる。

『これは何だ』と、私は彼女の束髪をつ、突きながら、

『男がこんなものを頭に載せるか？』

『それは瓢箪よ』と彼女は言下に答へた。私は確かに一本してやられた。

『それでは、これは何だ！』と、私はまた彼女の帯を指した。

『それは背囊よ』とまた一本参られた。

序に云ふが、近頃ではこの久成君は、男か女かと問はれた時に、決して以前の如く露骨に男とか女とか云ふ語を用ひず、タカ(田力)男だとか、クノ一(くノ一)女でないとか答へるやうに

なつた。また、束髪のことを問はれた時にも、瓢箪とは云はずに、藥罐の蓋だと云ふやうになつた。そして、何故に頭に藥罐の蓋などを載せて歩くかと詰問すると、これは法律第三十二條によつて、つける規則になつてゐるんだ、など、皮肉るのである。

以上の如くにして彼女は、世にも珍らしき二重人格者——而もその第二人格は自らを久成と名乗る多藝多能な一醉漢——であると云ふことが初めて判然したのである。更にその後、この醉漢には、勝代と呼ばれる架空の細君があつて、それが時々この醉漢の酒席に出て來ることがあることも分つて、私の研究は益々迷路に入つたのである。

私は或る一派の心靈論者が、かう云ふ現象に遭遇する毎に、極めて事もなげに埒明けてゐる如く、單なる憑靈としてこの第二人格を説明するだけでは、どうしても満足することが出来なかつた。私は却て反對に、この女が久成と云ふ一醉漢の名の下に、或ひは唄つたり踊つたりするそれらの言語や動作の一切が、嘗ては彼女自身の記憶なり経験なりであつたことを、どうしても疑ふことは出来ない。只それらの記憶や経験が、最初果して何人から彼女の脳裡に吹き込まれ、またどうして終に彼女の第一人格から分裂するに至つたか、こゝに問題となつて残るのである。

そして、この問題を出来るだけ學術的に解決することが、即ち私の彼女に對する研究の、主要な部分をなしてゐるのである。――

かう考へて、私はこゝに初めて私の研究の方針が漸く定まつたことを内心に喜んだ。けれども、この先果してどんな風にその歩を進めて行つてよいかは、まるきり手掛りが見附からなかつた。私は最初何とかして、この第二人格自身の口から、ヒントを引出して見たいと頻りに焦つた。けれども彼は徹頭徹尾、皮肉と我儘から出来上つた醉漢に過ぎなかつた。いろ／＼なことを聞けば聞くほど、此方が益々馬鹿にされるばかりであつた。そこで私はまた一策を案じて、この醉漢からその醉を全然奪ひ去つて、素面の久成なる者に面接して見ようと心を碎いた。けれどもそれも失敗に終つた。私はたうとう行詰まりの状態に立ち至つて、暫くこの研究を抛棄するより外はなかつた。

(九) 初めて彼女の素性が分る

大正七年二月某日、私はまた某學會の需めに應じて、都下の某高等女學校の講堂で、例の二

重人格の女を實驗したことがあつた。この日、彼女の第二人格久成君は、今までにない目覺しい活動を演じて見せた。聴衆は何れも満足の體であつた。私も大いに満足して、一時間餘りて實驗を閉ぢた。休憩室へ戻つて茶を飲んでゐると、そこへ當日來賓の一人であつた一高教授M氏が入つて來た。私は初對面の挨拶をした。

『實に珍しいものを見せてもらつて、ありがたう。――時に、あの女は××の生れぢやありませんか』と、M教授は突然に問うた。

『さうです』と、私は簡單に答へた。

すると教授は莞爾として、

『さうでせう。あの第二人格の使ふ言葉の中には、××でなければ聞かれない方言が混つてゐましたから。――實は、××は私の郷里ですがね。どうです、一つあの女の素性を調べさせて見ませうか。』

闇夜に燈火とはこのことである。私は、是非お願ひしたい旨をくれ／＼も依頼した。

『では、その調べさすべき要點を書いて、私の手許まで送つてください。早速國の方へ云つて

やりますから。』

私は日（ひ）を移（うつ）さず、その調（しら）べさせてもらひたい要（よう）點（てん）を、M教授（けうじゆ）の許（もと）まで書いて送（おく）つた。すると、それから約（やく）二週（しう）間（かん）ばかり経（た）つて、待（まち）ちに待（まち）かねたその返（へん）書（しょ）が届（とど）いた。手紙（てがみ）の文（ぶん）言（ごん）は寧（じ）ろ簡（かん）潔（けつ）であつた。けれどもその内（ない）容（よう）は、私（わたし）に取（と）つて一（いち）々（ざ）驚（おどろ）異（い）に値（あた）するものであつた。——實際（じつざい）この手紙（てがみ）は、私（わたし）がその日（ひ）まで、たゞ想（さう）像（ざう）だだけ築（き）き上（あ）げてゐた様（さま）々（ざ）の假（か）定（てい）を、悉（ことごと）く事（じ）實（じつ）にして見（み）せた貴（き）重（じゆう）なる證（し）券（けん）であつた。

手紙（てがみ）の文（ぶん）言（ごん）は左（ひだり）の如（ごと）くであつた。但（たゞ）し文（ぶん）中（ちゆう）の圈（けん）點（てん）は私（わたし）が假（かり）に附（つ）けたものである。——
さて御（おん）申（まを）越（こ）の件（けん）、大（たい）要（よう）左（さ）の通（つう）り取（と）り調（しら）べ申（まを）候（こう）。第（だい）二（に）人（じん）格（かく）表（へい）現（げん）の坂（さか）ま（ま）の父（ちち）政（せい）明（めい）は、舊（こ）××藩（はん）士（し）族（ぞく）に於（お）いて漢（かん）學（がく）の素（そ）養（やう）あり。諸（しよ）所（しよ）の碑（ひ）文（ぶん）等（とう）を度（た）々（ざ）執（しやく）筆（ひつ）せしことあり。文（ぶん）字（じ）に巧（たく）みにして、晩（ばん）年（ねん）は縣（けん）廳（てい）の淨（じやう）書（しよ）係（けい）主（しゆ）任（にん）として奉（ほう）職（しやく）せり。性（せい）來（らい）酒（しゆ）を嗜（しゆ）み、大（たい）酒（しゆ）家（か）の部（ぶ）類（るい）に入（い）るべき程（ほど）にして、性（せい）情（じやう）も一（いち）種（しゆ）の變（へん）人（にん）めき居（ゐ）たりと云（い）ふ。（中（ちゆう）略（りやく））娘（むすめ）ま（ま）は尋（じん）常（じやう）小（せう）學（がく）卒（そつ）業（ぎやう）の學（がく）歴（れき）、十（じゆ）八（はち）歳（さい）の時（とき）××市（し）の某（ぼう）へ嫁（か）し、一（いち）ヶ（げ）月（げつ）許（げ）りにて離（り）縁（えん）となり、次（つぎ）で市（し）内（ない）××町（まち）の某（ぼう）寺（じ）院（いん）に嫁（か）し、間（ま）もなく又（また）離（り）縁（えん）となり、後（のち）××郡（ぐん）××村（むら）の某（ぼう）寺（じ）院（いん）に嫁（か）せしが、良（ちよ）人（にん）は小（せう）學（がく）教（きやう）師（し）を勤（と）め、この時（じ）代（だい）にま（ま）も讀（とく）書（しよ）を好（この）み、

諸（しよ）種（しゆ）の書（しよ）物（ぶつ）を讀（よ）みしと云（い）ふ。この寺（てら）に居（ゐ）る間（かん）に精（しやう）神（しん）に異（い）状（じやう）を來（き）し、遂（つひ）に又（また）々（ざ）離（り）縁（えん）となり、自（じ）家（か）に歸（かへ）り、引（ひ）續（つ）き加（か）養（やう）中（ちゆう）（中（ちゆう）略（りやく））昨（きの）年（ねん）五（ご）月（げつ）遂（つひ）に無（む）斷（だん）家（か）出（で）をな（な）し、行（ぎやう）衛（ゑい）搜（そう）索（さく）中（ちゆう）東（とう）京（きやう）よ（よ）り書（しよ）狀（じやう）を送（おく）り來（き）り、初（はつ）めて安（あん）否（ひ）を知（し）りしと云（い）ふ。右（みぎ）はま（ま）の伯（はく）母（ぼ）某（ぼう）の直（ぢき）話（わ）なり。大（たい）要（よう）右（みぎ）の如（ごと）くにて、云（い）は、學（がく）問（もん）の家（か）に生（な）れ、二（に）度（た）まで寺（てら）院（いん）に嫁（か）せしと云（い）ふ。經（けい）歴（れき）が参（さん）考（かう）と（と）なるべくと考（かう）へ候（こう）。（下（げ）略（りやく））

果（はた）せ（せ）るかな、彼（かの）女（にょ）の父（ちち）親（おや）は土（ど）方（かた）ではな（な）かつた。彼（かの）女（にょ）の良（ちよ）人（にん）もまた土（ど）方（かた）ではな（な）かつた。しかの（み）ならず、父（ちち）親（おや）は漢（かん）學（がく）の素（そ）養（やう）があ（あ）つて、生（せい）來（らい）の大（たい）酒（しゆ）家（か）で、且（かつ）一（いち）種（しゆ）の變（へん）人（にん）であ（あ）つたと云（い）ふ。一（いち）々（ざ）詭（ぎ）へ向（む）きの事（じ）實（じつ）ばかりである。して見（み）ると、彼（かれ）は朝（あさ）から晩（ばん）まで、殆（たいてい）ど毎（まい）日（にち）酒（しゆ）ばかり飲（の）んで、酔（よ）つては歌（うた）ひ、歌（うた）つてはまた飲（の）み、その間（かん）、彼（かれ）が口（くち）を衝（つ）いて出（で）たところの詩（し）や、歌（うた）や、地（ぢ）口（ぐち）や、酒（しゆ）落（お）や、乃（な）至（いた）は舞（ま）踊（う）ぎ、醉（すい）態（たい）の一切（いっけい）に至（いた）るまでが、意（い）識（し）的（てき）若（じやく）しくは無（む）意（い）識（し）的（てき）に、彼（かの）女（にょ）の幼（せう）い腦（なう）裡（り）に強（きやう）く印（いん）象（ざう）されて、遂（つひ）にそれが彼（かの）女（にょ）の潛（せん）在（ざい）精（しやう）神（しん）の中（ちゆう）に、確（かく）固（こ）たる地（ぢ）盤（ばん）を占（せん）領（りやう）するに至（いた）つたことは、蓋（がい）し推（お）定（てい）するに難（がた）くない。か（か）うな（な）つて見（み）れば、彼（かの）女（にょ）の第（だい）二（に）人（じん）格（かく）の正（せい）體（たい）は、最（さい）早（ざん）判（はん）然（ぜん）したも同（どう）様（ざう）である。殊（こと）に彼（かの）女（にょ）が第（だい）三（さん）回（かい）目（め）の離（り）縁（えん）に先（さき）立（た）つて、『精（せい）神（しん）に異（い）常（じやう）を來（きた）した』とあるのは、何（なに）よりも耳（みみ）寄（よ）りの事（じ）件（けん）である。彼（かの）女（にょ）の人（じん）格（かく）變（へん）換（かん）が、この『精（せい）神（しん）異（い）常（じやう）』と離（り）縁（えん）るべからざる關（かん）係（けい）を持（も）つてゐることは、

殆ど誤りのない事實であらう。實際私は、手紙のこの一節を読んだ時は、驚喜のあまり、覺えず膝を叩いて跳り上らなばかりになつた。そして、『もうこれにて自分のこの研究も全部解決を告げた！』と心に叫んだ。しかし、それは只一時の輕率な幻想に過ぎなかつた。靜に手紙を繰返して彼女の心理に立ち入つて見ると、更に新しき疑問は百出する。

(二〇) 新しき疑問のかずく

いま参考のために、その當時私の心に浮んだ疑問のかずくを、個條書にして書き並べて見ると、左の如くである。

- (一) 彼女が自分の父親の職業を土方であると云ひ、また自分の良人も土方であると云つたのは、故意に私達を欺いたのだらうか、それとも自分自身にもさう信じてゐるのではあるまいか。
- (二) 若し自分自身にもさう信じてゐるとしたら、この記憶の錯誤は何處から來たのだらうか。若しまたそれが、ヒステリー性の虚談症であるならば、もつと醫學的に彼女を研究する必要が生じて來る。

(三) また彼女は私達に對しては、二十三歳の時に一度嫁したことだけは打明けてゐるが、その以前の二回の結婚に就いては、まだ何事も語つてゐない。これも故意の隱匿に基くものか、但しは記憶喪失であるかは、大いに研究すべき問題に屬する。若し果して記憶喪失であるとするれば、これまた非常に珍らしい現象と云はねばならぬ。しかし、單に常識の上からのみ考へて、かう云ふ珍稀な記憶喪失が、絶対に有り得べからざることだと輕々に斷言することは出來ない。アーベルクロンビーの擧げてゐる一例に據れば、或る外科醫は、自分の妻と子供とに對する記憶を全然喪失したといふことである。尤もそれは、馬から落ちて頭を打つて、人事不省に陥つた結果だと云ふ。然らば、この女の記憶喪失は、何に基く結果だらうか。

(四) 次には、彼女が精神異常を來した一件である。これは新たに起つた諸問題の中でも、最も重要な大問題である。この問題が充分に解決されたら、これまで書き並べて來た記憶の錯誤も、また記憶喪失も、大體の見當はつけ得られるのである。先づ疑はれるのは、彼女が精神に異常を來したと認められた時の、前後の詳細な模様である。或ひは、この精神異常を來したと周圍の人々から思はれた時が、即ち彼女の第二人格の最初の出現時ではなかつたらうか。

(五) 次にまた問題となるのは、彼女が無断の家出である。寧ろ因循姑息とも云ふべき彼女の平素の性質から推量して見て、四國の果てから東京まで、無断の高飛びとは實にあつばれの行爲である。とても彼女の心から出た所行とは、容易に受取れないやうな心地もする。或ひはその時、彼女に一時の人格變換が行はれて、一種の夢遊状態で、東京まで辿り着いたのではあるまいか。そしてその人格變換中の彼女が、私の家を尋ねあて、今もなほ變換したる人格のまゝで、毎日せつせと働いてゐるのではあるまいか。——丁度アンセル・ボーンがブラウンと云ふ名前で、一雜貨店を開業したがやうに。若しさうだとすれば、私の知つてゐる坂まさ子は、既に生れながらの坂まさ子とは、多少人格の變換した女でなければならぬ。若し生れながらの坂まさ子を彼女の第一状態とすれば、私の家で働いてゐる坂まさ子は、彼女の第二状態であらねばならない。さすれば彼女の催眠状態中に出て来る醉漢久成君は、正に彼女の第三人格と呼ばねばならないこととなる。かうなつて来ると、私の彼女に對する研究は、益々迷宮に入るわけである。

私の頭には、以上のやうな疑問が、それからそれへと巴になつて湧いて來た。私は何かの手懸りにもならうかと考へて、後れ馳せに彼女の戸籍謄本を取寄せて見た。けれども、何處の田舎

にも行はれる習慣として、子供でも出来なければ、嫁いだ先への送籍はしないものと見えて、彼女の鬘頭はまるきり空白であつた。私はまた彼女が大酒家の娘ではあり、殊に三度までも離縁になつてゐる處から推察して、或ひは彼女の肉體に、何等かの缺陷がありはしないかと考へて見た。そこで私はまた事情を打明けて、私の親しい或る病院の院長に、彼女の身體検査を行つて貰つた。けれどもその結果は、何等の異常も缺陷も認められないと云ふことであつた。

終に私は、大正七年の秋、初めて彼女の郷里を訪ねて、母親の口から彼女の生立についての大要を聴取り、またその翌年の秋、再び彼女の郷里に赴いて、彼女の以前の良人なる人から、彼女が精神異常を來した當時の模様を詳細に語られ、彼女の第二人格の由來するところを明かに知悉するを得た。以下、篇を改めて記述することにしよう。

【B】 本篇

(一) 彼女のおひたちと家系歴

二重人格の女坂まさ子は、明治二十年八月六日を以て、四國の西北、瀬戸内海に近い××市に生れた。母親の直話に據ると、まさ子は赤ん坊の時分より物に驚き易く、ちよつとした物音にもすぐ脅かされた。激しい疝性で、育てにくくて、能く泣き、能くむづかり、一度泣き出したら、どうなだめてもすかしても、殆ど聞きわけがない。生來體質が虚弱で、肥立ちが悪く、笑顔の出るのも、匂ふのも、立つのも、歩くのも、普通の子供よりは皆一二ヶ月後れた。殊に胃腸の工合がいつも悪くて、やゝもすると乳をもどすことがある。成長して後も屢々食障りがする。従つて、自宅で我儘に食べ放題に暮すよりは、他家で遠慮氣兼ねしながら寢食する方が、却て健康の工合がよかつた。精神上の發達も普通の子供より遙に後れて、智慧づきも遅く、物覚えも悪い。たまに玩具など持つて戶外へ出ると、直ぐなくして歸つて来る。他の子供に取られるのか、または自分で忘れて歸るのか、いくら訊いたつて分らない。かうしていくら新しい玩具を持たせても、二日と持つてゐたことは無かつたさうだ。言葉使ひは、子供の時分は、さほどにもなかつたが、段々年を取るに従つて、今見るやうな口重になつたと云ふ。

*

*

*

*

まさ子の父坂政明は、餘程高度な變質者のやうであつた。幼少の時の經歷や素行は知る由もないが、彼が生れて二十一二歳の頃、舊藩士の子弟の中から特に選抜されて、東京へ留學を命ぜられたと云ふから、秀才であつたことは推定するに難くない。しかし、政明はその頃から、既に甚だしく酒を嗜んで、頗る奇矯な言語や動作が多かつたさうだ。當時は明治十四五年の頃で、西洋の文物が盛んに輸入されつゝ、あつた時代であるから、政明と同時に東京へ遊學した同僚は、これも英語だの、獨逸語だの、佛蘭西語だのと、ひたすら西歐文明の吸収に汲々たる有様であつたのに、彼は只一人その風潮に逆つて、

『さう貴公等が皆西洋かぶれをしては、どもならんわい。俺は一つ漢學をやつて見よう。』と云つて、何處とやらの漢學塾に出入し、漢詩なども相當に作るやうになつた。

閑人	趁暖日	竹杖	出柴扇	殘雪	半嶺白
麥芽	三寸青	紙鷲	認有響	雲雀	聽無形
好景	不看盡	斜陽	入遠蛸	(早春)	卽事

これは何年頃の作であるか分らないが、とにかく政明の詩の一つとして、まさ子の母親から私

に贈られたものである。書もなかく、達者である。しかし前後四五年間の東京遊學中、別に何處の學校を卒業したと云ふ學歴も持たず、修了證書などは一枚もない。たゞ酒だけは一人前以上に飲み習つて、暫く司法省に奉職してゐたさうだが、明治十七八年頃歸國して、すぐ縣廳に奉職することゝなつた。

政明の父は茶人で、至極内氣な、温良な人であつた。會席など巧みに、謠曲にも通じ、能仕舞にも達してゐた。酒は一滴も飲まない。××藩士で相當の家柄に生れた人である。政明の狷介な性癖がたまらなく嫌ひで、殊にその大酒を憎むことが甚だしかつた。そして政明よりもその弟の政人をひどく可愛がつて、財産なども殆ど全部を弟に領ち與へた。

その政人は、誰が目にも低能者であることが直ぐ分るほど、お目出たい性質の持主であつた。政明は、せめて公債證書の半分だけでも分配されたいと父に強請したが、頑として聽かれなかつた。彼はそれ以來ひどく父を怨んで、明治十九年の春、二十六歳で結婚し、その年の秋、終に父と別居した。そして益々酒に親んで、益々放縱な生活を送るやうになつた。或る時の如きは、父の手から漸くに與へられた若干の金額を受取るや否や、こんな穢はしい金は持つて歸る必要がな

いとて、そのまゝ遊廓に人車を乗り入れ、車上からその金を往來へ撒きちらして、人の争ひ拾ふに任せたことさへあつたと云ふ。別居した時は、妻のきぬ子は既に妊娠してゐた。翌年に生れたのが即ち二重人格の女まさ子である。

それから五年ほど経つて政明の父は死んだ。しかしその時は、最早や彼の遺産全部は、家屋敷と共に次男政人の名になつてゐた。そして本家と云ふのはたゞ名義だけで、政明が父から譲られたもの、總ては、たゞ何の役にも立たない貸金の證文ぐらゐであつた。政明はこの不平と怨恨とを癒すべく、酒にさへ酔ふと屢々大きな聲を立て、低能の弟の家に嗚り込んだ。年老いた母親（これも政人の家に居住してゐた）は、その度に恐怖から神経病を起して、幾度床に就いたか知れない。

弟の家の庭先に、太白樹と云つて、大きな珍らしい白い花の咲く古木があつた。或る年政明がその花を所望したところ、母親はまだ花薔が蕾で、今切り取るのは惜しいから、もう暫く満開するまで待つやうにと云つて與へなかつたため、政明は例の癩癩を起して、その夜酒氣に乗じて弟の庭内に忍び込み、見事な太白樹を幹からばつさり切倒してしまつたこともある。母親は

それらのことを苦に病んで、遂に死病の床に就いたさうだ。大正八年九月、私が政人氏の家を訪問した時は、その當時より既に二三十年も経過してゐたこと、て、例の太白樹の幹からは、再び新しい芽が生長して、既に可なりの太さに達してゐた。

政明の酒は極めて大量で、終日終夜殆ど酒盃に浸るばかり、疾くに酒精中毒症に罹つてゐた。酒を飲むときは必ず友達を呼んで来る。當時政明の無二の酒友に宮坂里溪と云ふ、その地方で可なり名の聞えた畫家もあつた。酔ふと直ぐ大聲を發して、平素愛誦してゐる古人の詩を高唱し、或ひは里溪の山水畫に合せて、贊など書き散らすこともあつた。

描成 一幅米家山

潑墨淋漓貼壁間

何日挂冠住斯境

悠悠自適養心閑

これも私が或る方面から手に入れた、政明の畫贊の一つである。

政明の酒は所謂梯子酒で、決して一處で満足が出来なかつた。そして型の如く酒癖が悪かつた。殊に宴會の歸りなどは、それからそれへと料理屋を飲み廻り、些細なことで直ぐ同僚と喧嘩口論した。月の半ば以上は役所を休んで酒を飲んでゐる。家庭の圓滿に行く筈がなかつた。妻のきぬ子は、まさ子の妊娠中から良人の酒に惱まされて、一通りならぬ辛苦を嘗めた。飲んだ上にも、またあとの催促、一つく口煩いさかなの小言、きぬ子は小使錢すら不自由な貧しい家計の中から、いろく工面して、毎日良人の酒慾を満足させなければならなかつた。しかし、毎晩一時から二時三時となると、彼女はさうく良人の相手ばかりしてゐる譯にも行かないので、赤ん坊に乳房を含ませて添寐をしながら、晝の疲勞にうとくとまどろむことがある。すると、政明はその怠慢をひどく責めて、或ひは妻を打擲し、或ひはこれを足蹴にした。この虐待は年と共に段々と増長して來て、きぬ子が二度目から三度目と出産の數を重ねるに従ひ、益々猛烈の度を加へたやうであつた。まさ子の話に據ると、彼女が十二三歳の頃、或る夜政明は、例の如く居睡りしてゐる妻の胸先に、燦々と閃く日本刀を突きつけて、今にもきぬ子を一撃の下に打倒さんずる氣勢を見せたことがあり、また或る夜は假寐してゐる妻の手足をいきなり嚴重に縛り上げて、井戸側へ吊り下げたりしたことがあるので、今度こそは母親も殺されるものと思つたさうである。その所爲は、頗るサディズムの色彩を帯びたものであつた。しかし流石の政明も、晩年には段々酒の量が減つて來たが、それでも猶一日も酒盃を手にはるられなかつた。それがため、平素

から胃腸がよくない上に、肋膜炎を患つて、一年餘りもどつと床に就くやうになつた。遂に醫師の忠告に従つて、酒瓶が薬瓶に代ると間もなく、明治四十四年九月六日、享年五十一歳で養を易へた。

まさ子は明治二十八年四月、八歳で××町の尋常小學校に上つた。母親の話に據ると、彼女の成績は、讀方は先づ普通の方であつたが、書方、綴方、算術、裁縫などは劣等で、特に手工やすべての技藝は最劣等であつた。書方の際に、どうしても墨を濃く磨ることが出来ず、いつも淡墨で書いてゐた。少しく成長すると妹と心が合はず、毎日のやうに口争ひをし、時には掴み合ひの喧嘩までした。



(子さま坂の時態常)

まさ子の趣味嗜好と云つては、先づ料理法が一番好きで、何か珍しいことをして見たい希望が見えた。母親は常に良人の虐待に堪へかねて、その酒席を逃げ



(子さま坂の時作發)

酒を借りに行つたりした。しかも酒精中毒に罹つた父親には、子供と大人との見界がない。少しでも自分の氣に入らないことがあると、頭を撲つたり、頬を擲いたりした。まさ子の身體には傷痕の絶えたことがない。或る時の如きは、ひどく脊骨を蹴付けられたため、まさ子の脊髄は、今でも第四腰椎を頂點として著しく後彎を呈してゐる。それでもまさ子は、父の酒の世話だけは、泣きながらも能く勤めた。またまさ子は、直ぐ次の妹とは、前にも云つた如く仲が悪かつたが、その次の妹の世話はよくして、乳兒期に母親の乳が出なかつたので、のり(重湯)を拵へて飲ませたりなどした。

この時代から、まさ子の特色とも云ふべき點は、萬事に律義で寧ろ愚直なほど物堅い處にあつた。遅鈍ではあるが、室内を綺麗に取り片付け、殊に貸借關係に於いて最も几帳面であつた。一例を云へば、九歳の頃のことである。或る日新調の雨傘を持つて學校へ行つたところ、放課時間にその雨傘が見當らないと云ふので、みんなが歸るまで一人學校で待つてゐた。が、矢張り自分の傘が見えない。一本だけ残つてゐるにはゐたが、それは自分の所有に屬するものでなかつたので、まさ子はそれまさ、ずに雨の中を、濡鼠になつて歸宅したと云ふことである。

明治二十二年三月、彼女は尋常小學四年を修了すると同時に退學した。家の貧しいのもその原因の一つであつたが、彼女の學校嫌ひなのも、また大きな理由の一つであつたらしい。爾來彼女はずつと自宅にあつて、家事を手傳つたり、賃機を織つたりして、苦しい家計を助けてゐた。

かう云ふ薄暗い少女の身にも縁談は持上つた。そしてまさ子は十八歳の時、瀬戸内海の對岸、H縣K市の某家に嫁いだ。両親とも先方の家庭の事情は能く知らなかつたが、媒妁人と云ふのが政明の酒癖を利用して、酒の上でうまく政明を取込んで、強ひて結婚を承諾させたのだと云ふ。しかるに、行つて見ると、事實は意外のことばかりであつた。

先方の家業はおき屋(遊女屋)であつた。良人なる人には、既に先妻があつて、まだ事實上離婚の手續が済んでゐなかつた。財産はあつたが、その財産は良人の義兄に當る人とか管理してゐた。その義兄は金に野心を抱いてゐたが、弟の先妻は小學校の女教員で、相當に教育もあり、辯舌も立ち、一通りの理窟は辨へてゐるので、義兄はこれを邪魔者にして、弟の妻を取替へさせて、その財産を自由にする策を講じようとした。そこで彼は、先妻に色々の難癖をつけて、遂に弟と離別させた。そして急に媒妁人を頼んで後妻を捜させた。その候補者に選定されたのがまさ子であつた。ところが弟は新妻を迎へても、矢張り義兄の意のままに財産を自由にさせることはしなかつた。且つまた、まさ子の愚鈍を嫌つて、一ヶ月も経たないうちに、再び先妻を呼び返した。同時にまさ子は不縁となつて、両親の家に送り返された。

翌年彼女は、また二度目の結婚を餘儀なくされた。初婚に破れた彼女は、決してそれを喜ばなかつたが、強ひて両親の前にそれを拒絶するだけの勇氣は勿論なかつた。結局まさ子は両親の云ふなりになるより外はなかつた。嫁いだ先は、同じ×市内の一寺院で、その檀家には呉服屋が非常に多かつた。で先方の意向では、檀家から澤山の裁縫仕事を引受けて、まさ子にそれを仕立

てさせ、いゝ金儲けをする算段であつたらしい。ところがまさ子は前にも云つた如く、裁縫は特に不得手であつたので、先方でも直ぐに愛想をつかして、三月と経たぬうちにまた歸された。

再度の結婚に破れたまさ子は、その後ますます陰鬱寡言の人となつて、家人からは絶えず、氣でも狂はなければよいがと氣遣はれたさうである。爾來數年間、たとへ結婚の話が持上つても、まさ子はそれに耳を藉さうともしなかつた。

(三) 彼女の最初の人格變換

第三回目の結婚がまさ子のおびえた心を摘にしたのは、それからずつと後のことであつた。その時まさ子はもう二十四歳になつてゐた。政人の妻の父親が、萬事仲介の勞を取つた。先方は×市から三四里を隔てたEB村で、安井大立と云ふ眞言宗の僧侶。既に一ヶ寺の住職となつて、その村の小學教員を兼ねてゐる人であつた。まさ子の兩親は例によつて、先方の事情などは能く知らなかつたが、媒妁人が此方の縁家であるのと、それに相性がいゝと云ふので、安心して直ちに話を取りきめてしまつた。そしてその年(明治四十三年)の暮に近く、まさ子は遂に三度人の妻

となつた。しかし政明の宿痾は、その時既に大分重つてゐたので、實家からは誰一人も結婚の式に列なることが出来なかつた。

安井の寺は千光院と云つた。EB村の殆ど中央に位し、その規模は決して大きい方ではなかつたが、本堂も庫裡も調和よく整ひ、庭も可なりに廣く、建物は一體にまだ新しかつた。私がその寺を訪問した時は、丁度初秋の頃(大正八年九月十七日)であつたが、生垣の外には稻の穂が既に重く垂れ、路傍には石竹や彼岸花などが、綺麗に咲き亂れてゐた。山は青く、砂は白く、氣は暖かに、柑橘の畠があちこちに見えて、一帶の風光が南國の面影を偲ばせた。安井は緒顔長髯の人、まさ子を迎へた時が、既に四十を三つばかり越えた分別盛りであつた。豫てからまさ子の父親の、いはゆる文人肌な、才氣や奇行については多くを聞き知つてゐたので、彼女の生來の愚鈍にも拘らず、まさ子をいたはり可愛がつた。そして、こんな氣の利かない鈍い女は、自分の寺のやうな處でもなければ、到底納まるものでないとも同情してゐた。安井の寺には、當時安井の外に小僧が一人ゐただけで、全然係累と云ふものがなかつたから、その點では極めて氣樂であつたが、何しろお寺のことであるから、檀家とは絶えずいろゝの交渉があつた。それに安井は學

校の方に當直があつたり、また寺務やその他出張することもあるので、家を不在にすることが稀でなかつた。その留守中、まさ子は家事の處理について、事毎に失策を重ねた。第一に、彼女は訪問して来た客の名前を忘れる、またはその用向を忘れる。第二には良人から云ひ付けられてゐたことを忘れる、若しくは取違へる。第三には、寺から檀家への勤めを忘れる。それやこれやで、安井が迷惑を受けることも一再でなかつた。已むを得ず手帳と鉛筆とを宛てがつて、一々用件を書留めておくやうにと、嚴重に命令しておくが、それでも要領は決して得なかつた。

『お前のやうな愚鈍な者を相手にしてゐては、こちらの壽命までが縮まつてしまふ。』

同情深い安井も、流石にをり／＼はかう云ふ歎聲を漏らさない譯に行かなかつた。まさ子はまた、かう云ふ言葉をあびせられる度に、良人は先妻に未練があつて、自分を嫌つてゐるのだと心の中で怨じた。その先妻と云ふのは、何かの理由で既に籍まで返してあるのだが、つい目と鼻の間に住んでゐるので、まさ子が嫁いで行つた後も、毎日のやうに千光院へ遊びに来るのであつた。まさ子は口に出すことは餘り無かつたが、腹では常にその女の態度を不快に思つてゐた。或る時こんな事件が起つた。

千光院から程遠からぬ村役場の傍に、今一つ小さな寺が立つてゐる。村の人は地勢上の關係から、千光院のことを上の寺と云ひ、その寺のことを下の寺と呼んでゐる。或る時その下の寺の檀徒の一人から、その下の寺へ、施餓鬼に集めた金を納める筈になつてゐた。その金が期日になつても納まらないので、寺から檀徒へ催促すると、檀徒では既に納めたと云ふ。——子供に持たせて納めさせたと云ふ。そこで子供が取調べられると、間違つて上の寺へ持つて行つたと云ふことが分つた。子供の話では、その時「お寺の奥様」は、頻りに庭を掃いてゐた。それに手渡ししておいたと云ふことである。

下の寺の檀徒は直ちに千光院へ駆けつけて、その金の取戻し方を迫つた。銀貨でいくらく、紙幣でいくらく、確かに子供が持つて来て渡したと云ふ。まさ子はさう云ふ金を受取つた覺えは更に無かつたのであるが、さてそれを受取らないと、きつぱりはね付けるだけの勇氣もなかつた。丁度その時、千光院の本堂では、多勢の檀家が寄集まつて集會を催してゐた。まさ子はその檀家の人々に事情を訴へて、無法な請求者を撃退してもらふだけの考へも出なかつた。彼女は只おど／＼しながら曖昧な返答をした。その曖昧な返答が、下の寺の檀徒をして、益々まさ子を疑

はしめるやうになつた。

『とにかく私とこの子供は、確かに奥さんにその金を渡したと云ひよりまずければ、どうしても返してもらはにやなりません。』かう云つて下の寺の檀徒は歸つた。

總ては安井が不在中に起つたことである。翌日安井は歸つて来て、その話を聞いて驚いた。

『そして、お前はその金を受取つたおぼえはないのかい。』

『私は、受取つたやうには覚えませんが……たしかに渡したとお云ひるけれど……』

『先方が渡したと云つたからとて、受取らないものは受取らないのぢやないか。』

『でも、たしかに渡したとお云ひるけれど……受取つたやうにも思ひますけれど……』

『受取つたのなら、その金は何處へおいた。——何處かにその金がなければならぬぢやないか。』

『何處へおいたか……おぼえないんですが……』

『馬鹿な。自分で受取つたのだから、何處へおいたのだから、それが分らぬやうな馬鹿なことがある

ものか。自分で自分の頭が信じられないのか……』

まさ子は只俯向いたまゝ、『すみません』と云ふだけであつた。頬には涙が流れてゐた。

怒つても、罵つても、最早や甲斐がなかつた。結局安井はその金を辨償した。

『上の寺の奥様も、おひとは誠によい人ぢやが、親元が困つてゐられると云ひますければなあ……』

村人はかう云つてひそく囁き合つた。この囁きは、安井の耳にも入らずにはおかなかつた。

『お前のために、おれはどのくらゐの肩身を狭くしたか知れない……』

晩酌の後などには、安井もかう云つて胸のむしやくしやを晴らした。

間もなくその金は、下の寺の檀徒の子供が着服して、父親を欺いてゐたと云ふことが知れた。

その子供は不良少年であつた。父親は恐縮して千光院へあやまりに來た。けれどもこの事件のため

に、益々その距離を加へた安井とまさ子との心の隔りは、遂に元通りにはならなかつた。

或る土曜日の晩——それは紀元節の前夜であつた——平日より早く寐た安井が、夜中にふと目

を醒ますと、部屋に燈火が點いてゐて、妻の姿が見えない。最初は便所にも行つたものと思つ

て、氣にもかけずに、またうとくしてゐたが、三十分経つても、一時間経つても、戻つて來る

氣勢がない。聲をかけたが返事も無い。燈火の點き工合も、平素とは違つて少し變である。安井

は怪んで跳ね起きた。

枕許の時計は正に二時を示してゐた。

日記でもつけてゐるのではないかと、安井は先づ二疊の室に突進した。そこは平常まさ子の書齋にあてられた部屋である。しかしまさ子はそこにもゐなかつた。机の上には、安井が彼女に讀ませるべく、學校から持ち歸つた通俗心理学の書物が二三冊。家政學の書物も一二冊、それに混つて、亂雑に置かれてある。ふとその横を見ると、淡墨で次のやうな書置があつた。

私ハ家テイ教イクモジウ分ニウケズ、一家ノ主フトシテノハタラキモ出キマセヌ。何ンノ役ニモ立タナイグドンナ人ゲンデス。コノ上ココニ居レバ、アナタニ御メイワクヲカケルバカリデス。ドウゾ元ノオク様ヲムカヘテ上ゲテ下サイ。私ハ自家ヘモカヘレマセヌ。私ハ生キテハ居ラレマセヌ。私ハ今ヤカギリコノ世ニハ居リマセヌ。

(この書置は、後に安井氏がまさ子の心を安めるために、彼女の面前で焼捨てたさうである。なほ後に研究する處に據ると、この書置は、數日前から認めてあつたものらしいと。)

安井は驚いて小僧を叩き起した。そして二人して家中を捜し廻つた。裏の井戸、庭の泉水、隈なく捜したが見當らない。安井は已むを得ず、最寄の檀徒の一人を呼起し、また仲人の一人をも

呼起した。そして、五六人で手分けして方々を搜索させた。この邊りは、小な池や泉の非常に多い所である。人々は二時間餘も、それらの水溜りを一々検査して歩いたが、何の手掛りもなく歸つて來た。もうこの上は夜の引明けるのを待つて、大捜査を行ふより外に仕方がないと云ふことになつた。

その時不意に裏口の方で、一人の男が頓狂な聲を上げた。

『こんな處にをられた、こんな處にをられた!!』

人々はその方向に駈け寄つた。見るとまさ子は裏口のすぐ外でぶつ倒れてゐる。——着物の裾を繩で高くたしく上げ、乳から下はず濡れになつて、氣を失つてぶつ倒れてゐる! そこは最初に安井も人々も、幾度か往返した處である。思ふにまさ子は何處かの泉に入つて、濡鼠のま、そこまで引返し、遂にそこで倒れたものと察せられた。

早速臺所で藁を焚いて、人々はまさ子を暖めた。

意識が漸く恢復するに従つて、まさ子は只ひいゝと悲鳴を上げて泣き始めた。夜明けになつて、暫くその泣聲が止つたと思ふと、今度はまた痙攣的に笑ひ始めた。それから後は、泣く状態

と笑ふ状態とが、交替に連続した。正午頃になつて、彼女はまた平素の無口にも似ず、大きな聲で詩を吟じ始めた。そしてそれが済むと、また釋迦一代記のやうなものを、曲節をつけて唄ひ出した。その歌は、千光院へ來てから讀んだもの、中にはなかつた。

醫者が來て、鎮經劑を與へたが、中々鎮まらない。午後になつて、やゝもするとまた家を脱け出さうとする。看病に頗る骨が折れた。かう云ふ状態が一週間ほど續いた。その間、安井は學校を休んで、萬事を抛つて介抱した。まさ子は夜も殆ど眠らなかつた。醫者は頻りに催眠藥を投じたが、最初は一貼の頓服で約七時間の睡眠を贏ち得たものが、終には二時間の效力も無くなつてしまつた。

發病の原因は醫者にも更に分らなかつた。安井は、先妻に對するまさ子の嫉妬と不安が、その原因の主なるものではないかと考へたので、まさ子の安心するやう色々と説いて聽かした。けれども、まさ子は只うそだと云つてそれに取合はなかつた。安井は精神療法に關する書物も讀んでゐたことがあるので、更にまさ子の睡眠時を窺つて、同様の説話を繰返した。するとまさ子は眼を閉ぢたまゝで、いかにも安井のその言葉を諒解したが如く屢々點頭したが、眼が覺めると、ま

た元の狂躁な状態に戻つてゐた。

ところが彼女の入水から丁度二十三日も経つて、或る朝まさ子が深い睡眠からふと目を覺ますと、彼女はまた以前の陰鬱寡言なまさ子に復つてゐた。病中の出來事は、全然彼女の記憶に遺らないやうであつた。醫者も、これは不思議だと云つて喜んだ。

しかしまさ子のかう云ふ状態は、決してこの一回では止まらなかつた。その後も、春まだ寒い頃、まさ子はいつになく朝三時頃に目を覺ましたと思ふと、飯を焚きながら頻りに歌をうたひ始めた。黙つて打捨てておくと、何時までも歌つてゐる。飯を食ひながらも、庭を掃きながらも。安井が村人の手前を考へて、それを止めさせようとする、まさ子は却つて泣いたり騒いだりした。夜も殆んど眠らない。醫者の藥劑は例によつて何の役にも立たなかつた。ところが、それも二週間ほどすると、またいつとはなしに元のまさ子に復つてゐた。

そのうち夏になつた。或る夜安井がふと目を覺ますと、宵にゐた妻の姿がまた蚊帳の中に見えない。井戸から方々を捜し廻ると、本堂の佛壇の背後にひっそりと静座してゐる。まるで生人形のやうである。そして翌朝は何も知らないでゐる。

またかう云ふこともあつた。夜中に妻の在所を捜したがどうしても見えない。いよく尋ねめぐんで思案投首をしながら、安井が長火鉢の前で腕組みをしてゐると、思はぬ衣桁の陰でこりと音がした。怪しんで法衣を拂ひのけて見ると、衣桁と唐紙との狭苦しい隙間に、まさ子は氣拔けの體で蹲まつてゐる。身體には、血を吸つた蚊が、氣味悪いまでに簇りたかつてゐた。

かう云ふ状態が、およそ一ヶ月目には必ず繰返された。さすがの安井ももう看護に疲れた。それにその頃安井は、退引ならない師僧の懇望から、二里ばかり隔てた隣村のその師僧の寺院へ、留守居の手傳ひに行かねばならぬこととなつた。それがため學校も辭めて、暫く自家を不在にしなければならなくなつた。彼は自分の留守中、かう云ふまさ子をたゞ一人自家に遺すことは頗る不安に堪へなかつた。彼はこれまでも幾度か離婚を思はないではなかつたが、まさ子の病父から『宜しく頼む』と云はれた時のことを思ひ起すと、どうしてもこの妻を去ることは出来なかつたのであるが、その時はもうまさ子の父も死んでゐたし、母親と兄弟だけならば、迷惑することも少からうと思つて、たうとう離縁することに意を決した。かくして同棲約一ケ年の後、(明治十四年十一月)まさ子はまた親の家に戻つて來た。

以上は、私が千光院を訪問した際、私の研究に充分の理解と興味とを持つてくれた安井氏自身の口から、何等の隔意もなく、赤裸々に語られた談話の主要である。これで見ると、まさ子の人格變換は、正にその入水の時から始まつてゐることが分る。この入水が、彼女の眞意からの自殺企圖でなくして、所謂ヒステリーの狂言的面當的の行動に過ぎなかつたことは、その下半身だけが濡れてゐたこと、その自家の裏口まで戻つて來てから倒れてゐたこととの二事實からしても、推察し得られる。勿論彼女の主意識(第一人格)は、眞剣に死ぬ氣であつたかも知れない。或ひは事實上自殺したとも見られる。何となれば、彼女の主意識はこの恐るべき出來事の瞬間から、忽ち大混亂を招來して、彼女の前半世の記憶と經驗との大部分——幼時の經驗、その讀書力、前二回の結婚、自殺企圖その他のことなど——を全く忘却せしめ、それらを彼女の潜在意識の奥深くに埋没してしまつたから。けれどもまさ子の分裂意識(分裂人格)は、彼女の自殺を中途で思ひとまらせて、全然別個の人物として、再びこの世に蘇生したのである。無口が饒舌になり、陰鬱が狂躁になり、愚鈍が敏捷になり、正直が衒奇になり、律氣が譎詐になり變つてゐる。すべ

てが虚偽虚飾に満ちた別人物である。さうして、かう云ふ別異の兩状態が、彼女の入水後の數ヶ月間に於て、約一ヶ月置きに、四五回も交代に繰返されてゐる。これこそ人格變換の心理的要素を、如實に具備したものとはいはねばならない。

(三) 彼女の上京とA弟二人格の正體

二三年経つた。その間にまさ子の一家は益々窮迫に陥つて、家族は殆んど離散の形となつた。けれども政明が既に死んでゐるので、結局思ひ切つた處置を取りやすい點もあつた。

母親は縣立女學校の寄宿舎の賄方となつて、××市から一二里を隔てたH——町に移つた。長男春雄は、伯父政人の家に引取られた。そしてそこから某銀行の給仕に出ることになつた。次男夏雄は遠い中國筋の、さる有名な禪寺へ小僧にやられた。三男冬雄は姻戚の世話で、さる商家の養子となつた。さうして取残されたまさ子は、二人の妹と一緒に、××市の片隅で小さな家を借受けて、機を織つたり枷を繰つたりして、共に稼ぐことになつた。さう云ふ状態て、また一二年は過ぎた。

そのうち一人の妹のよね子は、さる會社の小吏と結婚することになつた。まさ子はこのよね子とは、子供の時分からあまり仲が善くなかつたので、同居してからも何かにつけて意見が合はず、その度に出戻りの悲しさをつくぐと身に感じてゐたが、次の妹のきみ子とは仲が善かつたので、二人暮しになつてからは、却つて平和に日を送ることが出来た。母親は月に一度か二度、見廻りに歸つて来る。そして二人の娘の生活振を見ては、足りない處を毎月何がしかづ、小遣錢を置いて行くのを例としてゐた。かくてまた一年ばかりは過ぎた。すると、そのきみ子もまた市内の某病院に、看護婦見習として住み込むこととなつた。そしてまさ子はたうとう一人ぼつちになつてしまつた。

まさ子は泌々と身の不甲斐なさを感じた。三十にもなつて、——出戻りの身體で、——まだ母親の脛を嚙つて、——そして、二人の妹にまでおいてけぼりを喰はされて——。陰鬱な彼女の性質は、益々暗い方へ落ちて行つた。屢々彼女は機織る手を休めて、うつとりと放心してゐるやうな時が多かつた。

或る日、まさ子の家の戸が終日開かなかつた。隣人は異なことだと思ひながら、その日は過ぎ

た。その戸は翌日になつても開かなかつた。またその翌日も——。終に隣人はこれを伯父政人の家に傳へた。政人の家からは早速叔母が飛んで来て、押入の中まで捜したが、まさ子の姿は遂に見當らなかつた。二三枚あつた箸の着替を持ち出した形跡がある。

或ひは妹の許へても行つたのではないかと問合せたが、居なかつた。それでは母親の許へかとも思つて、すぐH——町まで出かけたが、やはり其處にも居なかつた。それから大騒ぎとなつて、心當りと云ふ心當りを限なく尋ねたが、終にまさ子を發見することが出来なかつた。

『またE村に行つてゐた時のやうに、氣でも違つて、飛び出しのたちやないかなもし。』
母親と叔母とは、こんなことを云ひ合つて、途方に暮れてゐた。すると四五日ほど経つて、思ひがけもない東京から手紙が届いた。中にはたゞ『無事に着いたから安心して下さい』と書いてあつて、表には住所も番地も何も書いてゐなかつた。

大正六年五月廿八日、朝、まさ子は終に××市を出奔して、翌々三十日の午後、東京品川に着いた。そして、その翌三十一日の夕方、初めて私の家を訪れたのであつた。

それから後のことは、既に序篇に書いておいた通りだから、こゝに繰返す必要はない。

ところが大正八年一月になつて、坂まさ子は、また突然人格變換を起して、別の第二人格状態となつた。この状態は、嘗て彼女が郷里にあつて、入水後に屢々繰返したそれと同一のものであつて、前の催眠状態から誘導された第二人格とは、いろいろの點において趣を異にしてゐる。すなはち坂まさ子には、二種の相異つた第二人格が出現すること、なつた。私は便宜上、前者を彼女のA第二人格と呼び、後者を彼女のB第二人格と呼ぶことにしてゐる。で、私は、更にこの新しいB第二人格の説明に筆を進める前に、先づ彼女のA第二人格の正體なるものを、その後の研究に従つて、こゝに總括的に記述して見たいと思ふ。

坂まさ子のA第二人格は、いつも催眠状態から誘導される。但し催眠状態から誘導されるといつても、催眠術の暗示で喚起されるのではなく、催眠状態を基調として、その状態中から自然に發現して來るのである。覺醒状態から直接に、または催眠状態を経過せずして他の状態から自然に、このA第二人格の誘起されたことはまだ一度もない。この人格は私が既に序篇に詳述しておいた如く、偶然の機會から發見されたものであつて、その後私の施術に依つて、今日までに

無慮數十回も實驗されてゐるが、いつも久成と自稱する同一の男性的人格が、同一の酩酊状態に於いて出現して、更に變異するところがない。

今彼女を催眠状態に導いて、更にこれを平穩なる自然的夢遊状態に移し、暫時その儘に放置すると、そこに一二分間の沈黙が続く。ボーリス・サイデイスのいはゆる Hypnotic state である。すると程なく第二人格が、獨りてにそこから生れ出て來るのである。

時によるとA第二人格の出る少し前に、夢魔に類した一苦悶状態が、彼女に起ることもある。「赤鬼が來た」とか「虎が出て來た」とか云つて、恐ろしい聲して泣き叫んだり、または逃げ廻つたりすることである。黙つて打捨てておけば、いつまでもその夢魔の状態が続く。私が暗示でその恐ろしい對象物を取除いてやらなければ、決してA第二人格は活動しないのである。

「もう赤鬼はゐらない!! 私が追拂つてやつた!!」とか、

「もう虎は逃げてしまつた。少しも危険なことはない!!」

とかと云つて、安堵の暗示を與へると、

「あ、さうか。それはありがたう。もう赤鬼はゐなくなつたか、それはありがたう。やれ〜

安心した。まあ君一杯やり給へ!!」

などといつて、茲に初めてA第二人格が活動を開始する。して見ると、この夢魔に襲はれてゐるものそれ自身が、既に坂まさ子ではなくして、彼女のA第二人格——自稱久成君——であるらしい。

尤もこの夢魔の状態は、必ずしも常に出現するとは限らない。最初から一向に出て來ないこともある。稀にはまたA第二人格の活動中に、突然出現して來ることもある。

A第二人格が自ら名乗つてゐる久成といふ名前も、最初は單なる出鱈目と私は思つてゐるが、その後彼女の母親に就いて調査した處に據ると、實は幼くて死んだ彼女の弟の名前なのである。尤も彼女の弟は、字で書けば久成であるが、實は「ヒサシゲ」と呼んださうである。しかし彼女のA第二人格は自ら「ヒサナリ」と呼んでゐる。が、これは彼女の潜在意識中に貯へられてゐる弟の名前の文字を、そのまま借用して來たことは云ふまでもない。(彼女の母親の話によると、この「ヒサシゲ」は五歳で没した。それが死んだ時には父親の政明も非常に落膽して、それ以來彼の酒亂も少しは穩かになつて來た。従つてこの以後に生れた子供達は、まさ子ほどには父親の

酒亂の恐ろしさを知らないさうである。

またA第二人格ヒサナリ君は、勝代といふ假空の細君を持つてゐるが、これも生後數日で不幸にも身まかつた、彼女の妹の名を借りて來たものである。

左に最近某所で實驗した際の、A第二人格の活動の一節を速記録から抄録して、お目にかけてう。

* * *
A第二人格、現はれるなり直ぐ、「お、寒い〜。寒くてしようがない。」

「どうしてそんなに寒いんですか。ストーヴもあるし、暖かいぢやありませんか。」と私がいふと、

「ストーヴなんかは無くてもいゝ。とにかく寒くてしようがない!!」

「ぢや、どうすればいいんですか。」

「どうすればいいつて、大抵分つたらうぢやないか。」

「また酒が欲しいといふんでせう。」

「そりやさうよ。そんなことは云はいても分つとる。」

「酒はもう先刻から、あなたの前に出てゐますよ。」

A第二人格、急に相好を崩して、悦に入つて、

「あ、さう——か。もう先刻から出とるのか。——感謝する（と手を合せて）、大いに君に感謝する。君は何と親切な男ぢやな。」

「そりやもう、いつでもあなたには親切ですよ。」

「ついてに肴を持つて來てくれると、もつと親切な男なんだが——」

「いやにおだてますね。肴ももうあなたの前に澤山並んでをりますよ。」

A第二人格、再び相好を一層崩して、「あ、さうか。肴ももう來とるのか。君の親切は僕死んでも忘れぬよ。——山海の珍味も何ぞこれに如かんやだ。——まあ一杯やり給へ。」

「いや、私は酒は飲めないから、あなたおやりなさい。」

「なに酒が飲めない。酒の飲めないやうな奴は、僕大嫌ひだ。酒の飲めないやうな奴は、僕もう絶交だ。」

「絶交は困りましたね。あまり手酷し過ぎますね。」

「絶交が厭なら、大いに飲むべし、(直ちに詩吟になつて)君に勧む、更に一杯の酒を盡せエ……、西の方、陽關を出づればア……故人無からん。無からん、無からん、故人無からん……西の方、陽關を出づればア——故人無からんッ。さあ一杯やり給へ。」

「ありがたう。それぢや一杯戴きませう。」

「なに、それぢや一杯戴きませう?! 君は急に話せるやうになつたね。君はたうとう僕に一步を譲つたね。」

「はい、確かに一步を譲りました。」

「しかし一步は譲つたが、まだ二歩は譲らぬぢやらう。……遂には三舎を避けるんぢやないか。」

「三舎どころか、四捨五入まで避けますよ。」

「今度は吾輩が君に一目を置いたか。あ、コリヤ〜と……」

「時に、あなたは何といふ名の方でしたかね。」

「また君は、そんなうるさいことを訊き出したか。君はほんとうに困るなあ。僕は久成といふ者ぢやないか。そんなこと、君はもう疾うに知つとる筈ぢやないか。」

「それでは久成さん、年はいくつですか。」

「僕は自分の年なんか知らぬよ。勝代にでも聞いて来るがよい。」

「勝代とはどなたですか。」

「勝代とは僕の妻ぢや。いや、以前は僕の妻ぢやつたのぢや。」

「では、今はもうあなたの細君ぢやないのですか。」

「さうぢや、今はもう僕の妻ぢやない。僕はきやつを離縁してしまつたのぢや。」

「なぜ、離縁なんかしたのですか。」

「きやつは僕の酒を飲むのを好まないのぢや。だから僕も面白くないけれ、(久成君もまさ子と同じやうに、屢々その國訛りのけれを出す)離縁してしまつたのぢや。」

「なるほど、——では久成さん、もう一つ君にお尋ねするが、一體あなたは、男のですか、女のですか。」

「なんぢや、またそんなうるさいことを君は聞くか! そんなことは聞かいても分つとるぢやないか。僕の姿を見たら分つとるぢやないか。」

「それが分らないから聞くんです。……一體、男ですか、女ですか。」

「僕はそんな男ぢやの、女ぢやの、いふもんぢやない。僕はタカぢや。」(タカとは田力の意味で、合せる男になる。久成氏一流の皮肉な新作語。)

「なるほど、あなたはタカですか。では、勝代さんは？」

「あれはクノ一ぢや。僕はクノ一排斥論者ぢや。」(クノ一はクノ一で、これも合せると、女といふ字になる。)

「ぢや久成さんはタカだのに、なぜ頭にこんなものを載せてるんですか。」(と東髪を突く)

「それか。それは薬罐の蓋ぢやないか。」

「なぜ、頭に薬罐の蓋などを載せてるんですか。」

「それは法律第三十三條に依つて、薬罐の蓋をつけるべきものなり、といふ規則になつてゐるからぢや。」

「ではこれは何ですか。」(と今度は背の帯を突く。)

すると久成君は急に腕まくりして、威丈高になつて、「苟くも軍國民たるものは、背囊を負ふべ

しといふ規則のあることを、君は知らんか。」(と喝破する。その權幕のをかしさに、聴衆のある者がくすくすと笑ふ。)

「誰だ、今僕に冷笑を浴せかけたものは。笑ひたければもつと心の真底から、大きく笑へ。……男らしく、はつはつはと笑はにやいかん。」

聴衆甲「久成君、君は細君を離縁して淋しくないか。」

「なに、淋しいことは少しもない。あんな勝代は、ゐない方がよつほど氣樂ぢや。」

聴衆乙「それは瘦我慢だらう。」

「なに瘦我慢だと。君は實に怪しからんことをいふね。そんな猪口才なことをいふと、この鐵拳をお見舞ひ申すぞ。」(と兩方の腕をまくり上げる。)

聴衆丙「久成君、ちよこざいとはどんな字を書くかね。」

「ちよこざいといふ字を知らないのか、ちよこざいといふ字ぐらゐる知らないとは、君はよつほど低能と見えるね。」

聴衆丁「しかし久成さん、いくら大きなことをいつても、酒は獨りて飲んでちや、うまくなからう。」

『然り。君は實際にえらいことを云ふ。君は實に同情家だ。全く獨り者の酒はせはしくていかん。ヤレ徳利を取りに立たにやならん、ヤレ爛も自分でせにやならん、だからして以て、

世の中はさてもせはしき酒の爛

徳利の袴、着たり脱いだり。』

聴衆またどつと笑ふ。(以下略)

しからば、このA第二人格久成氏の正體は何であるか。

すべての潜在意識現象と同じく、坂まさ子のA第二人格活動も、亦その大部分は彼女の過去の記憶と経験の再現に過ぎない。先づこのA第二人格久成君の性格の中心をなしてゐるものは、云ふまでもなく彼女の亡父坂政明氏の性格そのものである。(これは彼女のB第二人格に就いても又同様である。)いつ出て来ても酩酊状態であること、而もなほ常に酒を求めて止まないこと、好んで漢詩を高吟すること、諧謔奇警の言に富むこと、俗語を唄つても決して淫靡猥褻の語を口にせざること、常に保守的なる道德觀念と高潔なる風格とを保持し、また一種の皮肉なる人生觀を披

瀝すること、すべて是等の特色は、平素から李太白に私淑することの深かつた酒中の漢詩人、坂政明氏の性格と風貌との反映でなくて何であらう。そしてこれらの特色を、坂まさ子の潜在意識に植ゑつけたものは、勿論多少は遺傳にも因ることであらうが、その大部分は、四五歳の頃から既に父親の酒席に侍して、(母親は良人の酒亂を恐れて常に逃げ廻つてゐた)日夜その醉態と驕語とに接してゐた結果であることは云ふまでもない。

坂まさ子がA第二人格状態中に歌ふ歌や、詩や、俗語や、酒落や、地口の大部分は、その際彼女が亡父政明の口から聞き覺えたものである。これは大正十三年四月一日、私が彼女の郷里××に於て、母親立會の上で彼女のA第二人格久成を出現させた時、母親の證言したところである。なほその際の母親の言葉に據ると、亡父政明の醉態は久成のそれの如く、屢々立つたり坐つたりはしなかつたが、その態度や動作は全く兩者瓜二つであつて、特に物の言ひ振りや、また時々腕まくりして意氣込むあたりは、全然亡父の面影そのまゝであるといふ。また政明氏は單に詩吟のみならず、都々逸でも、端唄でも、何でも巧妙に歌つたさうである。

但し政明は謠曲や能狂言はやらなかつた。また筑前琵琶もやらなかつた。然るにまさ子のA第

二人格久成は、屢々謠曲もやれば、筑前琵琶もやる、また能狂言も舞ふのである。尤も漢詩やその他の端唄俗曲に於けるが如く、纏まつて何一つ完全にやれるものはないやうであるが、とにかく断片的には、『羽衣』の一節、『鉢の木』の一節などを巧みに謠ひ、琵琶では『西郷隆盛』の一節、『川中島』の一節、能狂言では『末廣』の一節などを、巧みに弾じ、また巧みに舞ふのである。時にはまた即席に、他の端唄や俗曲、若しくは即興的の種々の辭句を、謠曲の節に合せて謠つたり、筑前琵琶の絃に載せたり、能狂言式に舞ひ踊つたりすることもある。母親きぬ子の證言する處に據ると、是等にもまた皆それ／＼根據がある。まさ子の祖父坂政友氏は謠曲の名人で、弟子も非常に多かつた。まさ子は幼時、四歳頃からその祖父の謠曲を聞き覚えて、玩具など抱へて遊ぶ折にも、獨りてその聞き覚えの一節を巧みに謠つてゐたので、『あんな子供に、よくあれだけの節廻しが覚えられたものだ』と、祖父は常に感心して聞いてゐたさうである。またその頃彼女の一家が住んでゐた××町では、一時筑前琵琶が非常に流行して、教授所なども其處此處に出来た。まさ子は幼時またそれを聞き覚えて、獨りて弾じてゐたこともあつた。(勿論琵琶を抱へて歌ふことは知らぬ。たゞ絃の音も口で真似るに過ぎないのである。)また能狂言も彼女が幼時、町の有名

な××神社の祭禮の日に演じられたのを、常に熱心に見物してゐて、それを聞覚えに覺えたものである。即ち彼女のA第二人格の活動は、大部分は過去の記憶と經驗の再現に外ならないのである。

(四) 新らしきB第二人格の出現

坂まさ子のB第二人格は、そのA第二人格とは反對に、全く催眠状態を通過することなしに、常にその第一人格から直接に且つ自然的に出現する。但し最初のうち、このB第二人格は、概ね夜間に於て、彼女が床に就いてうとうととまどろんだ後に出現するか、若しくは前夜は何事もなく、翌朝目を覺ますと既にこの状態になつてゐるのが常であつて、第一状態と第二状態との間に、サイデイスのいはゆる Hypnotic state が明瞭に存在してゐたのであるが、後には覺醒状態中に、突然第一人格からB第二人格に移行することもあつて、その間の境界が次第に不鮮明(少くとも外觀上は)になつて來た。またこのB第二人格状態から普通の第一状態に復歸する場合も、最初のうちは、朝熟睡から目が覺めた時か、若しくは突然或る格段な自覺的刺戟に依つて、自ら復歸したこともあるが、後にはその復歸の經過が極めて曖昧になつて、いつ移行したのか分らな

いやうになつた。

いつでもB第二状態の現はれる三四日前から、坂まさ子は、平素の愚鈍が一層愚鈍になり、仕事も一層のろく、一層仕損じが多く、疲れたやうに茫然として、放心状態に入つてゐるのが常であつた。それがため、後には彼女の様子だけを見て、B第二状態の出現を豫想し得るやうになつた。「もう近いうちに出るだらう」と思つてゐると、必ず誤りなく、出現した。そして、それは大抵彼女の月経の二三日前後であつた。時には私の催眠暗示によつて、その出現を防止し得たと思はれることもある。しかし必然といふ譯には行かなかつた。のみならず、ひとたびB第二人格が出現すると、催眠暗示も鎮静劑も何等の効果をさへ齎さなかつた。たゞ自然の復歸を待つばかりであつた。B第二人格が出現すると、まさ子の態度や動作は非常に焦躁となつて、口數も多く、絶えずせか／＼として落着かず、忽ち泣き、又忽ち笑ひ、浮浪癖が出て、衝動的症狀が現はれ、仕事を放棄して無暗に外に飛び出し、矯飾家となり、色情的となり、美食家となり、浪費家となる。金は持てば持つただけ一度に使ひ果たす。それがため、金を持たせないやうにすると、今度は知合の商店で借りて買つて来る。そして常に袂から何物かを口に入れて、むしや／＼とやつて

ゐる。しかしB第二人格はA第二人格の如く男性的ではない。また女性としての坂まさ子なる本名をよく忘れないでゐる。そして再び第一人格に復歸した後も、B第二状態中のことは大部分記憶してゐる。——勿論、中には全然忘失してゐる箇所もあり、またその記憶が頗る錯誤してゐる點もあるが、——そしてそのB第二状態中の愚なる行動や浪費を憶ひ出しては、獨りていつまでも残念がつてゐる。元來が自尊心の強い女だけに、その悔悟の念も一層激しい。そして再び陰氣な、憂鬱な性格に戻るのである。

このB第二状態は、彼女の東京前にも數回出現したことは既述の通りであるが、しかしそれは私の實見してゐないことであるから、上京後に於ける彼女のB第二人格第一回出現の模様を、少しく詳細に記述して見よう。

大正八年一月十一日。この日私は、いつになく夜遅くまで實驗所の方に留まつて、何かと翌日の準備をしてゐた。丁度その翌る日は、私の學會で例月開催の談話會——この時は新年會をも兼ねた——日に相當してゐたからである。住居の方に引取つたのは、もう十一時を過ぎる頃であつた。茶の間に入ると、間もなく、まさ子は例の如く「お休み」を云ひに来て、直ぐ自分の部屋

の電燈を消して床に就いたやうであつた。その様子には平素と少しも變る處がなかつた。私は長火鉢の前に坐つて、妻と翌日の福引のことなど相談してゐた。やがて物の十分も経つか經たない頃、もう熟睡してゐるべき筈のまさ子が、(彼女は床に就くや否や、直ぐ熟睡に陥つて、翌朝まで殆ど正體もなく寐入るのが日頃の習癖であつた) 突然寢巻のまゝ、てまた茶の間に顔を出して、これから一寸品川の停車場までやつてくれと云ひ出した。私も妻も驚いた。

『今頃から何をしに停車場なんかへ行くのだ』と、殆ど異口同音に反問した。

『あの、父が——父が、停車場まで來ましたけれ、迎へに、迎へに行かになりません……』例のおどくした口調でいふ。その切れぐに出る言葉の調子は、彼女の催眠状態中に出る調子に酷似してゐた。

妻はますます驚き怪しんで、

『ねえや、變なことをいふものぢやないよ。お前のお父さんは、もう十年も前にゐない人ぢやないかえ。』

『はい、それでも、今、停車場へ着くといふ電報が來ましたけれ……』

まさ子は何處までも眞顔でゐる。私は直ぐ夢と推斷した。

『それはお前、夢を見たんだよ。夢だから、また寐るがい、よ。』

『い、え。夢ぢやございません。たしかに電報が來ましたけれ……』

『ぢや、その電報を見せて御覽。』

彼女は一旦自分の部屋に引取つた。そして直ぐまた、一枚の紙片を持つて來て私に渡した。

『これが電報かい。』

私は笑ひながら、それを受取つた。見ると、それは小さな紙片に、鉛筆で十文字だの、井桁だの、無意味な線を書いたものであつた。多分當時三歳の私の二男が、書間彼女に守をされて遊んでゐる時、書き散らした樂書の紙片であつたに相違ない。その紙片が、彼女の枕許に落ちてゐて、睡眠中の彼女の手に偶然觸れたために、かう云ふ夢を構成したのかも知れない。——私は咄嗟にさう推斷した。

『これは子供の樂書ぢやないか。』

『い、え、それは電報です。電報です。』

「電報なら、何と書いてあるか読んで御覧。」

「イマ、シナガワニツク、スグムカヘニコイ。チチ」と、彼女は催眠状態中の人が、幻覺の文字をたどり讀むやうな表情をして讀み終つた。

私は再びその夢であることをよく云つて聞かせて、この眞夜中に停車場などへ行つたとて、父親の來てゐる筈がない。それよりは落着いてよく熟睡するがよからうと、ともかく、まさ子を一旦その部屋に引取らせた。すると程なく、また彼女は茶の間に顔を出して、父親が停車場で待つてゐるから、どうしても一寸やつてくれと嘆願した。

或ひは自然の夢遊状態が現れてゐるのかも知れない。——かう考へると、私の胸には、急に好奇心と研究心とが湧起つた。

「ぢや行つて來てもよろしい。その代り父親に會つたら、直ぐ歸つて來なくちやいけないよ。」私がこの許可を與へるや否や、まさ子は挨拶もそこ／＼に顔を引込めると、直ぐその足で戸外へ飛び出した。私も外套を羽織つて、帽子を鷲つかみにしながら、直ぐその後を追掛けた。呆れた妻をたゞ一人茶の間に残して。——

小半丁ばかりの路次を走つて、往來へ出た時は、もうまさ子の姿は向うの蕎麥屋の角を曲つてゐた。私は一二丁のうちには直ぐ追ひついて見せる積りで、半ば駈足でその後を追うた。處が交番前まで來ると、意外にも彼女は早や原六郎邸の門脇の角を、魔もののやうに走つてゐた。私は彼女の姿を見失はないために、全速力を以て駈け出さねばならなかつた。間もなく私がその角まで來た時、彼女はもう八山の鐵橋前に達してゐた。私は、平素から足の遅い、あの小柄なまさ子が、どうして今夜に限つて、こんなに早く走り得るのか、全く合點が行かないほどであつた。そして心の中で、昔から憑靈のしてゐる人の足は、まるで雲かすみの如くに宙を飛んで行く、と大袈裟に云ひ傳へられてゐるのが、あながち誇張の言として、一笑に附し去る譯に行かないことを悟つた。

電車通りへ出てからは、眞夜中にはあるが、さすがに人通りもちらほらあるので、大きな男がさう無作法に駈け出すこともならず、且つは思ひがけないマラソン競争で大分疲れもしたので、少しく歩調をゆるめて高輪郵便局(その當時は品川驛の前にあつた)の前まで來ると、まさ子は鼻緒の切れた下駄を片手にぶら下げながら、足袋蹴足で、とぼくと停車場前の廣場から引返して

来た。(あとで聞くと、彼女は改札口の處で一二分間立止まつて、プラットホームの中を影のやうに通り過ぎる亡父の姿を見送つたさうである。心靈派の人々に云はせると、確かにまさ子の父の靈魂が、彼女に會ひに来たのだと云ふであらう。)

歸途は往途とは反對に、まさ子の足取も非常に疲れた如く、とぼくよぼくと徐行してゐるので、私も彼女に氣附かれないやう、一二間後れて見え隠れに、彼女の後を靜かに引返した。もう終電車の時間も過ぎたと見えて、電車通りを引返す途中、一度も電車には會はなかつたと記憶してゐる。不思議なことには、往途には大道の真中を一直線に走つたまさ子が、歸途には家の軒下や溝板の細い處ばかりをたどつて、丁度途を失つた小羊のやうに、時々目標でも捜し求めるかの如く、右や左を顧慮しつゝ、とぼくと歩いて行くことであつた。森村男爵邸の前まで來ると、彼女はわざ／＼その門前を、往來から凹字形にはひり込んで歩いた。八山終點(當時は市内電車がそこで終つてゐた)まで來ると、そこに待合してゐた二三人の車夫が、まさ子の變な様子を見ながら、

『あれが跣足参りかい。この寒いに御苦勞さんなことだね。』

と冷かしてゐた。

鐵橋前まで來ると、まさ子は一日岩崎男爵邸の大石垣に沿うて、御殿山への道を誤らず引返したが、やがてまた何か思ひ直した如く、立止まり、あと振り返り、二三步後戻りし、また一二歩進み、暫くその行く方向に迷つてゐるやうであつたが、やがて鐵橋を渡つて品川の町の方へと路を取らうとした。私もまた一二間その方へ尾行したが、鐵橋の向うには交番の燈が紅く光つてゐる。こんな深夜に、こんな身装の女が一人通つたら、或は交番で咎められるかも知れない。咎められたら、屹度この夢遊状態が醒めるであらう。——私はかう考へたので、急に後方から、聲は低かつたが、しかし力強い嚴肅な語調で、

『路が違つてゐるぞ、あとへ引返せ!』といふ暗示を二三度繰返した。後で聞くと、まさ子は鐵橋の向うに、再び父親の幻影を認めたやうに思つたので、つい鐵橋を渡る氣になつたのだといふことであつた。

やがてまさ子は、私の暗示に従つて澁々あとへ引返した。橋の袂で、また停車場の方へ逆戻りしようとするので、これも暗示によつて御殿山への道を取らせた。それから後は別に變つたこ

ともなかつた。岩崎邸と原邸との間の狭いはざまに入ると、路が急に悪くなつたので、(その二三日前雨が降つた) 私はまた後方から「足袋を脱いで懐に入れよ」といふ暗示を與へた。彼女はまたしぶく、その暗示に従つた。家の近くまで来た時、その足袋の片方が懐から落ちたのを知らずに行き過ぎるので、また後方から暗示を與へてそれを拾はせた。

家へ歸つたのは一時過であつた。まさ子はバケツに水を汲んで来て足を洗つた。私はその間に茶の間へ入つて、長火鉢の前で何喰はぬ顔をしてゐた。暫くすると、まさ子は私と妻の前に来て、「お蔭さまで父に會つてまゐりました。ありがたうございました」と挨拶した。そしてまた「お休み」を云つて自分の部屋へ引取つた。それきり安眠したやうであつた。

翌朝になつて、まさ子は昨夜のことに就いては何にもいはなかつた。私は、無論彼女は何事も記憶してゐないものと思つてゐた。なぜなれば、私はそれを普通の夢遊現象だと思つてゐたからである。ところが、その後妻の話に據ると、まさ子は昨夜の出来事をよく記憶してゐて、亡父から電報の来たこと、それを私が夢だと云つたこと、停車場のプラットホームで亡父に會つたこと、その時亡父から、御主人へ宜しくいふやうにとの傳言があつたことなどを語り、妻にも母

にも、度々謝辭を述べたさうである。(私に對しては絶対に沈黙を守つてゐた。)しかし、私がその後から尾行したこと、途中で度々暗示を與へられたこと、足袋を脱いだこと、その足袋を懐から落してまた拾つたことなどは、毫も記憶してゐなかつた。(下駄の鼻緒が切れたので、足袋既足になつたことは記憶してゐた。)

この状態は、嚴密な意味に於いては、彼女のB第二人格(後に説くやうな)といへないかも知れないが、とにかく上京後において、自然的に現れた彼女の最初の人格變換であるから、便宜上これを彼女のB第二人格第一回の出現としておく。その後一二日の間は、彼女は平素よりも一層遅鈍で、且つ一層陰鬱に見えたが、次第にまた普通の第一状態に復つた。

(五) 新しきB第二人格の特徴

それ以來、彼女のB第二人格は、今日に至るまで無慮數十回、自發的に出現してゐる。今その時々出現中に於いて、B第二人格の最も奇矯な言動を摘記すると、左の如くである。

大正八年一月廿一日から、二月八日にかけて、B第二人格第二回目の出現時には、被害妄想的

観念に伴つて、異常行爲が少からず現れた。

その頃、京都帝大講師某の家に出入があつて、五人の子供が焼死したといふ悲惨事が、新聞紙上に報道されたので、私の家でも火の用心を注意してゐた。すると或る夜、まさ子は一日床に

曙先次第啓昌
長迎得東風萬
里春山色青連
雲五彩瞳瞳旭日
映來新

讀筆の中格人二第B子さま坂

鍋を取外させた。すると雨戸を開けて、真夜中に物干臺へ駆け上らうとする。それも叱つて床に就かせた。

その翌々日、まさ子は早朝から、顔に白粉をこたく塗り立てた。第一状態にあつては、決し

て白粉など用ひない女である。それが化物のやうな顔をしてゐるので、今日に限つて何故そんなに塗り立てたのかと、試みに問うて見ると、その答へが揮つてゐる。――

「今日までは、白粉は旦那様や奥様ばかりが塗るものぢやと思つてゐたら、今日は下女でも塗つて構はないといふ規則が出たので、塗つたのです。塗つてもようございますか。それとも、塗つ



人二第B子さま坂
畫繪の中格

ては悪うございますか」と、反問的態度に出て来る。その翌日の午後三時頃、妻が實驗所の

方へやつて来て、今まさ子が臺所で何故か一人泣いてゐるから、早く来てくれといふ。住居の方へ行つて見ると、彼女は臺所の床板の上に坐つたまゝ、茶の空罐を二つ前に並べ、一つの小皿には醤油を少し、もう一つの小皿には、灰、メリケン粉、茶を少しづつ入れて、何故かしくくと泣いてゐるのである。その理由を問ふと、今日は井戸水を汲んではならないといふ規則が出た

が、(その頃品川方面にはまだ水道がなかつた) 水桶には最早や水が少く、土瓶にもあまり残つてゐない。そこで色々考へた末、これだけの原料を加へたら、水が出る筈だと思つて加へて見たが、一向に水が出ない。それがため途方に暮れて泣いてゐると答へる。井戸の水は汲んでもいい、汲んで悪いといふ規則は出ないと、私がいふと、「あ、さうですか。それはありがたい」といつて、大喜びで水を汲みに行き、私の顔を見る毎に謝辭を並べる。まるで人を馬鹿にしてゐるのである。白粉をべたく塗るのと同様に、一種の衝動症と見るべきである。

或る時はまた、子供二人の守をしながら、

『お兄さまの方は五十目ほどお懶巧ぢやが、赤ちゃんは三十目ほどお懶巧です。』

また或る時は、眞顔で妻に向ひながら、

『私は旦那様に、少しも道に外れたことは申し上げませんのに、旦那様は私がお尋ねすると、すぐ千圓もお吐りになります。すると私は一升五合泣きます。その涙を捨てるのが惜しいけれど、明日の御飯に入れて炊かうと思ひます。それは鹽と水の經濟になりますけれど、どんなものでせうか、奥様』と尋ねる。また或る時は、

『人は皆お寒い〜と申しますが、そんなに寒ければ、臺灣へ行つて、春と夏とを一緒に買へば二圓で買へますけれど、お買ひなさいと云つてやりたいが、どんなものでせう。四季を一緒に買へば千圓かゝるけれど、私もお給金で春と夏とを買ひませうと思ひますが、どんなものでせうか。』
また或る時は『旦那様はえらい學問をなされたお方ぢやけれど、何でも御存知ぢやらうと思ひますが、昔から、光陰は矢の如く、日月は流るゝ如しといひますが、まだ一度も矢が空を飛んでゐるのを見たこともありません、またお日様やお月様が水のやうに流れるのを見たこともありませんが、こりやどういふ譯でございますか。』

また或る時は『三四月郡櫻の國、七八月郡團扇の國、九十月郡紅葉の國と、三郡三ヶ國へ旅したいと思ひますが、道順と旅費は何ほどか、りますか、教へてください。』と、禪の問答にもないやうな奇抜な質問を持つて來る。

あんまり五月蠅いから、『今は用事があるからいけない』と云つても中々立去らない。終に聲を大きくして吐りつけると、

『そりや爆裂彈ぢや。破裂ぢや!』と云つて、泣きながら自分の部屋へ歸つて行く。實は故意に吐

られて見たいために、または叱られてこの奇抜な言葉を使つて見たいために、いつまでも愚圖愚圖してゐるものと思はれなかつた。若しまた何か嬉しいことがあると、相好を崩して、『こりや提灯行列ぢや、旗行列ぢや！』といつて喜ぶのである。共にB第二人格の新作語である。

大正八年四月上旬、B第二人格第五回目の出現の時には、著しく躁揚状態を呈し、遺書を残して家を飛び出したりした。

それは人格が變換してから六日目のことであつた。夜九時頃、ほんの五六分ほどの間に、彼女の姿が見えなくなつた。最初は近所の八百屋か荒物屋へ、買物にでも行つたのだらうと、別に氣にもかけなかつたが、二十分経つても三十分経つても、歸つて來ないので、妻が心配して彼女の部屋へ行つて見ると、臺所の茶箆笥の上に、こんな遺書が残されてあつた。

オタヅネクダサイマスな

ゴシンバイナクオヤスマクダサイ

マサコトリヨコウイタシマシタ

シバラクオヒマチクダサイ

フツカメニカナラズカヘリマス（原文のまゝ）

押入の中を見ると、彼女の目星い所持品は、殆ど全部取片附けられて跡形もない。行李の中も空虚になつてゐる。そこで家中大騒ぎをして、一方には警察署に電話をかけたなり、停車場へ人を走らせたり、他方にはまた、家の周囲から、近所の知人、出入商人の宅まで尋ね廻らせたが、皆目行方が知れない。仕方がないので、最早や明日のことと諦めてゐると、實驗所の方の眞暗な臺所の隅から、大きな駢聲が聞えて來た。行つて見ると、彼女は其處で、假死状態になつてぶつ倒れてゐるのである。早速彼女の部屋へ擔ぎ込ませて、床に入れた。翌朝彼女の所持品は、四個の大きな風呂敷包となつて、あちこちから現れた。二個は住居の方の下の物置の中から、一個は實驗所の物置から、最後の一個は芥箱の中から、それ／＼發見された。後になつて判明したことが、これらの行爲は、やはり彼女の衝奇症状の一つであつて、人の意表外に出て、他を驚かせたり、または心配をかけたりに、無上の興味を覺えるためである。しかし、この時は最初の事件でもあつたので、私達はまゝと彼女の術中に陥つて、非常に心配をした。その後彼女が、第二人格が出ると、屢々この手を繰返したが、私達の方では、最早やそれほど驚かなくな

つてしまつた。或る時の如きは、どう捜しても彼女の姿が見えないと思つてゐると、空の風呂桶に身を潜めて、上からすつぱりと蓋をしめ、その中でぐうぐうと寐てゐたこともあつた。そんな時に、吐つたり騒いだりすると、なほ得意になつて屢々繰返すのである。換言すれば、叱られたり願がせたりして見たいのである。それから二日後にも、彼女は妻に向つて、おさつとお菓子を買ひたいから、一寸五反田の町までやつてくださいと云つたが、妻は勿論許さなかつた。すると夕方になつて、また次のやうな書置を残して姿を隠した。

トナリムラ五タンダユキ

七ジ五十分ハツ

捜したら、やはり實驗所の方の臺所へ、いつの間にか自分の蒲團を持ち出して、その中で寐てゐた。

大正八年六月中旬、B第二人格第六回目の出現の時には、また興味ある一種の強迫行爲が現れた。臺所で膳立をするのに、茶碗だの、小皿だの、醤油注だの、箸箱だのを、四角な食卓の上に對角線状に一直線に並べ、それを崩すと、聲を立て、泣く。甚だしい時には、座敷の真中へ臺所

道具や布屑などをせつせと運んで、これも部屋の一隅から他隅へ、對角線なりに一つく並べ、また或る時には、裏口から往來まで、皿、小鉢、茶碗など、ずらりと並べたこともある。また異食症も現れて、食事の度に自分の飯の上へ、炭團を細く粉末に掻き落とし、それへ醤油をかけて食つたりした。それを禁止すると、また聲を立て、泣く。

大正八年八月中旬、第七回目の出現時には、家人の隙を狙つて屢々外出し、街奇症的行爲が非常に多かつたので、監視にも一層骨が折れた。

B第二人格の出現した最初の日の朝、彼女は八百屋へ行つて、晒布一尺賣つてくれと云つた。八百屋の主婦は驚いた顔をして、そんなものはないといふと、彼女は二三歩歸りかけてまた後戻りし、それではメリンスの帶側をくれといふ。主婦は益々目を圓くして、家は呉服屋ではありませんよといふと、それではこれを洗ひ張してくれとて、袂から一寸五分ばかりの小さな切片を取り出して、店において歸つた。それから暫くすると、今度は酒屋の店先に行つて、カッレツ一丁と味のよい炭團五箇とを注文して歸つた。八百屋の主婦も、酒屋の主婦も、大慌てに慌て、飛んで来て『お宅の女中さんが少し變てすよ。これくしかく』と註進に來た。

午後、實驗所の郵便箱の中に、えたいの知れない封書が一通入つてゐた。表は私の名宛になつてゐるが、裏には神田小川町山川眞一郎と書いてある。山川といふ會員はあるが、それは神田小川町に住む人ではない。變だなと思ひながら開封して見ると、中には横書で、次のやうな手紙が入つてゐた。

私事骨膜炎肺結核にて永々病氣の所、養生かなはず、昨夜八時頃よりツイニ永眠致しマシタノデ、コノダンミナサマニヲシラセ申マス。マタ明夜モ十時頃より朝ぼらけマデ永眠いたシマス。

追て、ソオシキノ儀は、精神山醫學寺(註)——私の學會は日本精神醫學會といふ)ニテマイソオイタシマス。コノダンオシラセ申マス。

二仲、造花御供物等かたク御コトワリ申上ます。御線香の煙もカタクゴジタイ致し。

(原文のまゝ)

あとでよく見ると、封筒の表には古切手を剝して貼附してあることが分つた。スタンプが切手にだけか、つてゐて、封筒には少しも痕跡がついてゐないのである。

また或る日、彼女は着衣のまゝで風呂に飛込み、頻りに浴衣の上から「い〜と石鹸を使つてゐるので、妻が見咎めて、なぜそんな馬鹿な真似をするのだと小言をいふと、『私はもう裸體で風呂に入るのは飽きてしまつたから、一度ぐらゐる着物を着て入つてもよからうと思つて入つたのぢや。私はよう考へた上でしたので、なにも馬鹿なことをした覚えはないのに、奥様はすぐ馬鹿ぢやとおつしやる。それぢやどうすればよいのかなあ』といつて、また例の大きな聲をして泣き叫ぶのである。これはずつと後の人格變換の時だつたが、品川の町の洗湯でも、着衣のまゝ、湯槽に飛込んで、他の浴客を驚かし、番頭につまみ出されて、交番へつき出されたこともあつた。

大正八年十月下旬、第八回目の出現時には、臺所で洗物などしながらも傘をさしてゐる。その理由は、槍や鐵砲の玉が飛んで來るから、その防禦に傘をさしてゐるのだといふ。また飯を食ふと火事が出るといつて、飯を食はない時もある。また家の中で寐ると危険なことがあるといふので、屋上の物干場へ蒲團を持ち出して、十月末の寒空に蚊帳を釣つて寐てゐたこともある。蚊帳は例の槍や鐵砲玉を防ぐためである。これは私が夜十二時頃外出先から歸宅の際發見したので、早速注意して下りさせようとしたが、中々下りて來ない。仕方がないから、物干場の中途ま

て登つて行つて、ステッキの先で蚊帳の裾を突つくと、そりや槍が降つて来たといつて、真夜中に屋上の物干場で大聲を立て、泣き出したので、閉口した。真晝間その物干場へ自分の食膳を持ち運んで、其處で食事をしたこともある。

顔に白粉をべたくく塗ることが、暫く遠のいたと思つてゐると、今度は顔中真黒に墨を塗り出



奇術の格人二第B
(一のそ)飾粉的

した。一見おぼけのやうなので、年若い方の女中はそれを見て、恐ろしがつて泣き出した。やかましく叱りつけてそれを洗はせると、今度は鼻梁を境界として、白粉と墨とを半々に塗り立てた。真黒なのよりは、まだしも見よいので、黙つて打捨て、おくと、

いつの間にか、またそれを洗つて、今度は土溝の中の泥を顔中一面に塗りまくつた。これは、原始人が顔に入墨をしたり、文明人が顔に紅や白粉をつけたり、或る種の精神病者が顔一面に糞を塗りまくつたりするのと、同様の心理に基くものであつて、つまり目新らしき化粧法を施して、他人よりも自分を目立たせたいのである。

大正八年十一月下旬、第九回目の出現時には、著しく發揚性で、異様な服装をして外出をしたが、たがった。派手な長襦袢を羽織代りに着て、幅の広い帯を胸てやの字に結んで、顔には白粉や墨をこてくと塗り立て、髪を振り亂して飛び出すのだから、大抵の者は膽を潰してしまふ。金を



飾粉的奇術の格人二第B
(二のそ)

持つて出ると、持つただけ皆な使つてしまふ。しかも別に大して變つたものを買つて來ない。どうしてあんなに金を無くして來るのかと、段々調べて見ると、何を買つても、すべて代價より餘計に金を拂つてゐるといふことが分つた。例へば一寸洋品店に入つて、褌か何かを買つたとする。――

『これはいくらですか。』

『一圓三十錢でございます。』

『私はこんな高い褌を買つたことがないから、もつと負けといてください。』

『お安いのなら此方の方にございます。』

『い、え、私はこれを欲しいんだが、お金が少し足りないんだから、負けといてください。』

『手前共の品は、すべて正札附でございますから、お負けすることは出来ません。』

『だつて私は、これだけしか金を持つてないんだから、これだけに負けといてください。』

かう云つて彼女は帯の間から一圓札を二枚取り出して、番頭の手に渡し、墓口を懐へ入れて店を出る。面喰はされるのは番頭さんで、早速七十銭の釣銭を帳場から出させて、小僧にそれを持たせて後を追駈けさせる。それを知つた彼女は、益々急ぎ足で逃げて歸る。——かうした行爲に彼女は無限の感興を覚えるのである。

或る時は、またこんなこともやつた。市内電車の中で、突然隣席の婦人に向つて、——その婦人は四五歳になる可愛い女の兒を伴れてゐた——一圓札を差出して、

『可愛いお嬢様に何か差上げたいんですが、何も持ち合せがありませんので、失禮ですが、これ玩弄物でも買つて上げてください。』

驚いたのはその婦人で、見ず知らずの、しかも變手古な様子をした女から、何の理由もなしに

金を提供されたのだから、黙つて受取つておく筈がない。

『そんなもの、頂く譯がありませんから』と云つて、まさ子がいくら手渡ししようとしても、絶對に手を出さない。

すると彼女は遂に腹を立て、

『人が折角親切に云つてゐるものを、——』と云つて、その紙幣を子供の袂にねぢ込んだまゝ、ぶいと電車を飛降りてしまつたこともある。勿論かうした行爲は、第二人格出現中のことだけであつて、第一人格に復歸した時には、その無意味な浪費を思ひ出して、いつまでもく惜しがるのである。

大正九年正月元日(B第二人格第十回の出現)には、雑煮を祝ふまでは何のこともなかつたが、暫くの間、兩の頬に梅の花片を幾つか書いて、右の眉の上に『シンネンオメデトウ、皆々様』、左の眉の上には一錢五厘の切手を貼つたものだ。『會ふ人毎にお目出度うといふのが面倒ぢやから、顔に書いておくのぢや』といつてゐる。自分の顔を年賀狀代用にして、郵便函にも入れる積りでゐたのだらう。

年賀に来る人に會ふと、三和土の上に土下座して、「初めてお目にかゝります。永々御厄介にな

りまして」と版で摺つたやうに同じ言葉を繰返す。お客は皆なあつけに取られて歸つて行く。

一月三日の朝は、顔一面に例の如く墨黒々と塗り立て、麵麩屋へ出かけた。人だかりの中を得

意になつて歩いた。そして歸宅すると直ぐ顔を洗つて、素知らぬ顔をして臺所に寐てゐた。

一月五日の朝五時半頃からまた姿を隠した。毎度のことだから別に捜しもせず打ちやつておくと、

八時半頃になつて、御殿山の交番から通知が来た。

まさ子は下大崎の交番に保護されてゐるとのことである。K君と、母と、子供の三人が迎へに行つた。

ある。K君と、母と、子供の三人が迎へに行つた。

交番の巡査の話に據ると、その日の朝六時頃、五反田停車場の向うの踏切の邊りに、うろ／＼してゐる女がある。自殺でもするのではないかと思はれるから、御注意願ひたいと註進に來たものがある。行つて見ると、墨と白粉とを顔に半々に塗つて、異様な服装をした女が立つてゐる。無理に交番まで引張つて來て、住所姓名を尋ねたが、どうしても云はない。何の爲にあんな處に立



B第二人格の奇術 (三のそ)

つてゐたかと訊くと、「自殺するのは厭で／＼堪らないし、人から殺されるのも厭で／＼堪らないし、生きてゐるのも厭で／＼堪らないし、どうすればよいか分らないから教へてください」といふ。精神に異常を來してゐるやうである。いつから彼處に立つてゐたかと問ふと、お星様がちらちらする頃から立つてゐたと答へる。寒くはなかつたかと訊くと、寒くて手も足も凍えてゐるといふ。まあ此方へ來て火に當れといふと、火鉢の前に踞んで両手をかざす。やがて腹が減つて仕方がないと訴へるので、牛乳の壺を與へると、私はこんな白水か、便所に撒く藥のやうなものだといふ。厭だと云つて、飲まうともしない。電話を本署やら方々にかけてゐると、私の家へならば御免ですと云ふ。どうしても心當りが分らないので、交番でも持て餘して、本署送りにしようと思つて



紙手たい書 (にしろおびさわ)

ると、丁度御殿山詰の一巡査が通り合して、初めて住所が分つたのだといつてゐた。それから後、彼女は、B第二人格さへ現れると、同様の異常行爲を常に繰返した。或る時は、臺所道具に手紙を書いて、切手を貼つて、無暗に



(のもたい書を紙手へ蓋の罐空)

ポストに入れに行つたことがある。(寫眞版の一つは、わさびおろしに手紙を貼附けたもので、一つは空罐の蓋へ手紙を書いたものである。) また或る時は、ちよつと外出したかと思ふと、すつかり丸鬚姿に化けて、白粉をこてこてと塗りたくつて、土地不案内の者のやうな風を装つて、車に乗つて歸つたこともある。(第二八九頁挿畫参照) また或る時は、白の手拭地に、

芳紀正二十八才
私はお嬢さんで、お嬢さんは私デス
花恥カシキ名花一輪

と書いて、それを背にかけて往來を歩き廻つたり、また或る時は、非常にエロチャッシュとなつて、三人の書生に交るく、ラヴ・レターをつけたこともある。書生などは青くなつて慄へてゐた。

彼女の人格變換の最も長く續いたのは、大正十三年九月二十三日の時、その夜彼女は何か氣に喰はないことのあつたのを機會に、無斷家出して行方不明となつてしまつた。そして數日後に姫路から手紙が來て、所在だけ分つたが、再び歸京する意志はないやうであつた。その後十一月十八日に、姫路から再び行方不明となつて、爾來約三ヶ月間、生死のほども分らなかつたが、翌年二月十一日、紀元節の正午頃、また飄然と歸京した。無論B第二人格の出現中であつた。その後同年六月下旬まで、約五ヶ月間、B第二人格状態が繼續した。この間にも屢々諸所を徘徊して、警察署に保護されたり、また詰らないことを書き綴つて、各所の新聞紙に投書を企てたりした。

最近の二三年は、私の治療が大分功を奏し、B第二人格の出現も、以前より餘程少くなつたが、それでも、毎年四月頃と九月頃には、必ず人格變換を起して、無斷家出し、數日間諸所を徘徊するのを例としてゐる。

(六) 結語

これを要するに、坂まさ子の人格變換は、ヒステリー患者に屢々現れる、意識分裂の結果である。彼女が真正正銘、まがふ方なきヒステリー患者であることは、そのB第二人格の出現中において、彼女が容易く爆發状態となり、また譫妄状態、朦朧状態、(ガンセル氏朦朧状態も含む)嗜眠發作、假死状態をも現し、また屢々夢遊病に襲はれ、また好んで各地を彷徨徘徊し、私が本書第三章に述べておいた、諸多の症状を悉く具備してゐることによつても證明せられるが、なほその他に、彼女は身體的にも、視野の狭縮、知覺異常、(特に痛覺鈍麻はその甚だしきもの)卵巢痛、常習嘔吐、常習下痢を有し、また精神的にも、感情變轉、自我中心的、虛榮虛飾、病的虛言症等を有することによつて、確證することが出来る。尤も彼女が、時に昏迷様状態に陥り、また著しき衝動症候や拒絶症候を現す點などは、寧ろ早發性痴呆にも類似するが、しかし、彼女の全症状の基調をなすものは、無論ヒステリーである。故に醫學上から嚴密なる診断を下すならば、彼女は緊張病性・ヒステリー性精神病(Katatonische, hysterische Irresin)に罹つてゐるものといふべきである。

なほ、此處に發表した『二重人格の女』一篇は、私の今日までの研究記録の中から、特に通俗一般の讀者に興味ありさうな節々だけを抄録したに過ぎないものであつて、全體の十が一にも足りない斷片である。もつと學術的な報告は、他日を期して大成したいと思つてゐる。

中村古峽診療

毎週日曜、木曜、兩日午前九時より午後四時まで。東京市外品川御殿山七一八(電話高輪一〇四三)にて。

(詳細規定は電話又は郵券封入御問合せのこと)

ヒステリーの療法(完)

中村古峽著譯書目錄

變態心理講義	價二、〇〇	日本精神醫學會發行
催眠術講義	價二、五〇	同
大本教の解剖	價三、〇〇	同
少年不良 ^{化程} と教育	價一、八〇	同
自殺及情死の研究	(絶版)	同
精神統一法	價〇、八〇	同
自己暗示法	價一、〇〇	同
心靈現象の解説	價〇、三〇	同
變態心理と犯罪	價一、五〇	同(取次)
變態心理の研究	價一、八〇	大同館發行
神經衰弱 ^症 の全治 ^法	價二、二〇	主婦之友社發行
ヒステリーの療法	價一、七〇	主婦之友社發行
(小説)變態心理の人々	價一、三〇	大坂屋號發行
(小説)殻	價二、一〇	日本精神醫學會發行
ハル狂人の心理	價一、五〇	同
联想實驗法	價二、〇〇	同
精神分析學	(非賣)	春秋社發行
生命力の發展	(非賣)	春秋社發行
變態性格者雜考	(非賣)	文藝資料研究會發行
邪教と迷信	(絶版)	雄山閣發行

主婦之友

愛讀者諸姉へ

(特別に願ひ申し上げます)

▲『主婦之友』の評判は月と共に高まり、愛讀者の数は驚くべき勢で、日毎に増加しつゝあります。それで、毎月發行後、直ぐ賣切れてしまひます。
 ▲そのために愛讀者諸姉に、とんだ御迷惑をおかけ申す事が少くありませぬ。それで甚だ恐入りますが、御近所の書店へ『毎月宅の方へ届けるやうに』とお頼みになつて頂きたうございます。
 ▲大概の書店では、喜んでお宅までお届け申します。愛讀者十人のうち、六人までは毎月かうして御覽になつて頂きます。どうぞ今月からせひさうして頂きたう存じます。

ヒステリーの療法

昭和七年二月十八日印刷
 昭和七年三月五日發行

定價壹圓七拾錢

著者 中村古峽
 發行者 石川武美
 印刷者 竹内喜太郎
 東京市神田區駿河區南甲賀町十四番地
 東京市牛込區國町七番地
 發行所 東京神田駿河臺
主婦之友社
 (振替東京一八〇)

(日清印刷株式會社印刷)

日本精神
醫學會

中村古峽先生著 「五版」

定價貳圓廿錢

送料
十錢

神経衰弱 全治 する すれば 全治 するか?

本書を一讀し

高等學校、大學時代をさんぐくに神経衰弱のために悩まされた著者が、病人に對する深い同情から筆をとつたのがこの書です。一服の薬も服まず、醫師にもかゝらず、この書一冊を頼りにして、完全に病苦を征服した方が、どのくらゐ澤山あるか知れませぬ。この書によつて、薬や治療器等を賣らうとするものではありません。この書を一讀し、その方法を實行しただけで何人も全治の喜びを得ること確實です。この書には著者の、「どうしても癒さずにおかぬ」といふ熱心が、到るところに満ちあふれてをります。この點で、これまでのありふれた本とは全然趣を異にするものであります。「ヒステリーの療法」を御覽の方には、特に、併せてこの書を御覽なさるやうおす、めいたします。

充實した内容の一部

- ▲神經衰弱症
 - (一) 神經衰弱の起る原因
 - (二) 神經衰弱にかゝつた時の症状
 - (三) 神經衰弱は必ず癒る
- ▲神經質の本體と種類
 - (一) 神經質と神經衰弱の區別
 - (二) 神經質の本體の解剖
 - (三) 内向的過敏性とは何か
- ▲一般性神經質
 - (一) 萬事を苦にして(第一例)
 - (二) 良心の苛責から(第二例)
 - (三) 物事に興味を失うて(第三例)
 - (四) 面接が苦痛(第四例)
 - (五) 身體に現れる種々の癖(第五例)
 - (六) 神經質から送信へ(第六例)
 - (七) 絶望のどん底から(第七例)
 - (八) 色彩に對する偏み(第八例)
 - (九) 福き者のふむべき路は(第九例)
 - (十) 宗教心に類するべきか(第十例)
- ▲疾病恐怖性神經質
 - (一) 神經性心悸亢進症(第十一例)
 - (二) 神經性心悸亢進症の治驗例(第十二例)
 - (三) 神經性心悸亢進症の治驗例(第十三例)
- ▲苦悶發作性神經質
 - (一) 心臟破裂恐怖發作の一例(第十四例)
 - (二) 夜驚恐怖發作の一例(第十五例)
 - (三) 眩暈恐怖發作の一例(第十六例)
 - (四) 腹痛恐怖發作の一例(第十七例)
 - (五) 試験場本朝恐怖發作の一例(第十八例)
- ▲強迫觀念性神經質
 - (一) 強迫觀念の意義
 - (二) 強迫觀念のいろいろ
- (甲) 強迫的恐怖症
 - (一) 強迫的欲求症
 - (二) 強迫觀念と強迫行爲
 - (三) 強迫觀念と強迫行爲
 - (四) 赤面恐怖症の治驗例(第十九例)
 - (五) 赤面恐怖症の治驗例(第二十例)
 - (六) 赤面恐怖症の告白(第二十一例)
 - (七) 正視恐怖症の告白(第二十二例)
 - (八) 正視恐怖症の告白(第二十三例)
 - (九) 對人恐怖症の告白(第二十四例)
 - (一〇) 不潔恐怖症の告白(第二十五例)
 - (一一) 潔癖症の一例(第二十六例)
 - (一二) 黴菌恐怖症の一例(第二十七例)
 - (一三) 中傷恐怖症の一例(第二十八例)
 - (一四) 毒藥恐怖症の一例(第二十九例)
 - (一五) 性病恐怖症の一例(第三十例)
 - (一六) 笑顏恐怖症の一例(第三十一例)
 - (一七) 苦笑恐怖症の一例(第三十二例)
 - (一八) 腹痛恐怖症の一例(第三十三例)
 - (一九) 鑛見強迫觀念の一例(第三十四例)
 - (二〇) 長頭強迫觀念の一例(第三十五例)
 - (二一) 圖書恐怖症の一例(第三十六例)
 - (二二) 汽車恐怖症の一例(第三十七例)
 - (二三) 男性恐怖症の一例(第三十八例)
 - (二四) 酒神恐怖症の一例(第三十九例)
 - (二五) 過去回想恐怖症の一例(第四十例)
- (その他數十項目)

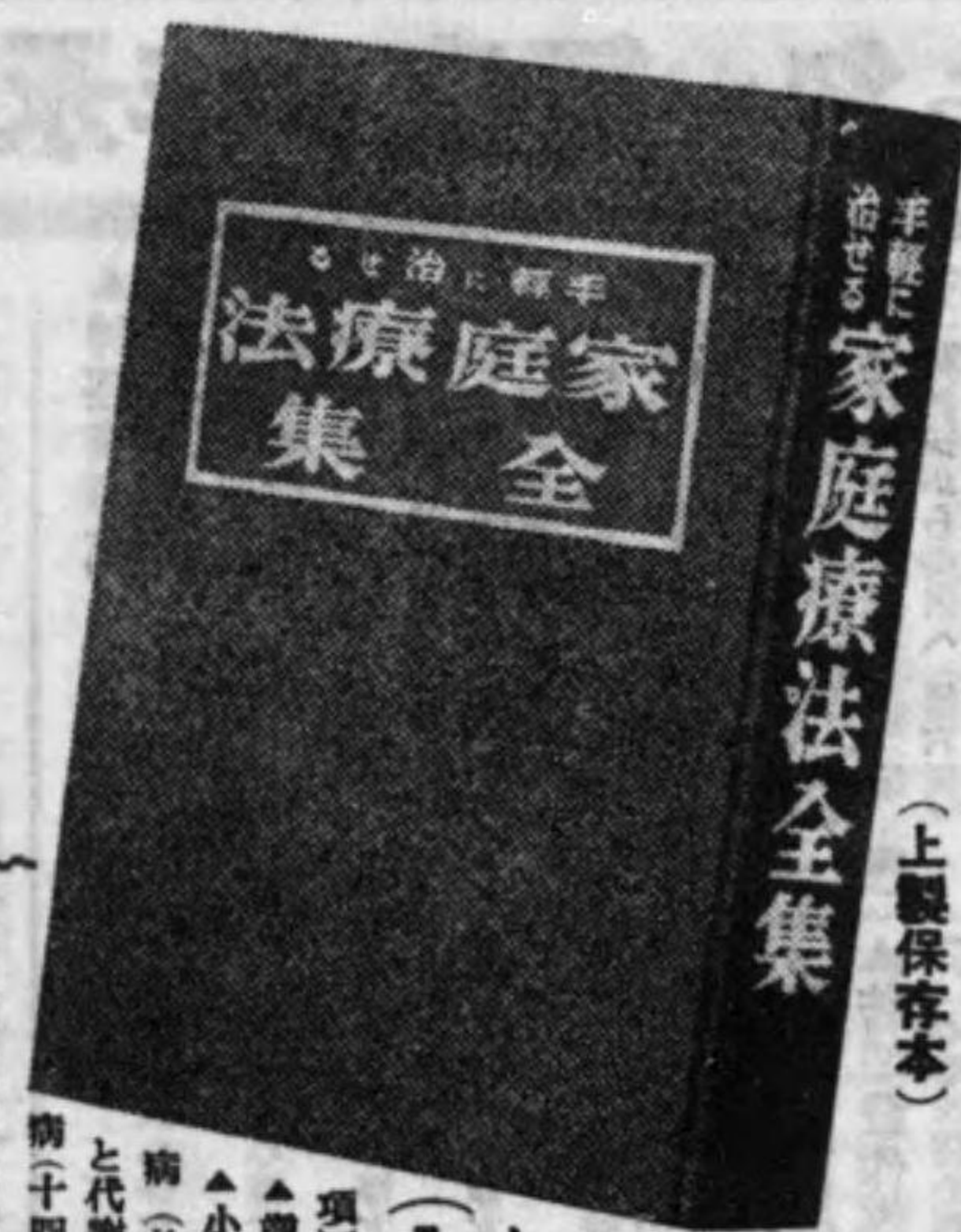
!! 治全ち忽が氣病の年永て

東京神田駿河臺 主婦之友社 (東京一〇八)

家庭療法全集

四六判七百餘頁の大冊!!

(上製保存本)



特價 **六拾錢** (送料十二錢)

本書が手許にあつたお蔭で、一年中お醫者を迎へずにすませたと、大喜びの御家庭が、今日では少くありません。次の御やうに家庭の手當法と豫防法とが、細大洩らさず、すつかりわかるからです。

(内容) ▲家庭看護法 (二十三節、百七項) ▲婦人病 (千一節、五十八項) ▲男女の性病 (十一節、二十八項) ▲整形外科 (六節、十五項) ▲美容整形 (四節、二十項) ▲總の病氣 (九節、十五項) ▲眼と神經病 (十七節、三十項) ▲小兒病 (八節、七十八項) ▲傳染病 (十六節、七項) ▲消化器病 (廿七節、廿二項) ▲妊娠と分娩 (十六節、四十六項) ▲血液と代謝病 (十一節、二十一項) ▲皮膚病 (廿二節、五項) ▲呼吸器病 (十四節、四十四項) その他五種目、全部で五千餘の療法を公開

社友之婦主 (〇八一) 臺河駿田神京東 (〇八一) 京東替振

性生活の新知識

醫學博士 長谷川茂治著
(定價一圓九十錢 送料十錢)

(版六)

著者は慶應大學病院婦人科醫局長の要職にある、婦人科の權威であります。特に主婦之友社の需めに應じ、未婚婦人のために、新婚婦人のために、または分娩前後にある婦人のために、最もわかりよく、眞面目に、性衛生を書きつづけたもの。教師にも両親にもきくことのできぬ問題も、本書によつてはつきり回答が與へられると共に、あやまりなく性衛生の知識を得ることが出来ます。

新胎教

東洋大學教授 下澤瑞世著
(定價一圓八十錢 送料八錢)

(版五)

天才教育は、先づ胎内から——。賢き子を得んとする親は、必ず胎教に留意して、妊娠中の日常座臥を、おろそかに過してはなりません。胎教に心をおかぬことが、可愛い吾が子の上に、如何に恐ろしい結果を招くことか、本書によつてはつきり御承知ください。特にこれから結婚なさらうとする人々に、若き夫婦に、賢き子を得んとする親に、是非御一讀をおす、め申します。

社友之婦主 (〇八一) 臺河駿田神京東 (〇八一) 京東替振

エト7A38

肺病患者は如何に養生すべきか

醫學博士 原 榮 著 好評卅六版!!

(定價二圓八十錢 送料十錢)

肺病は少しも恐るべき病ではないと言ふ——それは何故でありませうか。そして快癒確實の療法とは、どんなものでありませうか。かうした問題に、最もわかりよい回答を與へたのが本書であります。既に數萬の病者を救つた評判書。
▲三著とも、専門の研究により、永年の治療経験により、三博士がそれなりに肺病快癒の道を説いたものであります。いづれも充分信用できる名著ばかりです。

三博士の肺療養書

醫學博士 西川 義方 著

肺病全治早道

強肺健康法

醫學博士 中村 善雄 著

肺病は斯くすれば治る

一圓廿錢 (送料八錢) 著者は肺専門の醫師で、家庭で實行できる療法を、簡単に詳述した名著。
二圓卅錢 (送料十四錢) 著者は宮内省待醫で、肺病の療法を、切實に詳述した名著。

發行所 東京 神田 區 主婦之友社 (田八一替)

終

